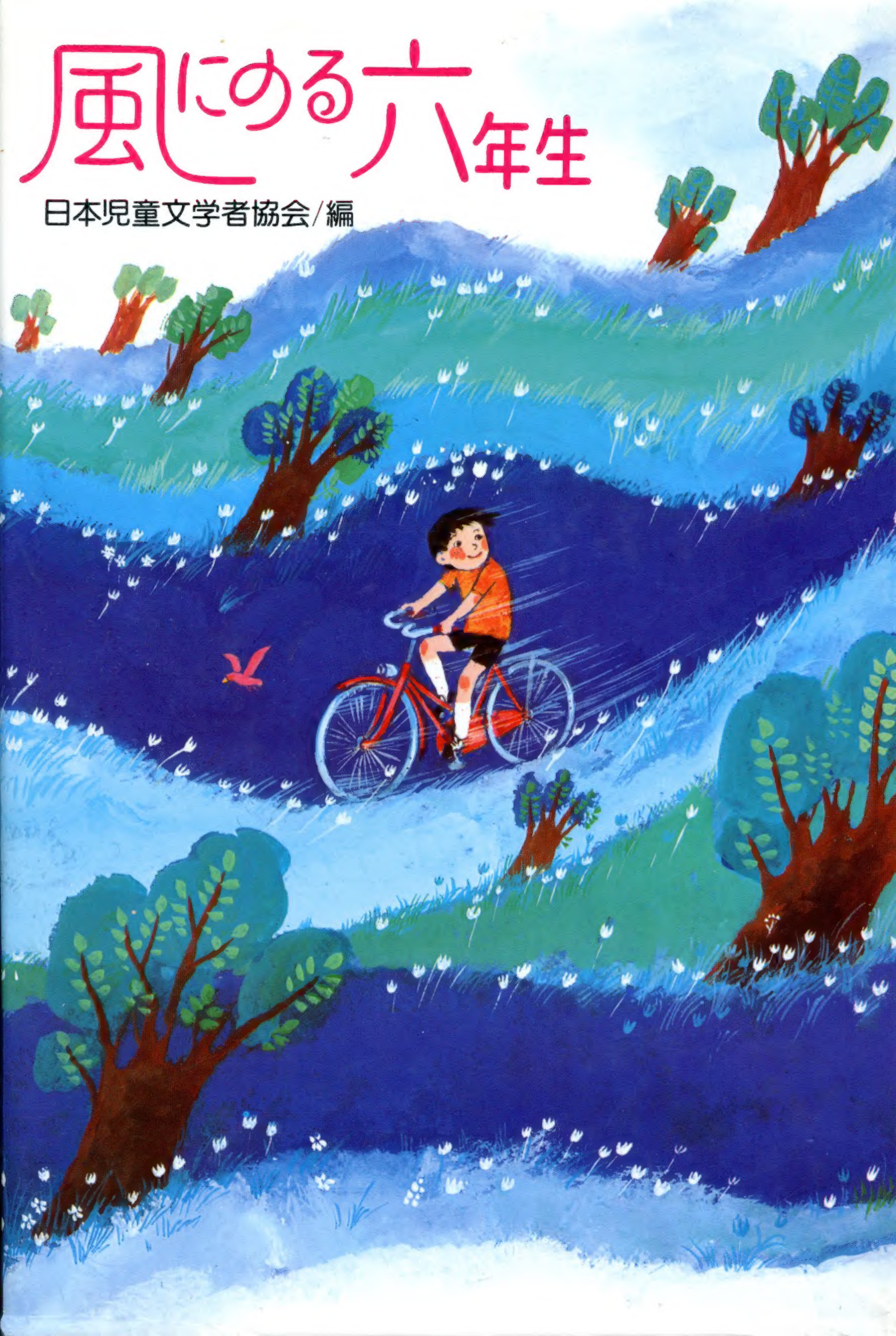
風にのる六年生

日本児童文学者協会/編





『子どもの広場』シリーズの刊行にあたって

日本各地にさまざまな子どもがいますが、彼らは、学校で、家庭で、学習塾で、文庫で、公園で、どのように行動しているでしょうか。

このシリーズでは、そうした現代の子どもたちの生活や意見を、日ごろ子どもたちにじかにふれている人びとによって、文学作品として生き生きと表現していただき、同じ年ごろの子どもたちに読んでもらおうと編集しました。

子どもたちは、これら諸作品の中から自分に似た子や、友だちにそっくりな子をさがしあてたり、反対に異る環境や意見を発見することでしょう。そして、そこから共感がわき、連帯が生じ、楽しい心の広場ができることを、わたしたちは期待し、信じております。

日本児童文学者協会
『子どもの広場』編集委員会
北川幸比古　木暮正夫
長崎源之助　宮川ひろ



子どもの広場 六年生

● 風にのる六年生・ほか16編



日本児童文学者協会／編







はじめに

木暮正夫

「はやく六年生になりたい。」——だれでも、小学校にはいるとすぐ、六年生にあこがれます。六年生は、からだも大きいし、いばってもいるし、めんどうもみてくれます。

ところが、六年生になってみると、あんがいたいへんです。

「きみたちは、最上級生であるからして、じゅうぶんな自覚をもって、下級生のお手本になり、勉強に、スポーツにはげんで、くいのない小学校生活のしめくくりにしてほしい。」

きみ、校長先生にいわれなかった？

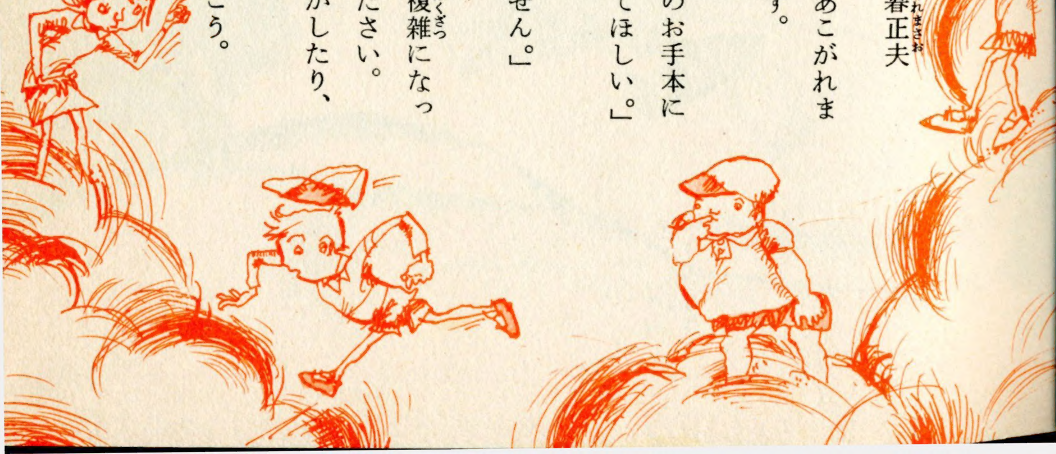
「来年は中学校よ。いつまでも、子どもみたいなことをいってるんじゃありません。」

と、おかあさんにいわれなかった？

勉強はむずかしいし、家のてつだいはさせられるし、友だちとのつきあいも複雑になってきます。にげだしたくなるときもあります。そんなとき、この本をよんでください。

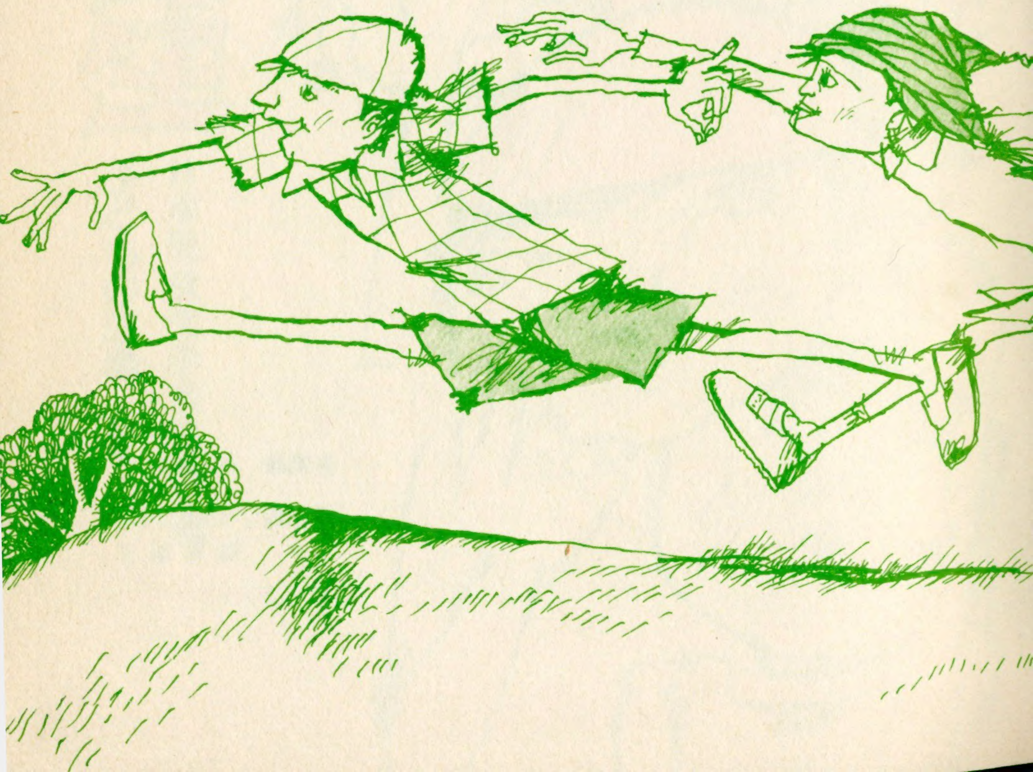
みんな、一生に一度しかない六年生を、せいいっぱいに生きています。けんかしたり、ないたり、わらったりしながら、〈風〉のようにのびやかに生きています。

さあ、風にのって、さっそうといこう。あしたにむかって、むねをはっていこう。



もくじ





表紙絵　岡本颯子

さし絵　うすい しゅん
岡本颯子

風にのる六年生

日本児童文学者協会・編

子どもの広場 6



トマトとパチンコ

後藤竜二



七月は、トマトの季節だった。

雪のあるうちからそだててきたトマトが、いっせいに色づきはじめる。色づいたトマトは、その日のうちにとってしまわなければならなかったから、家じゅうが、総出ではたらいた。

出面さん（アルバイトのおばさんたち）の数も倍くらいにふえ、ときには、一まいの畑に十数人もの人びとがはいって、きそいあうようにトマトをとった。

出面さんは坑夫長屋のおばさんたちだった。朝はやく、とうさんがほろをかけたトラックでむかえにいき、ぼくらが学校にでかけるころに到着して、いっぷくするまもなく、大きな竹の手かごとはさみをもって、トマト畑にはいっていった。

「さっさとかえってこいよ。」

と、とうさんは登校するぼくらにいった。

「ひとさまにまで、てつだってもらってるんだからな。」
朝の毎日のあいさつだった。
ぼくらは、――中学生のおにいちゃんやぼくはもちろん、小学生の三人の妹たちも、学校がひけるとすぐにかえって、てつだわなければならなかった。野球も水泳もサッカーも、三十分くらいしかできなかった。たまに、試験の用意や学級会の用事でおそくなったりすると、
「家のしごともしないで、なにが学校だ。」
と、とうさんにひどくしかられた。
「ほら、もたもたしてないで、着がえてこい。」
わずかに赤みがさしはじめたばかりのかたく青い実が、主屋と納屋のあいだのひろい庭にあつめられて山になっていた。山のなかに、きのう見のこしてしまったトマトがいくつもあった。赤くじゅくして、うす皮をはじけさせているトマトだった。はじけたうす皮をつるりとむいて塩をかけ、三、四こをまたたくまにたいらげてから、「やるかあ。」といって、ぼくらはしごとにとりかかる。
山になったトマトを選別して、農協マークのだんボールばこにつめるのが、ぼくら子どものしごとだった。ひとりひとりがもっている専用の台にこしをおちつけて、ぼくらは三分間に一はこくらいのペースでしごとをした。どの出面さんたちも、ぼくらにはかなわなかった。五人のきょうだいが、みんな、一人前のはたらきてだった。

＊

選別とはこづめがおわると、トラックにつみこんで町の市場まではこぶ。

運転手はとうさんで、荷おろしの助手はぼくだった。去年までは、おにいちゃんの専門だったけど、おにいちゃんは高校の受験勉強をしなければならなかったから、ぼくがやっていたふろたきのしごとと、こうたいしたのだった。

ぼくは運転助手のしごとがすきだった。

トマトを満載した古い型のトラックで、車体をギシギシきしませながら、まがりくねったせまいでこぼこ道を走るのは、たのしかった。三年前までは、馬車でガタゴトかよっていた道だった。今は、おなじ道を、十倍くらいのスピードで走る。路かたのよわい土手でスリップしたり、スコップでほったようなあなぼこにはまったりして、いつ、ぐらっと、車ごとひっくりかえるかわからない。

炭坑につづくひろいアスファルトの道にでるまで、ぼくは神経をぴりぴりさせて、「注意進行。」とか、「左オーライ。」とか、いいつづけた。

でも、とうさんはくわえタバコで、ゆうゆうとハンドルをにぎっていた。ぼくがひやひやしているのを見ると、「けつのあなのちっちゃいやつだ。」とわらって、かならず免許をとったときのじまん話をした。

「校長さんは車庫入れですべったけどな、おれは一発でパスしたもな。」

ぼくらの中学の校長のことだった。

「学のある人でも、こういうのは、やっぱりべつのことなんだべな。」

な、と声をつよめて、目を細くして、ギシギシとおんぼろのトラックを走らせた。



そんなとうさんとふたりっきりで、夕ぐれの道を走るのはたのしかった。

たのしみは、もう一つあった。

市場のかえりがけに、とうさんはかあさんにないしょでよくパチンコをしたから、ぼくは口どめ料に〈びっくりやき〉をおごってもらった。パチンコでかったときには、すきな景品をえらばせてもらえたし、まんがの本や雑誌を買ってもらえることもあった。

（きょうは、やるのかな。）

と、ぼくはいつも気になって、車が町にはいるとすぐに、パチンコ店の名まえをならべて、どこでやるのさ、とよくきいた。

ふんと、とうさんは日やけしたまるっこい鼻をならして、

「あほんだら。」

ちらっとよこ目でぼくをにらんで、みじかくな

ったタバコをぴっとまどの外にはじきとばした。

せり市は、いつも、あっけなくおわる。

十数人で朝からはたらいて、五キロの道をトラックではこんできたトマトの山が、暗号みたいな数字のやりとりだけで、札幌や旭川の問屋さんに買われてしまう。

問屋さんたちとかぎとり（せりをする人）だけのやりとりを、とうさんたちはうしろのほうで、じっと見ているだけだ。どんなに安く買いたたかれても、なんにもいえない。

学校が夏休みになったころから、ハウストマトのねだんはさがりつづけて、きょうもずいぶんとたたかれた。

「これじゃ、はこ代にもならんわ。」

とうさんたちは、せりがすっかりおわっても、なかなかかえろうとはしなかった。ねだんのかきこまれた伝票を、なんどもたしかめるようにのぞきこみあって、

「これだら、ひっくりかえってねてたほうがましだじゃ。」

「おれらも、いよいよでかせぎだな。」

と、口ぐちにはなしあっていた。そのうち、新築したばかりの農協のビルからでてきた専務さんをつかまえて、

「もうすこし、どうにかならんのだべか。」

と、うったえた。

「せりばっかりはね。これあ、どうにもね。」

と、専務さんは、またせてある農協の車と時計を気にしながら、黒い背広のポケットにかた手をつっこんではなした。

「豊作だからね。北海道じゅうが、トマトだらけだもね。たくさんとれれば、安くなってしまうのは、これはもうどうにもならんのだわ。」

「……。」

とうさんたちは、だまっていた。だまって、出荷伝票に目をおとしていた。

「どうしたって、価格保障のある米みたいなぐあいにはいかんけど、そのかわり、あんたら野菜農家は、一発あてれば長者さまなんだからな。」

と、専務さんはいった。そして、農協の車でいってしまった。

「一発あてれば、か――。」

とうさんは、らんぼうに車をだした。ひどくあらっぽい運転だった。ぼくはドアの取っ手にひっしでしがみついていた。びっくりやきも、まんがの本も、だめだなと、あきらめていた。

「あしたは、きっと、高く売れるよ。」

と、ぼくはとうさんにいいたかった。どんなふうにいおうかと考えて、そして、なにもいえなかった。ビ

ニールハウスでそだてたトマトが高く売れるみじかい季節は、もう、おわったのだった。
「移植のしかたも知らんくせに——。」
と、とうさんがいった。ぼくはびくっとして、だけど、だれのことをいっているのかわからなかったから、きこえなかったようなふりをして、
「左オートバイ。」
と、おこったみたいな声で注意した。
　バックミラーにうつったとうさんのくわえタバコの火が、きえていた。
　とうさんはむっつりとだまりこくって車を走らせた。二けんのパチンコ屋の前を走りすぎた。
(パチンコ、もう、やめるんだな。)
と、ぼくはちょっとがっかりしたけど、ほっとした。たまにかつときはいいけど、たいていはすっかりすられてしまって、ひどくふきげんになる。パチンコ台のガラスがわれるほどたたいたり、玉入れのはこをゆかにたたきつけたりする。そんなときのとうさんを見るのはいやだった。
　だけど大通りの交叉点の赤信号にひっかかったとき、とうさんはきえたタバコに火をつけて、
「何曜だったかな?」
と、なにげなく、ぼくにきいた。
「え?　きょう?　水曜だよ。」
と、ぼくはばかみたいに明るい声でいった。

「そうか、水曜なら、でるな。」
とうさんは、すばやくちらっとぼくを見て、青信号にかわったとたんに左折した。——文化会館というパチンコ屋のある方角だった。

とうさんは、三百円ずつ二回、玉を買った。一度めは、すぐにすってしまった。二度めはちょぼちょぼはいっていたけど、やがて、すこしずつ、すぐには気がつかないくらいに玉はへっていって、やっぱり、きれいになくなってしまった。
「………。」
さいごの一こを、トマトのしぶで黒くよごれた親指ではじき、玉もないのにからうちを五、六度くりかえして、とうさんはいまいましそうにタバコに火をつけた。
「かえろうよ、この店、いかれてるよ。」
立ったまま、パチンコの台をにらみつけているとうさんの背に、いった。とうさんはうごかなかった。もう一度よんだら、
「うるさい、車にいってれ。」
たたきつけるようにして、ぼくにキイをわたすと、あちこちのポケットをさぐりながら、人ごみをおしわけて、また玉を買いにいった。
「………。」

ぼくは、五百円くらい玉を買ったらしいとうさんが、うろうろと台をえらんでいるのをこっそり見ていたけど、とうさんと目があうのがいやで、あわててパチンコ屋をとびだした。
外は、すっかりくらかった。
車は、店のわきの小便くさいくらがりのなかにとめてあった。
あつかったけど、ぼくは車のまどをぴったりしめ、なかからかぎをかけて、助手席にじっとうずくまっていた。やみのなかで、パチンコの音と軍艦マーチをとおくききながら、
(どうせ、またすられてしまうんだ……。)
パチンコの台にしがみついているとうさんのことを考えた。
(あしたからは、もう、店のなかにははいらないぞ。)
繁華街のネオンサインに目をこらしながら、ぼくはうれたトマトを二つ食べ、よごれた手をジーパンのしりでこすって、あしたからは、おにいちゃんのように、英語の単語帳かなにかをもって歩こうなどと考え、そしていつか、あせをながしながらねむってしまった。

なんどもドアをたたかれて、ようやく目をさました。
とうさんが、まどガラスに顔をおしつけて、ぼくの名をよびながら、ドアをたたいているのだった。
「ねてたのか。」
ぼくがあわててドアをあけると、とうさんはちらと腕時計に目をやって、エンジンをかけた。ぼくは、助


チンコ

手席のまどをいっぱいにあけて、車の前後を確認するように、身をのりだした。とうさんはあたらしいタバコに火をつけてから、おんぼろ車をいたわるように、そっとギヤをいれた。

エンジンがせきこむような音をたて、からっぽのトラックは、車体をそうぞうしくならして、なめらかなアスファルトの道を走りはじめた。

パチンコの音とすりきれた軍艦マーチがとおくなり、町をぬけても、とうさんは車のライトがてらしだすやみのむこうを見つめて、だまって運転をつづけた。くわえタバコの火が、生きて呼吸しているように、大きくなったり小さくなったりするのを、ぼくは目だけでちらちらとぬすみ見ていた。

炭坑につづくアスファルトの道からそれて、ぼくらの部落にはいると、道はきゅうにひどくなり、車体はおどるようにはげしくゆれたけど、それでもまだ、とうさんもぼくも、だまっていた。

家の火がとおくに見える土手のあたりにきたとき、ようやく、とうさんが、

「みんなで、わけれ。」

と、前方を見つめたまま、小さなはこを、ぼくのひざにほうってよこした。

「………。」

手にとって、ライトの光にすかして見たら、百五十円のチョコレートだった。

「千五百円だ。」

と、とうさんはいった。

「トマト、五はこぶんだ。」

そして、きゅうに、パチンコの景品の話のつづきででもあるかのように、
「勉強は、やってるか。」
と、きいた。
「う、うん。」と、ぼくはどもった。声がのどにからまって、「やってる。」と、もう一度いいなおした。
「そうか。」
とうさんは、くちびるがこげそうなほどみじかくなったタバコを、ていねいに灰皿でもみけして、
「たかしは、やってるか。」
おにいちゃんのことも、きいた。
「来年、受験だもの。」
と、ぼくは声に力をこめた。
とうさんはうなるような声をだしてうなずいて、三人の妹たちのこともきいた。ひとりずつ、いちばん下の妹のことまで、きいた。
「まだ、一年になったばかりだよ。」
と、ぼくはとうさんがまじめにきいてるのかどうかわからなくなって、ふりむいた。
車が、えぐれた道にはまって、はげしくゆれた。ぼくはもうすこしで天井に頭をぶつけるところだった。
「ハウストマトも、おわりだな。」
車のゆれがおさまると、さっきから、ついでみたいにきいてたぼくらのことは、わすれてしまったよう

に、とうさんはぶしょうひげをなぜて、ぼそっとつぶやいた。

「やっぱり、路地トマトには、かなわんのかな。」

ハウストマトは、早期栽培のトマトだった。すくない土地で、収入をおおくしようとして、とうさんたちが三年前くらいからはじめたやりかただった。どこの部落もやらなかった一年めは、かなりの成果があったらしかったけど、今では、ハウストマトがふつうになって、一月おくれくらいで色づく路地トマトが、かえってめずらしいくらいになっていたのだった。

「苦労して研究して、資材に金かけてさ、それでたたかれたんじゃ、まかたしないもね。」

と、またもとのやりかたの路地トマトしかつくらない人たちが、ぼくらの部落でも、いく人かではじめていたのだった。

「うちも、来年はやめるの?」

と、ぼくはきいた。やめてくれればいい、という気持ちがあった。春さきのはやくから、ビニールハウスのせわをするのは、つらいしごとだった。

「あほんだら。」

と、とうさんはいった。

「ハウストマトは、おれがはじめたんだぞ。」

「………。」

「頭のいらん百姓なら、江戸時代の百姓だべや。」

なにをいっても、どなりつけられそうで、ぼくはだまっていた。パチンコ屋でのことなんかわすれて、ぼくはチョコレートのはこをひざの上でもてあそんでいた。

家が近かった。

見わたすかぎりのトマト畑のなかの道だった。

夏休みになった今、あすも、ぼくらは朝からトマト畑にはいる。出面さんたちといっしょに、家じゅう総出ではたらいて、そして、ぼくととうさんは、あすも、この道をとおって、ハウストマトを満載したトラックを、町の市場まで走らせるのだ。



後藤竜二　一九四三年北海道に生まれる。早稲田大学卒業。著書には『天使で大地はいっぱいだ』『地平線の五人兄弟』『風にのる海賊たち』などがある。東京都豊島区在住。

（絵・うすいしゅん）

ラーメン先生の恋人

山本静子



「ばんざーい。こんどは男の先生だぞ。」

新学期の朝、正史が教員室へチョークをとりにいったことから、担任のかわったニュースは、あっというまに六年一組に知れわたった。始業式のあと教室にはいってからも、たった今紹介されたばかりの先生のうわさで、もちきりだった。

そこへ、がっちりしたからだつきで、日やけした顔をにこにこさせたわかい先生が、はいってきた。すると教室はうそみたいにしずかになって、じっとみんなが先生を見ている。

先生は出席をとりおわると、大きく黒板に八木大助とかいてから、自己紹介をはじめた。

「先生は、きょうもラーメンをつくって食べてきた。ラーメンなら一度に二はい、いや三ばいぐらいは平気だなあ……。」

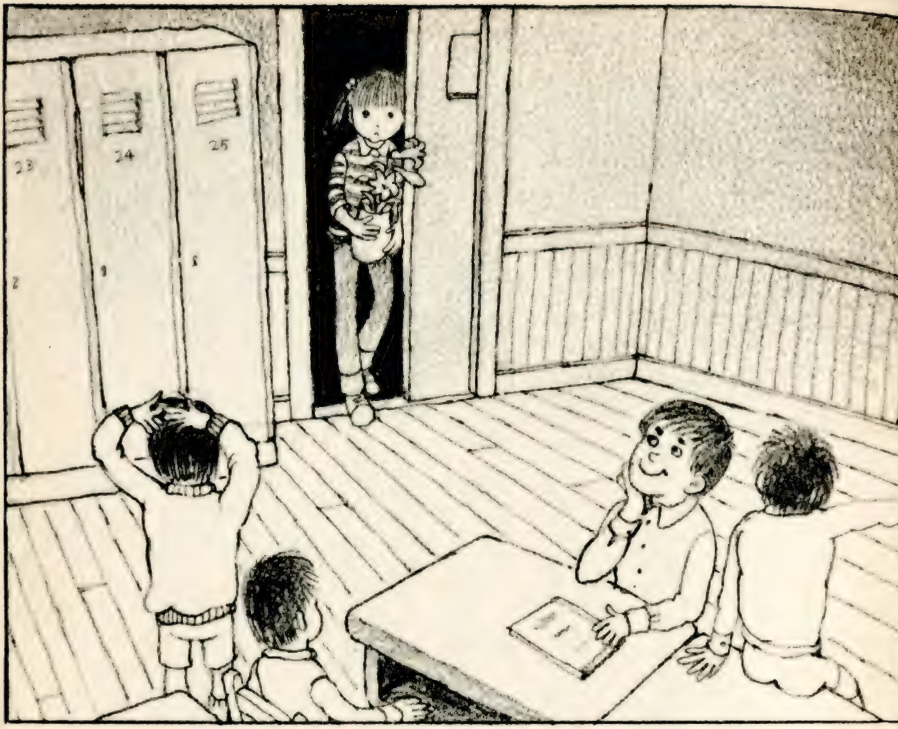
さもうまそうな顔をした。とたんに正史がいった。

「へえ、すごい。三ばいも！　それで大の字がつくんだ。」
　みんなは、ごっくんとつばをのみこんで、目の前にラーメンがうかんでいるような目つきをした。すばやくそれをさとった先生は、
「あははは、なあんだ、きみたちも、おなじらしいな。」
とわらった。それまではりつめていたみんなの気持ちは、その一言でほぐれて、口ぐちにかってなことをいいだした。
「まあ、そうさわぐな。先生は学生時代にバスケットの選手だったから、スポーツは大すきだ。これからみんなと、おおいにあそんで、なかよくしていこうと思ってるんだ。」
　わーっと歓声があがった。
　先生はつくえのあいだをまわって、みんなに握手をしてやくそくをしてくれた。スポーツマンの男らしい先生を、いっぺんにすきになった広子は、むねをどきどきさせて、先生の目をしっかり見つめながら、右手をぎゅっとにぎった。
　ところが、雨がふったり、先生の出張があったりして、そのやくそくがのびのびになっていたのだった。

　校庭をとるのは、いつも正史の役だ。きょうもバットやグローブ、ボールまでもちだして、ベース板の上におき見はりを立てた。ところがあまりはりきりすぎた正史は、ノックの練習のとき、三振やワンバウンドの球ばかりうった。そばで見ていた広子と安子が、かわりばんこにどなった。

「ちゃんとボール見てうつのよ、正史君。」
そこへ、トレパンに着がえたラーメン先生がやってきた。
「そんなへっぴりごしでは、ボールはうてない。しっかり足をふんばって、もっとあごをひく。」
先生は、バットをふってみせた。
広子は、青い空にとんでいく白いボールに見とれてしまった。
(すてき！　わたしもうってみたいわ。)
思わず先生と握手した右手を、ぐっと前につきだして、バットをにぎるような手つきをしていた。
練習がおわって、みんなが校門をでるころには、日もしずんで、五月の空はあかね色から灰色にかわっていた。

夏がきた。教室のかべの夏休み計画表を見ながら、みんなが海だとか、山だとかさわいでいた。
まどのところで外を見ていた正史が、
「あっ！　八木先生、わかい女の人と、ポプラの木の下にいるよ！」
と、すっとんきょうな声をあげた。みんながさきをあらそってまどにしがみつき、なかむつまじそうな先生たちを発見したからたいへんだ。
「へーえ。」と、にやにやする男の子もいた。
「あの人、きっと先生の恋人よ。」



と、安子がませた口をきく。
「うそ、ちがうわ。だれかのおかあさんよ。」
べそをかきそうな女の子が、あわてていいかえした。
「そうだよ。恋人にきまってる。」
おもしろそうに、男の子たちがはやしたてた。どなりあう声で、教室はいっそうさわがしくなった。
そこへ広子が、ユリの花をさした花びんをかかえてはいってきた。
「おい、広っぺ、先生に恋人いるんだぞ。すうっとかみが長くて、背も高いし、きっと、きょうはデートだな。」
正史は両方の手を、ふとももの上でぱたぱたたたきながら、広子をからかった。みんなの視線を感じた広子は、わざとむねをはって、花びんを先生のつくえにかざった。それからみんなにむ

かって、

「うそよ。先生に恋人なんかいないわよ。」

と、自信ありげに、きっぱりいった。

　ところがそれから五分もしないうちに、いつもとちがって、ぱりっとしたブルーのチェックの背広を着た先生が、うきうきした足どりではいってきた。

「おっ!」「あっ!」といって、みんなは目を見はる。なかには、「かっこいい。」とか、「すてき!」といって、つくえやいすをたたいてひやかす者もいた。

「先生、およめさんもらったら、放課後、もうぼくたちとあそばないんですか。」

　とつぜん、正史がまじめくさってきくと、先生はにやっとわらい、大きな声でいった。

「そうだなあ……結婚したら、まずあのアパートからひっこしだ。それに子どもがうまれたら、先生ははやくかえるな。そうなると、もうきみたちともあそべなくなるだろう。」

「わあい。ずるいよ、先生。」

「そうだよなあ、おおいにあそぼうってやくそくしたのに、先生ずるいよ。」

「そうだ、先生、結婚なんかしなきゃいいよ。」

　いっせいに、そうだ、そうだといいあった。

「う、ははは。先生もわかい男なんだぞ。」

先生は、ユリの花に気づいて目をとめた。

放課後、正史が教室にはいったとたん、まちかまえていた広子は、いきなり体あたりをくわした。

「へんなニュースながさないでよ。うわさになれば、先生もこの組もこまるわ。ねっ、そうでしょう、正史君。」

正史の首根っこでもおさえかねないいきおいで、広子がいった。

「そう八つあたりするなよ。考えてみろよ。だれだって一回は結婚するのさ。おてんばな広っぺもそうだろ。やきもちやくな、広っぺ。」

正史もまけてはいなかった。むうっとした広子は、おしりをふって教室をとびだした。

あくる日。夕べ考えたことを、広子は、まず安子にうちあけてみようと思った。それは〈先生の結婚反対組合〉をつくるということだった。

昼休みに、安子をろうかによびだして、広子がその話をすると、安子は探偵団でもつくるようなよろこびかたでさんせいした。

「よし、わが一組のためにがんばろう。勉強やテストばかりじゃおもしろくないもの。」

みかたのできた広子は、口笛でもふきたいような気持ちになった。

その日の午後。おとなしいみどりもなかまにさそうと、広子が組合長になって、〈先生の結婚反対組合〉をつくった。正史たちや親たちにばれないこと。もちろん、先生にもないしょだ。三人はかたくちかいあった。

かわりばんこに見はって、先生のあとをつけたら、ストアやふろ屋だったり、アパートの人たちにあやしまれたりした。道でわかい女の人にであうと、みんな先生の恋人に思えてきて、そっとあとをつけたりしたこともあった。

夏休みになって十日めの午後。先生のアパートに恋人があらわれた。その知らせが、塾のかえりのみどりから安子へ、そして広子につたわった。さっそく即席ラーメンを買って、三人は先生のアパートにむかった。

「おっ！　よくきたな。ちょうどよかった。昼めしにするところだ。まあ、あがれ。」

ラーメンのふくろをうけとった先生は、広子たちのために、黒の女もののくつをどかした。

「おじゃまします。」と、しおらしくあがった三人は、花もようのワンピースのきれいな女の人にであって、あわてて首をすくめて頭をさげた。

女の人にかわって、台所にたった広子は、なれた手つきでラーメンをつくる。なかの一つに塩とこしょうを思いっきりふりかけてから、わかい女の人の前にもっていき、「どうぞ。」といった。

「あら、おいしそう。ありがとう。」

女の人は、にっこりわらった。

「きみたちすまないな。ラーメンがすきだといったこと、おぼえていてくれたんだね。」

ごきげんな先生は、ふうふういってスープをのんだ。女の人も一口食べる。と、とつぜん、のどをぐうっ



とつまらせ、まっかな顔をして、くるしそうにむねをたたいた。
（一発命中！）
おかしくなった広子は、そっと安子の足をつついてから、戦闘開始のしせいで、テーブルにひじをついた。
「わたし、先生の授業がわからないから、成績さがったわ。すぐ脱線するからわるいのよ。」
「脱線？」
先生は、やあといって頭をかく。
みどりは、うつむいたまま、ぼそっといった。
「漢字も、まちがえておしえたことがありました。」
「生徒の給食をつまんだり、授業ちゅう、つくえに足をのせてねてしまったことだってあったわ。」
安子は、タバコのけむりをにらみつけた。
「あら、ほんとう、大助さん？」
女の人はラーメンをうらめしそうに見ていたが、まあといった顔で先生を見つめた。
「はい、ほんとうです。遅刻はいつも二十分。勉強がおくれると、宿題にしちゃうんです。」
ちょうしづいて、安子はそういった。
「せっかく花をかざってても気がつかないし、むちゅうになると、チョークをかんだり、教室をかけたりします。そうでしょう、先生！」

「えっ、そ、そんなばかな。きみたちまんがの見すぎだよ。いやテレビもだ。」
さっきから水を三ばいもおかわりした先生は、なさけなさそうに、広子たちを見ている。
さらに広子は、追いうちをかける。
「それになったり、ぶったり、すこしもやさしいところがなくて、みんなこわがって勉強しているんだわ。」
「まあ、そうだったの。そんなに生徒たちに人気がないなんて、知らなかったわ。大助さん、静岡にいるかあさんがかなしむわ。」
(かあさん?)
耳をうたぐった広子たちは、もう一度女の人の口もとをじっと見た。
「大助さんはわたしには、『生徒にすかれているから、先生になってよかった。』といったのに。それがみんなうそだなんて……。」
女の人は、ひざのハンカチをにぎりしめて、うつむいてしまった。
「うそだなんて、ねえさん!」
「ねえさん?」
たしかにラーメン先生は、そういったのだ。
おどろいたのは、広子たちだ。
「えっ! きょうだいなの?」

立ちあがった広子は、うわずった声でいった。
「ええ、わたしたちきょうだいよ。」
「いやだあ！　ごかいしちゃった！」
広子がわらいだすと、安子とみどりも、なみだをためてわらった。あっけにとられた先生は、
「するときみたち、ねえさんを恋人とまちがえたな。それでへんなことばかりいったんだろ。あきれたやつだ、ほんとうに。」
「まあ、いやだわ。おほほほ。」
女の人は、たのしそうだ。
「ごめんなさい。わたしたちいっしょうけんめいだったの。先生は結婚したらあそばないではやく家へかえるというし、正史君たちが、おねえさんのことを恋人だというものだから……。」
「それで先生の結婚反対組合をつくって、先生が恋人にきらわれるように、わたしたちでおしばいをやったんです。」
広子たちは、じぶんたちの気持ちを、ふたりにうったえた。あきれた顔の先生も、しきりにからのコップを口にはこんで、まんざらでもない顔つきだ。するとおねえさんがいった。
「う、ふふふ。まけたわ、わたしも。でもだいじょうぶ。大助さんは、三十さいまで結婚しないっていうのが口ぐせなのよ……。」
「わかんないぞ、すきな人ができたら……。」



にやっとわらった。だが広子はわらわなかった。ライターをつけたりけしたりしながら、先生は

ライターをつけたりけしたりしながら、先生はにやっとわらった。だが広子はわらわなかった。

うすぐらくなってから、先生とおねえさんは、広子たちをアパートの角まで送ってくれた。

「さあ、きみたちにいいわたす。きょうの罰はうんとおもいといいたいところだが、夏休みにラーメンを三回先生につくってくれるなら、ゆるしてやろう。ただし、塩とこしょうのいれすぎはごめんだ。」

という先生のうしろで、おねえさんが広子たちにウインクしていた。

「はい、三人にまかせてください。うんとおいしいラーメンをつくります。」

広子たちは、さようならと手をふった。

組合長の広子は、ふたりにいった。

「二学期には、もっと組合員をふやそうよ。」

「うん、そうしよう。スリル満点だったな。わたし、あせかいたもの。ほら見て！」
安子の手をのぞいて、ふたりはくくっとわらった。ふと、正史を思いだして、広子はいった。
「わたし、先生が三十さいになったら、およめさんに立候補しようかな。」
「だめ、ずるいよ、そんなの。」
安子がぶつまねをして、広子をにらんだ。
「うそ、うそ。じゃ、またあしたね。」
赤くなった広子は、スカートをひるがえしてかけだした。

山本静子　一九三三年東京都に生まれる。市ケ谷商業高校中退。第一期日本児童文学学校に学ぶ。「現代少年少女文学研究会」会員。「一期会」同人。作品には『あしたへの約束』『いかだのうた』などがある。東京都練馬区在住。

（絵・岡本颯子）

六介の頭

砂川キミ子



　ある日曜日の朝だった。縁側でまんがの本をよんでいると、おかあさんがいった。
「六介、さんぱつにいっといで。」
「うん、まだええよ。」
　六介は、気のないへんじをした。
「ええことあらへん、いっぺんかがみ見てみ、その頭。」
「わかってる。」
「わかってるんなら今からいき、日曜日やし。」
　おかあさんは追いたてるように、そうじ機をかけだした。六介はもう、三か月もさんぱつにいっていない。だからかみの毛が長くのびほうだいになって、ぼさぼさの頭をしていた。おかあさんにいわせると、〈病人っ子〉のようにみえるのだそうだ。

「そんなうっとしい頭をして、かっこのわるい。」
おかあさんは、六介の顔を見るたびにいった。ところが六介は、この頭が気にいっているのだ。目の上までたれさがってくるかみの毛を、ちょっと気どってかきあげるしぐさが、なんとなくおとなっぽくてかっこういい。このごろは学校でも、かみを長くするのが大はやりなのだ。きれいにさんぱつしているやつこそ、かっこうがわるいのだ。

六介は、さんぱつなんかにいく気がない。いくらいわれてもうごかないでいると、

「なんでそんな頭がええのやろ。」
おかあさんはなさけなさそうに、大きなため息をついた。そのとき、

「おはようさん、市場へいきましょか。」
買いものかごをさげて、となりのおばさんが縁側のほうへまわってきた。

「ちょっと、この子の頭見て。なんぼいうても、さんぱつにいかへんのよ。」
おかあさんは、さっそくおばさんにいった。

「あら、どうして?」
「これが、かっこええんだって。」
「へえ……。」
おばさんはかん高い声をあげ、

「六ちゃん、さんぱつにいきよ。そんな頭していたら、せっかくの男まえだいなしやんか。」

と、大げさにいった。
なにをいわれてもどこふく風と、六介がおしりをむけていると、ふたりで話をはじめた。
「なんでこのごろのわかい男は、かみを長うするんやろね。あれがええ思うているんやろか。」
「おまけに赤い服なんか着ているもんやさかい、男か女かさっぱりわからん。」
「男か思うたら女やったり、女か思うたら男やったり、ややこしいな。」
「けど、あんまりええもんやないね。当人はええ気でやっているんかしらんけど、気色わるいわ。」
「うちらの子どものころは、男の子いうたら、みんなぼうず頭やったなあ。」
「あれがええんよ、男の子は。さっぱりしてて、かわいらしいて。」
こんなことをいいあっているうちに話はやがて、むかしの戦争のころのことまでさかのぼってしまった。
やれやれと思っていると、どこをどうまわってか、話がまた、六介のほうへもどってきた。
「そうや、六ちゃんもいっそのこと、くりくりぼうずにしたら、すがすがしくてええで。」
と、おばさんは、いかにもむかしがなつかしいというふうにいった。
「どうして今どき、くりくりぼうずになんかするんや。」
六介はだまっていられなくなって、いいかえした。
「男の子はあれがええんや。だいいちせいけつやし、男の子らしゅうて、おばさんすきやわ。」
「いくらおばさんがすきでも、くりくりぼうずなんかごめんだよ。」
六介は、じぶんの頭がそうなったときのことを想像しただけで、わらいだしてしまった。

「六ちゃんそんなにわらうけど、むかしはみんなそうやったんやで。」
「うそいってら、むかしはみんなちょんまげやんか。」
「そんなむかしやあらへん、おばちゃんやおかあさんが子どものころの話や。」
「それは明治何年？」
「どづくよ、この子は！」
おばさんがおこって手をふりあげたので、六介はひょいとからだをかわしてにげた。
「ほんまにこのごろの子は、口だけは達者でかなわんなあ。」
「六ちゃんのあいてをしていたら、なにいわれるか、わかったもんやない。はよう買いものにいこ。」
おばさんとおかあさんは、そんなことをいいながら、つれだってでていった。

それから二、三日たったある日、六介が学校からもどって、テレビの前でせんべいをかじっていると、まとなりのおばさんがやってきた。おばさんの声はふつうの人より三オクターブくらい高い。頭のてっぺんからでるような、声をだす。
「六ちゃん、ちょっとでておいでなあ、ええもん見せてあげるさかい。」
どんなええもん見せてくれるのかと、六介がとんででてみると、おばさんはむすこのけん太の手をひいて、げんかんの前に立っていた。けん太は三つになるやんちゃぼうずだ。
そのけん太の顔を見るなり、六介はぷうっとふきだしてしまった。まるで、むきたてのジャガイモのよう

な頭をしている。

「今、さんぱつしてきたとこよ。どう、ええやろ、かわいいやろ。」

ぼうず頭をなぜながら、さかんにじぶんの子をほめてとくいげにいった。それでわざわざ見せにきたのだ。

けれども六介は、けん太のきょとんとした顔と、ジャガイモそっくりの大きな頭を見ていると、おかしくておなかをかかえてわらいころげた。

「なんがおかしいんよ。六ちゃんのぼさぼさ頭よりなんぼかこのほうがかっこええで。そうやろ。」



「お寺の小ぼうずみたいや。」
六介がいうと、けん太は気をわるくして、
「ぼく、小ぼうずちゃうもん。」
と、ふくれた。でもおばさんは平気なもので、あいかわらずのことをいった。
「六ちゃん、あんたもさんぱつにいって、くりくりにしてもらいよ。さっぱりと。」
「かんにんしてくれ、百万円くれてもいやや。」
こんなおばさんにかかわりあっていては、なにをいわれるかわかったもんやないと、六介はいそいで家のなかへひっこんだ。

(いくらぼさぼさの頭でも、おれの頭やないか。おれがええ思うているのに、なんで人にとやかくいわれんならんのや。)
六介はそう考えると、おとなのおせっかいにむずむずはらがたってきた。なんといっても、いちばんおせっかいやきは、となりのおばさんだ。
(なんでけん太をくりくりぼうずにして、見せにまでこんならんのや。おれはぜったいに、さんぱつなんかにいかへんぞ。だれがなんといったっていくもんか。だいいち、さんぱつにいかなんだらお金はいらんし、めんどうくさくなくてええやんか。)
六介の決心は、ますますかたくなった。ところがある日、どうしてもさんぱつにいかなければならないは

めになってしまった。

六介は、おとうさんの給料日のよく日に、こづかいをもらうことになっている。一か月千円だ。その日がきたので、六介はおかあさんにさいそくした。

「おかあさん、こづかいおくれよ。」

「さんぱつにいっといで、そしたらやるさかいに。」

おかあさんはとうとうたまりかねて、さいごの手段にでたのだ。

「そんなんないや、こづかいは無条件でちゃんとくれることにきまっているのに、そんなん反則や。」

六介は、ぶうぶうりくつをならべた。でも、おかあさんにりくつはとおらない。なにしろ女の人というのは、感情の動物というくらいだからな。

「さんぱつにいってくるまで、ぜったいに、あかん。」

と、宣言するようにいった。やがて、おとうさんまでが、おかあさんのみかたをして、

「文句いわずにさんぱつにいけや。そしたらこづかいくれるいうんやから、かんたんやないか。」

といった。

(なにがかんたんなもんか、こづかいとさんぱつとひきかえなんて――。)

六介はどうしてもそこのところがなっとくできなかったけれど、こづかいをもらわなければこまるので、とうとうこうさんしてさんぱつにいくことにした。

六介がさんぱつ屋からもどってくると、となりのおばさんがきて、縁側でおかあさんとお茶をのんでい



た。おばさんとおかあさんは年もおなじくらいで、よく気があうらしい。なにかといえば、ふたりでよって話をしている。

「こづかいー。」

六介がおかあさんの前に手をつきだすと、

「なんやこの子、さんぱつしてきたくらいでえばって――。」

おかあさんは六介の手をはらいのけて、さいふをとりに立っていった。

「おおさむ、かぜひきそうや。」

六介はおばさんのそばへいくと、わざとコンコンせきをしてみせた。頭がいっぺんにかるくなって、風がすうすうあたる。

「あーら六ちゃん、そいでさんぱつしてきたんか。」

おばさんは、六介の頭を検査するように見まわしていった。

「してきたよう、ほうら。」
六介は首をまわして、うしろを見せた。
「ほんまや、うしろはちゃんとかっているけど、前はそのままやんか。」
「そうや。」
六介はすましてこたえ、目の上におちてくるかみをきどってかきあげた。
「あきれた――半分しさし（やりかけ）やんか。」
「おれが、こうやってとたのんだんや。」
「まあ、あきれた。」
おばさんは、あきれたを連発してわらいだした。そこへおかあさんがもどってきて、
「せっかくさんぱつにいって、どうしてそんなけったいなことするんや。」
と、さいふからだしかけた千円札をまたひっこめようとしたので、六介はあわててとった。
「六ちゃん、さんぱつ代、半分しかはらわなかったんとちがうか。」
おばさんがにくらしそうにいっているとき、げんかんの戸があいて、だれかきた。
住吉のおばさんだ。
（なにかわるいことがおこるぞ。）
六介はへんな予感がしたので、いそいで立って外へでていこうとした。すると、おかあさんがよびとめて、
「この子ったら、さんぱつにいって、こんなことしてくるんよ、見て。」



と、さっそくおばさんに報告した。

「なんで前がみだけそんなに長うしてるんよ、いやらしいなあ。」

おばさんは六介の頭をじろじろながめた。

（どうでもええやんか、おれの頭やもん——。）

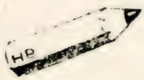
六介はいいたかったけれどやめた。このおばさんはにがてだ。どういうわけか、となりのおばさんやおかあさんのように、口でやりかえすことができない。しかたなくにやにやわらっていると、おばさんは、六介のおでこのかみをかきあげていった。

「あんたの顔でいちばんええのは、このひろいおでこやで。それをどうして、わざわざかみでかくしてしまうんやろ。」

まるで絵かきがモデルの顔をながめるような目だ。かと思うと、とつぜん、

「そうや、おばさんがみじかくきってやろ。」

と、いいだした。
(ああ、はやくどこかへいっとけばよかった。)
六介はこうかいしたけれどおそかった。おばさんは六介をかがみの前にすわらせると、はさみをもって、思いきりみじかくじょきじょきと前がみをきった。六介は思わずさけんだ。
「ひゃあ、そんなにみじかくきったらあかん!」
「そんな、首をきられたような声だしなさんなよ。」
おばさんはおちつきはらって、またじょきじょきときってしまった。
「さすがの六ちゃんも、おばさんにかかったらかなわんなあ。」
となりのおばさんがかん高い声でわらい、おかあさんもやっとまんぞくしたような顔だ。
(ああ、せっかく長うしたのに——。)
六介は、じぶんでないようなへんな顔を、かがみのなかに見ながら、ぶつぶつうらめしそうにいった。

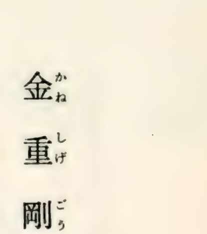


砂川キミ子　一九二四年香川県に生まれる。高松市実務学校卒業。作品には『ひのき』(『日本児童文学』)、『ミヨの夢』(『びわの実学校』)などがある。大阪府高石市在住。

(絵・うすいしゅん)

さよなら分校

金重剛二



ぼくと俊之と健二と文子の四人は、分校にむかって、てくてく山道を歩いていった。

きょうは、かばんはいらない。卒業式なのだ。

といっても、卒業するのは、ぼくと俊之と文子だけ。俊之の弟の健二は三年生だから、あと三年ある。でも、健二も、きょうで分校におさらばすることになったのだ。

ぼくたちが卒業すれば、健二はひとりぼっちになってしまう。いくら分校だといっても、生徒がひとりっきりじゃあ、かっこうがつかない。そんなわけで、分校は今年の三月でおしまいになるのだった。校舎はとりこわされて、そのあとに国民宿舎ができるらしい。

けれど、健二は、心のなかでよろこんでいるかもしれない。というのは、わかい原田熊夫という先生に、ぼくたちは二年前からおそわってきたのだが、この先生に、健二はずいぶんきたえられたのだ。

うっかり、ろうかにバケツの水でもこぼそうものなら、校庭五周。宿題を一問でものこしてきたら、たち

まち、鉄ぼうでけんすい二十回。朝、先生に、「おはようございます。」をいわずにすれちがったといっては、ウサギとび百メートル。

この先生、ほんとはすごくものわかりがよくて、ほがらかなのに、なぜか健二にはきびしかった。

家でそんな話をすると、ねころがってテレビを見ていたおとうさんがいった。

「おおかた、気があわんのじゃろう。こいつはむしがすかん、と思うたら、そいつのやることなすこと、全部、はらがたってくるんじゃや。」

「それじゃあ、健二がかわいそうじゃや。」

「じゃからというて、先生にたてをつくことができるかい。」

ぼくは、ふてくされてつぶやいた。

「ほんまにアナグマのやつ、よわい者いじめがすきなんじゃから。」

先生のあだ名は、はじめ原熊だったが、そのうちにアナグマにかわった。

土のなかにトンネルをほって生活する小さなアナグマよりも、ずうたいの大きなツキノワグマの感じだが、ハラグマなどという動物はいないから、そうなっただけのことだ。

この先生、わかいくせにがにまたで歩くし、勉強のしすぎかどうか知らないが、背中がわずかに前かがみになっていて、冬眠からさめたクマが、空を見あげているようすにそっくりなのだ。ときには、じぶんからクマのまねをして教室にはいってきて、ぼくたちをわらわせたりする。

俊之と健二のきょうだいが、家にかえって先生のわるい口をいっているかどうか、ぼくは知らない。けれ

ど、いったとしてもやはり、ぼくのおとうさんみたいに、「先生にたてなどついたら、しょうちしないぞ。」ということになったろう。

そのたてを、とうとう俊之がついてしまったのだ。

去年の秋のことだった。

教室ではいつものように、アナグマ先生とおくさんのさよ子先生が、ふたりでおしえていた。むろん、健二は学年がちがうからべつの教室、というわけにはいかない。教室は一つしかないのだ。

ぼくたち六年生は、アナグマ先生の授業で国語、健二は、さよ子先生に算数をおそわっていた。

健二が、となりの俊之のつくえに手をのばして、三角定規をかりようとした。それを、六年生をおしえていたアナグマ先生が見てしまったのだ。

「健二、じぶんの三角定規はどうした？」

アナグマ先生に、いきなりそういわれて、健二は、びくっとして立ちあがった。

ぼくは心のなかで思った。

（またか……。健二をおしえているのはさよ子先生じゃないか。しかる権利は、さよ子先生のほうにあるんだぞ。）

「わすれました。」

健二は、頭をかきかき小さな声でいった。小さな声だったのは、しかられるからばかりではなかった。その日、健二はかぜぎみで、朝から元気がなかったのだ。

「とりにかえってきなさい。」
アナグマ先生がそういって、みんな、ぎくりとした。
さよ子先生でさえ、びっくりしてアナグマ先生を見つめ、こういった。
「これからとりにかえらせるの?」
「そうだ。」
「でも……時間が……。」
ほんとは時間がおしかったわけではなかったろう、とぼくは思う。だれだって、健二に同情したくなろうというものだ。だって、分校から健二の家まで、たっぷり五十分はかかるのだ。
小さな山を一つこさなければならないのは、ぼくや文子もおなじことだが、健二の家は、それからさらに谷をくだらなければならない。車はおろか、オートバイさえむずかしい道だ。たった一つの三角定規のために——。
それなのに、アナグマ先生はぴしりといった。
「ものをわすれるのは、気持ちがたるんでいるからだ。すこしばかりくるしい思いをすることで、心にむちをあてることができる。わかったな、健二。さあ、とりにいってきなさい。」
健二は、うなだれてつくえをはなれようとした。
そのとき、俊之が立ちあがった。
俊之も、よほどはらがたったのだろう。顔をまっかにしている。つっかえ、つっかえしながら、俊之はア

ナグマ先生にいった。
「ひどすぎますよ、先生！　三角定規一つのために、健二をかえらせるんですか！」
「そうだ。」
けれど、俊之はすわろうとしない。
アナグマ先生は、しずかにこたえた。
「先生！　三角定規はぼくのがあります。これをかしてやれば、勉強にはさしつかえないはずです。」
「そりゃあ、そうだ。しかし、もし健二がひとりっきりで、そしてわすれたものが、ぜったいなくてはならないものだったらどうする？　たとえば、命にかかわるようなものだったとしたら……。」
「じゃけど、三角定規は、命にかかわるようなもんじゃありません。」
俊之は声をふるわせていったが、先生のほうはおちつきはらっている。
「今わたしのいったことばの意味を、みんな、あとでよく考えてみなさい。じゃあ、健二、とりにいってくるだろうな。」
健二はすっかりあきらめたのか、かたをおとして歩きはじめた。そうして教室の戸に手をかけようとすると、俊之が大声でよびとめた。
「まて！　健二。ぼくがかわりにかえって、とってきてやる。」
それから、俊之は先生のほうをむいた。
「おねがいします、先生。こいつ、かぜをひいてるんです。じゃから、ぼくがかわりに……。ええでしょ



う、先生。」

「かぜをひいてるって？　熱はあるのか？」

そういいながら、先生は健二に近づいていき、ひたいに手をあてた。

「頭がいたいか？」

健二は首をよこにふる。

それを見て、俊之は、さもくやしそうに小さくいった。

「ばかたれ！」

アナグマ先生は健二のひたいから手をはなし、ぽんとそのかたをたたいた。

「よし！　だいじょうぶ。かぜがなんだ。おまえ、男だろう。毎日かよってきている道だ。いってこい！」

そうして、とうとう健二はおしだされてしまったのだった。

そのあとアナグマ先生は、ぼくたち六年生の授

業をさよ子先生にまかせて、教室からいなくなった。
ぼくたちは、てっきり、先生は授業を中断されたことで気分をこわし、じぶんのへやでねころがってでもいるのだろう、と思っていた。ところが、あとで健二からきくと、先生は、こっそり健二のあとをつけて家までいったらしいのだ。
俊之はこういった。
「へっ、やっぱり気になったんじゃ。じぶんの責任で、健二のかぜがひどうなったら、たいへんじゃからな。」
俊之が文子にむかっていった。
「式のとき、なくなよ。みっともないから。」
「わたし、なくよ。ぜったいなくからね。」
「ちぇっ、女の子って、すぐこれじゃ。感激したふりをして、ええ気持ちになるんじゃ。」
文子は、もうなく準備をしているらしい。式の、どのあたりでなきはじめたらいいか、頭をひねっているのだろう。
式は、今年も校庭でおこなわれることになった。
ぼくたち六年生が、三人でオルガンをかかえて外にだしていると、うしろから健二の歓声がきこえてきた。
ふりむくと、いすをかかえていた健二のからだを、アナグマ先生がかかえている。いすは健二といっしょ

に校庭にだされ、ふたりは、またいすをとりに教室にかけこんでいった。
さよ子先生は、さいしょにだされた教卓にかた手をつき、じっと青空をながめている。
「いよいよ、きょうでおわかれね……。あら、父兄のかたたちがおいでになったわ。」
ほんとだ。ぼくたちの両親のほかに、村の人たちが何人かこちらにむかってくる。
さあ、いそがなきゃ。
「あのかご、どうした?」
ぼくは俊之と文子にいった。
「もうだしてもええのか?」
「あたりまえじゃないか。」
ぼくが俊之にこたえると、歩きだしていたさよ子先生が、足をとめてきいた。
「かごって、なあに?」
「い、いや、べつになんでもありません。」
「なんでもないかご、ですか……。」
さよ子先生は、ちょっと首をかしげてから、教室にむかって歩いていった。
そのかごは、教室のとなりのものおき小屋にかくしてあるのだ。なかには、はやざきのヤマザクラの、まっ白い花びらがいっぱいつまっている。式がおわったしゅんかんに、アナグマ先生とさよ子先生の頭の上から、そいつをふりかけようという計画だ。

ぼくたち四人は、教卓にむかってよこに一列にならび、その右側、たてに先生や用務員のおじさんたち五人、それにむかいあって、ぼくたちの両親や村の人たちが、やはりたてにならんですわった。
さよ子先生が、オルガンで「仰げば尊し」をひきはじめた。
オルガンの音は、しずかに青空のなかにすいこまれていく。
なくなら今だ、と思ったのか、文子はうたいはじめるとすぐに、なみだをつうっとほおにながした。それを見て、ぼくはとなりの俊之をつっついてやった。
さきに村の人たちのあいさつや卒業証書の授与などがあり、そのあとで、進行係もかねたアナグマ先生が、ふところからおりたたんだ紙をとりだしてよみはじめた。
「すばらしい晴天にめぐまれましたこの日、長くみなさんとまなびあそんだ、この分校の卒業式を、こうして……。」
そこまでよんだとき、アナグマ先生は、その紙をいきなりまるめて足もとにほうった。
(いいぞ！　ぼくたちと先生とのつきあいは、そんな形式ばったものじゃないんだ。山にアケビをもぎにいき、野イチゴをつんで、いっしょに食べたなかじゃないか。たまにはいやなこともあったけどね。)
アナグマ先生は、つっ立っているぼくたちの顔をじゅんにながめていきながら、また口をひらいた。
「四月から、みんなは本校へかようことになる。本校はとおいぞ。卒業する三人は中学生になるのだから心配いらないが、先生は健二だけが気にかかっていた。それで健二の足をきたえておくために、これまでずいぶんいじわるをした。いずれ、こうなるだろうと思ったからだ。先生をうらまないでくれ。先生も、四月か

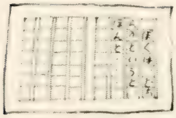
らとおくの学校へうつることになった。健二がへこたれずに、一日も学校をやすまず卒業してくれることを、先生はいのっている。」

アナグマ先生は、そういって口をとじた。

そのつぎになにをいうつもりだったのだろう。なかなかことばがでてこない。

さよ子先生が、あいずをまたずに、ゆっくりと「螢の光」をひきはじめた。

ぼくの目に、はじめてなみだがうかんだ。



金重剛二　一九四三年山口県に生まれる。明治大学卒業。「日本児童文学者協会」会員。著書には『とおせんぼタワー』『ぼくが消えた日』などがある。山口県徳山市在住。

（絵・うすいしゅん）

仮面をとった日

植田儀武



1

あれはやっぱりうかつだった。

ふりこのように、むこうへいったものは、いったときとおなじようにもどってくる——これは、あたりまえの自然法則だ。そんなかんたんなことに気づかなかったおれ、ほんとうにうすらとんかちのとんてんかんだ。

日曜日の夕方だった。

ママが、玉ネギをきざんでいた手を、ひょいととめて、

「あら、しまった。……ねえ、正造。」

って、いった。ママの「ねえ、正造。」は、だいたい見当がつく。買いものだ。

「なに。」

「スープの素、買いわすれちゃった。おねがい！」

ママは目になみだをうかべて、おれの顔を見ている。けれど、そんなばあい、おれは、「うん。」とはいわない。くせになるからだ。

しかし、その日、おれはめずらしく、「うん。」といった。その日、おれたち団地のサッカーチーム〈トラのマキーズ〉は、本町チーム〈ペレ〉に圧勝して、おれは最高に気分がよかったのだ。だから、おれは、

「はあい！」

ママがいちばんびっくりするへんじをして、へやをとびだした。

そのかえり、おれは、ちょっとおまわりだったけれど、六街区にある児童公園によってかえった。だれかいれば、その日の戦果を報告してやるつもりだったのだ。けれど、公園は、もう、ひっそりかんとしていた。

おれは、はや足で公園をよこぎった。そして、公園のさくをとびこえようとした。

と、そのときだった。

……コ、……キィーコ。

おれは、はっとしてふりかえった。

……………。

プラタナスの木かげで、ブランコがしずかにゆれている――。



おれは、むしょうにブランコにのってみたくなった。ブランコのゆれるのを見ていると、きゅうに心がわくわくしてきたのだ。

——一年生のころ、おれは、このブランコが大すきだった。高く、高あく、いっきにこぎあげる。鼻をつくプラタナスのにおい。プラタナスが、前にながれたり、うしろにながれたりする。そして、とつぜん、どっとこぼれおちてくる日の光と空。むねが、ぱっと青色になる。

——あああ。

つぎのしゅんかん、おれのからだは、ふんわりと前にとんでいる。拍手。拍手が、おれのまわりでおこっている——。

あれは、おれだけができる芸当だった。おれはそのときのことをありありと思いだしていた。

だから、おれのむねがあのころのようにふくらんで、耳のなかにパチパチと拍手がきこえだした

とき、おれは、もうすっかり、とぶ気になっていた。

「えいっ！」

おれはとんだ。それは、じぶんでも感心するほどのできだった。ただ、むねのポケットにさしこんだスープの素をおとしたことをのぞいては。おれは、おおいにまんぞくして、スープの素をひろいにもどった。

おれにとってゆううつなことがおこったのは、そのときだった。すうっと糸をひくように、白いものがおれのほうにもどってきたのだ。

「あっ！」

しかし、そのときはもうおそかった。ブランコの台は、コキーンというこころよい音をたてて、おれの口もとにぶつかっていた。いたくも、かゆくもなかった。おれは、ぼうぜんとつっ立っていた。

それでけっきょく、おれの前歯は二本とも、みごとにおれていた。一本は根もとから、一本はまんなかから。

ああ、おれはやっぱり、うすらとんかちのとんでてんかんだ、と思う。

2

つぎの朝（月曜日だった）、おれはママの声でとびおきた。

「正造、はやくおきなさいよ。なによ、歯の一本や二本おれたくらいで。」

ああ、なんということばだったろう。じっさい、おれは、歯のことをすっかりわすれていた。だから、マ

マのことばがなかったら、おれの朝は、ちょっとのあいだでもバラ色だったのだ。

おれは洗面所へすっとんでいった。そして、かがみの前にぴたりと立った。

「アーメン、そうめん、ひやそうめん。一、二の三！」

やっぱりだ。前歯が二本、一本は根もとから、一本はまんなかから、ぽっきりとおれている。そして、おれた歯のさきに白いものがつめてある。それは、あれから医者にいってつめてもらったものだった。

おれは、すっかり人相のかわってしまったじぶんの顔を、ぼんやり見つめていた。なにか、まったく知らないきみのわるいおじいさん——そんな人が、かがみのむこうで、じっとおれを見つめているみたいだった。

（こんな顔を見たら、みんなはわらうだろうな。学校、やすんじゃおうか。）

それからおれは、一時間後におこるだろうことを想像してみた。

まず、ドアをあける。がたぴしおもいドアだ。みんなはいっせいにおれのほうを見る。そして、いう。

「おはよう！」

やけに明るい声だ。いつもの何百倍も、何千倍も。けれど、おれはあいさつをかえさない。むっつり、すましこんでいる。

「………？」

みんなは、ふしぎに思うだろう。けれど、おれは、きょうのおれは、きのうのおれじゃないといった顔をしている。気にしない、気にしない。

しかし、一日じゅう、口をひらかないなんて、そんなことができるだろうか。きっとおれは、ひょんなと

ころで口をあけるにちがいない。そんな予感がする。そしたら、みんなは！　……うれしそうにさけぶだろう。
「正造君！」
あああ……。
そのとき、台所からママの声がした。
「なにぶつぶついってんの。学校やすむなんてこんたん、おこさないでちょうだい。正造の顔、正造が考えているほどへんじゃないわよ。そんなに顔のことが気になるんだったら、マスクしていけばいいでしょ。」
ああ、そうか。マスク……。マスクとは気がつかなかった。おれは、マスクときいて、目の前がぱっと明るくなった。
「うん、マスク。マスクだして。」
おれは、ざばっと顔に水をかけると、台所へいった。

3

その日、学校でおこったこと？
まあまあだった。おれは、かぜをひいたんだ、といった。すると、みんなは、おれのマスクの顔をじろじろ見ていたが、「熱があるみたい。」とか、「くるしそう。」とかいって、心配してくれた。おれは、むずがゆくてしかたがなかった。

ところがつぎの日、教室にはいって、おれは、あっと思った。黒板いっぱいに、おれの顔がかいてあったのだ。とくに、口のあたりをゆがめてかいてある。

「………。」

おれはとまどった。いつものおれなら、「だれだ。」とかなんとかいう。けれど、その日、おれはなにもいえなかった。

みんなが、おれの顔を、深海魚かなにかのように目をひからせて見ている。おれは、だんだんぎくしゃくしていくじぶんを感じながら、席についた。

と、そのときだった。かん高い声が、教室のうしろであがった。

「顔、顔！」

そのとたん、おれのしんぞうのなかで、かねが一つカーンとなった。そして、顔がかっとあつくなった。

さぶだ。さぶがかいたんだ。さぶも、虫歯をなおしに金子歯科へいっている、といっていた。きのう、そこでおれのことをきいたにちがいない。ちくしょう、さぶのやつ。正面からおれにかかったんじゃ、かてないからといって、きたない手をつかいやがる。

教室はしんとしている。みんな、おれのほうを見ている。教卓にいけたコスモスだけが、しずかにゆれている。

おれは、思いきって、うしろをふりかえろうとした。ふりかえっていれば、おれはきっと、さぶを一発でぶちのめしていただろう。けれど、おれはふりかえらなかった。いや、ふりかえらなかったというより、ふ



りかえれなかったというほうがぴったりだ。
その日、おれは、一回も席を立たなかった。

4

それから、おれはへまばかりやっていた。花びんをわったり、牛乳をこぼしたり……。
それが、なにかへんなのだ。名まえをよばれたりすると、それまでなんの気なしにうごいていた手が、とつぜんぎくしゃくしだす。すると、花びんや牛乳までもが、意地わるく、おれの手にぐらりともたれかかってくる。
おれはあわてる。あわてて、もたれかかった花びんをおこそうとする。ところが花びんは、いつのまにかするりとおれの手をぬけて、ガチャーンと大きな音をたててこわれている。
体育の時間だってそうだった。おれは、いつもとんでいるとびばこがとべなかった。
男子二列、女子二列、とべた者からとびばこのむこうがわにすわる。もう、三分の一ちかくがパスしていた。さぶももちろんパスしていた。にやにやとして、おれのほうを見ている。
いよいよ、おれの番。四だんなんて、とびばこのうちにはいらない。おれは、スタートをきった。好調なスタートだ。おれは、ぐいぐいとスピードをあげた。こころよい風が首すじにあたる。おれは、ひさしぶりにいい気持ちになった。
ところが、ふみきり台の数歩手前まできたときだった。それまでぼうっとおれの目にうつっていたパスし

た者の列のなかで、さぶのすがたがきゅうにはっきりとうつった。さぶがわらっている。
とたん、おれのからだは、針金細工のようにぎくしゃくしだした。そして、つぎのしゅんかん、おれはとびばこのはしにびてい骨を思いっきりぶつけていた。
「うっううう。」
いたさが声にならなかった。おれは、足をひきずるようにして、もとの列にもどった。
そのとき、みんなは、やっぱり深海魚のような目をして、おれの顔を見ていた。すると、おれは、いつのまにかマスクに手をやって、マスクの位置をなおそうとしていた——。

5

そのとびばこのことがあって二、三日して、とうとうおこるべきことがおこった。さぶとのけんかだ。
そうじの時間だった。さぶはそうじをさぼって、紙飛行機であそんでいた。いつものさぶなら、さぼっても、こそこそとそうじをさぼる。おれがほうきをもたせるからだ。けれどその日は、まるでおれにあてつけるように、おおっぴらにさぼっていた。おれは、かん高いさぶの声にむかむかしていた。それで、こんどなにかいったら、そうじをしろといってやろうと思っていた。
ちょうどそのときだった。ひょろひょろと目の前をとんでいった紙飛行機が、うしろにまわって、おれの頭にとんとあたった。と、あきかんをたたいたようなさぶのわらい声が、頭のうしろ上からひびいてきた。
「このやろう！」

とたん、おれは、教卓にのぼっていたさぶをひきずりおろし、のどもとをぐいぐいしめあげていた。

「な、なにすんだよう！」

「そうじをしろ。おまえ、ひきょうだぞ！」

いっしゅん、さぶの顔に、いつものあわれみをこうようなよわよわしい表情がうかんだ。しかし、つぎのしゅんかん、さぶの顔はかちほこったような表情になった。さぶはいった。

「なにいってやがんだ。歯なしじじいのくせに。」

そして、さぶの手が、さっとおれのマスクのほうにのびてきた。しかし、その前に、おれはさぶのよこっつらをはりたおしていた。

「やったなあ！」

さぶは、青すじをたてていった。けれど、おれはもう、さぶのことなんか気にかけていなかった。はりたおしさえすれば、さぶはもうなきだすか、めくらめっぽうおれにつっかかってくるか、それくらいのことしかできないのだ。おれは、ななめになったマスクをなおそうとした。

ところが、立ちあがったさぶを見て、おれはぎくっとした。さぶは、こしをひくくかまえて、本格的なけんかのかまえにはいっていたのだ。おれは、あっけにとられて、ぼう立ちになってしまった。そこへ、さぶの頭つきがゴチーンとはいってきた。

「こ、こいつ！」

おれも、本格的なけんかの態勢にはいった。これで、さぶなんかにまけるはずがない。おれはさぶにくみ



ついて、さぶをねじふせ、馬のりになって、ごんごんとさぶの頭をゆかにぶつけてやった。もう、どうみてもおれのかちだった。

しかし、やっつけられても、やっつけられてもかかってくるさぶを見ているうちに、おれは、

（このけんか、まけるな。）

と、思った。なんだか、さぶの顔がおれをわらっているようにみえたからだ。

そのうち、さぶのパンチがきまりだした。つきあげるようなさぶのパンチが、顔、はらにとんでくる。その一発一発に、おもたいおもたい力がこもっている。おれも、うちかえすにはうちかえしたが、見ちがえるようなうごきをしだしたさぶには、もう、一発もあたらなかった。

けっきょく、その日、おれはさぶにこてんぱんにやっつけられていた。

わかれぎわ、さぶはおれに、

「だらしねえな。わかったか。」
と、はきすてるようにいった。おれは、その声をぼんやりきいていた。

6

つぎの朝、おれは、顔のあたりがずきん、ずきんするので目をさました。さぶの頭つきは、まともにおれの顔にはいっていた。かがみを見ると、顔はみにくくはれあがっている。
ママは、その朝、おれが歯をおってからはじめて、
「学校、やすむ?」
っていった。しかしおれは、無意識のうちに首をよこにふっていた。するとママは、
「そう。」
っていって、まっさらのマスクをもってきてくれた。それは、おれがそれまでしていたのとはちがって、顔の半分もすっぽりとかくしてしまいそうな、大きなマスクだった。それが、ママの両手のてのひらにふんわりとのっている。
おれは、その白いものをぼんやり見ていた。と、そのうちに、その白いものが、おれの目のなかでむくむくとうごきだした。おれは、はっとした。
(仮面!)
おれは、とっさに思った。これは、マスクじゃない。仮面、なんの意志ももたない仮面だ。それが、おれ

の顔にぴったりとくっついて……。
「そうだ！」
おれは、声をあげた。これが、おれの顔にくっついて、おれをおれじゃなくしていたんだ。意気地なしにしていたんだ。きっと、そうだ。
そこまでわかったとき、おれの気持ちは、だんだん明るくなりはじめた。おれは、マスクから目をはなした。そして、なにごとがおこったのかというような顔をしているママを、きっと見すえていった。
「おれ、きょうから、マスクしていかない！」
その声は、じぶんでもおどろくほど、明るい、きっぱりとした声だった。



植田儀武　一九四六年奈良県に生まれる。静岡大学人文学部卒業。教員。第三期日本児童文学学校に学ぶ。「マッチ箱の会」所属。神奈川県藤沢市在住。

（絵・うすいしゅん）

小さなあいつ

山本知都子



淳のテストちゅうの腹痛は、六年生の三学期になってもなおらなかった。いや、だんだんひどくなっているといったほうがいいかもしれない。

きょうも、算数のテスト用紙をくばられたとたん、れいによって下はらがずいんずいんいたみだし、いらいらさせられた。テストがおわると、ふしぎにけろっとおさまったが、いらだちだけをむねにもって、淳は一年二組の教室へむかった。そのクラスのせわ係で、そうじ当番の日だったから。

「こんなミスして……もうすぐ中学なのよ。」

いらだちの底から母の声がきこえる。

淳がぴくっとまゆをよせて、その教室へ足をいれると、花木順一がのったりでていくところだった。きょうも青白いのっぺりした表情で、まるで生気のない順一に、白い部分のおおい目でちろっと見あげられると、淳はとりはだがたった。

「ちぇっ、なんでおまえもじゅんなんだ。」

まるで墓場からよろっとでてきた人のように、きょろんと無言で六年生にたいする彼は、淳をくさくさせた。彼が学校でわらったのを、淳は見たことがない。おなじ一年生にまで、「やーい、ばか、じゅんのばか。」とからかわれても、ただのたっと立っているだけの彼と、おなじよび名とは！　淳は、けっとばしてやりたい思いでどなった。

「しっ、はやくかえれ！」

きこえないかのように、むすっと立っている彼が、淳にはひどくずうずうしく見えた。

二、三日して、淳が、「こんにちは。」と、名もない塾の戸をあけたとき、ふっとねばっこいみょうな視線を感じた。なんだろう……顔をあげると、そこに、小さなあいつがいた。おどろいたことに、彼はかすかに、にっと淳にわらいかけた。しかも、すこしはじらいをふくんで。淳はとまどいあわてた。

「あ、いらっしゃい。さ、順一君、(2)をよんで。小さい声でね。」

名なし塾のおかあさん先生がうながす。「うん。」とすなおに、「ど、ん、ぐ、り、を、九こ、見、つ、け、ま、し、た。」と、ひろいよみをはじめた順一からのがれるように、彼のうしろのはなれた席に淳はすわった。かたちのちがうつくえが五、六こあるだけのふつうのへや。淳はもうこのへやへ五年かよっている。ここでは腹痛もおこらない。

（どうして、ここへきたんだろう、あいつ。）

淳は、算数の問題が、いつものように心にはいってこなかった。目はしぜんに彼のほうへいく。と、順一がふりむいて、細い目でまた、にっとわらった。
「順一君、さ、どんぐりをいくつあげたの。」
「うん、ええと。」
またはじめからよみなおす彼の声が、耳につく。淳は、ノートにこまかい線もようをかきはじめた。
(あんなやつ……どうせおぼえられないのに……。)
すると、順一がにっとふりむいた。
「淳君、わからなかったらいってね。」
「ちぇっ、いや、あの、わかりまあす。」
「そう、じゃ、二ページできたら見ますから。さ、順一君、どんぐり……。」
「あ、あれ、ぼくんたちの、せわ係。」
「あ、ああ、そうなの、それをいいたかったの。でも、あれなんて。佐古淳君よ。」
「じゅ、じゅん。ぼ、ぼくも、じゅん。」
「うれしいんでしょ、知ってる人がきて。」
「う、うーん。」
淳はどきんとした。きらいというのではないか、あいつは……。
「ぼ、ぼく、知っとるもん、うれしいよ。」



「よかったわね。さ、いくつあげたかわかった?」
またはじめから、「どんぐりを……。」とよみはじめる順一。淳はほっとした。おかあさん先生を見ると、先生はかた目をつぶってみせた。
それからの淳は、おちついて問題にとりくむことができた。予定の二ページめの⑩は比例の問題。(さあ、これがとければ……。)と、淳がよみはじめたとき、
「さ、さようなら。」
順一の、空気のぬけた風船のような声。淳が目をやると、彼がていねいにおじぎしているところだった。
「へーん、ばかていねい。」
三、四人いた四年生や五年生の子が、一度にどっとわらった。おかあさん先生は、それを目で制して、
「えらかったね、順一君。さよなら。」
と、右手をふった。彼は安心したように目を細め、「うん。」といってからでていった。
「おかしな子……。」
「へんなやつ……。」
「かわっとるう。」
「テンポくるっちゃう。」
口ぐちにみんながいう。へやのなかには、きゅうにいつものなごやかさがもどった。
「どうして、あんなん、みてやることにした。」

淳は、さっそくおかあさん先生につめよった。
「あんなん、ってことありますか。」
「そいでも、受け持ちの先生もだめだっていっとるに。ものすごう骨がおれるに。」
「わかってるわ。でも近所だし、親の身になるとねえ……。みんな、なかよくしてくれないかしら。わたしだけじゃ、自信ないのよ。」
「だめだなあ……。骨おりぞんになるに。」
淳にうなずきながら、おかあさん先生はぽつんといった。
「あの子、おとうさんがいないんだって。それに、ひとりっ子だっていうし……。」
きき耳をたてていたほかの子が、はっと顔をあげ、八この目がいっせいに注目する。
（おとうさんがおらん……おかあさんがはたらきにいっとるだろうな……。あいつ、家へかえってもひとりなんだな……。）
「このままだと、二年からべつのクラスへいくんだって……。」
「しようがないよ、そんなこと。」
淳はさえぎってさけんだ。
「しようがないかしらねえ……。」
「そのほうがいいのかもしれんし、だいいち、先生の責任じゃないもん。」
「責任？　そうねえ……。でも、あの子がおぼえたいっていうんだって。」



「関係ないよ。えらいぶんだよ、みても。」

へやのなかは、しばらくしずかになった。みんなだまって、問題をよんでいるふりをしていた。

「おかあさんが、なみだためていったのよ。みてって。」

「あいつ、ばかだもんな。」

三年生の四郎がいうと、

「うん、なにやってものろくてさ。」

と、四年生のゆたか。

「でも、みてあげてよ、先生。」

という五年生のさわこのそばで、四年生の君代が、

「そうよ、みんなでおしえてあげりゃあいい。」

両手でほおをはさみながら、おかあさん先生は、だれにともなくつぶやく。

「ほんとは、学校でみてくださるといいのに。」

「あいつの先生はみてくれんよ、とくべつには。」

淳は、自信をもっていいきった。

「そんな……、どうして……。」

「いや、だめ。わかくておしゃれはうまいんだ、かおり先生。ぼくいつもいって、知っとるもん。」

「じゃあ、あの子はどうなるの？」

「しようがないよな。そいでも……。」

みんな、口ぐちにいいあった。淳は、やっぱりさんせいする気にはなれなかった。

（あいつがくるなら、やすんじまおうか。）

しかし、順一のわらいが気になり、月曜日、淳の足は、やはりあのへやへむかっていた。

（ひょっとしたら、ことわったかもしれん……。）

いつになく足ばやに歩き、信号にとめられた淳は、まちかねて足ぶみした。

（おるか、おらんか、おらんか、おるか……。）

淳が、「こんにちは。」とはいっていくと、おかあさん先生にむきあって、ちょこんとすわっているあいつの背中が見えた。

ちぇっとしたうちしたとき、

「あっ、せわ係のおにいちゃん。」

ふりむいた彼は、はずんだ声をあげた。へやにいた五人ほどの子がわあっとわらって、勉強は中断された。

「あ、いらっしゃい。淳君、算数のつづきをね。」
はいとこたえながら、やっぱりおったのかと苦笑し、こらっとかるくにらんだ。
「ぼくんたちのおにいちゃんだよ。」
小さなあいつは、とくいそうにいった。
淳は問題集をひらいた。へやはすぐしいんとなった。かすかにえんぴつの紙にふれる音、けしゴムの音、いつものへやだった。きょうは、だまってなにかかいているらしい順一。
(いつもしずかにやってくれりゃあいいけど……。それにしても、おにいちゃんだなんて……。)
しかし、そのうちに、彼がそこにいるのをわすれかけていた。百分率のややこしい問題が淳をとりこにしたから。と、とつぜん、
「お、おかあさん! これでいい?」
あまったるい声が、とびつくようなちょうしでひびいた。みんな、いっしゅん、あっと顔をあげ、おかあさん先生のほうを見た。そしてすぐ、きゃあっとわらった。だれもが、ほおをぽっと上気させていた。
(おかあさんだって……人の前でいうなんて……。)
みんなそのことばがなつかしく、くすぐったかった。だいじな、ひみつのことばなのに。
わらいのなかで、順一はかたをすくめ、赤くなりながら、のろっと立ちあがった。くるりとみんなのほうをむいて、
「ぼ、ぼく、まちがえた。ごめんなさい。」

そして、細い目をいっそう細くしておじぎをした。そこでまた、みんなはわらいころげた。おかあさん先生もわらい、淳もわらった。それをちらっと見て、順一はまたかたをすくめると、口へ手をあてながら、うふ、うふっとわらった。そして、おじいさんのように背をまるめて、まっかになった。
「さあさ、いいのよ。わたし、みんなのおかあさんのかわりなんだから。みんながここにいるうちはね。みんなは、きょうだいみたいなものよ。」
わらいすぎて、なみだをためている子もいた。
（こいつう、三日月より細い目をして……。）
淳は、はじめて順一にえみをかえした。

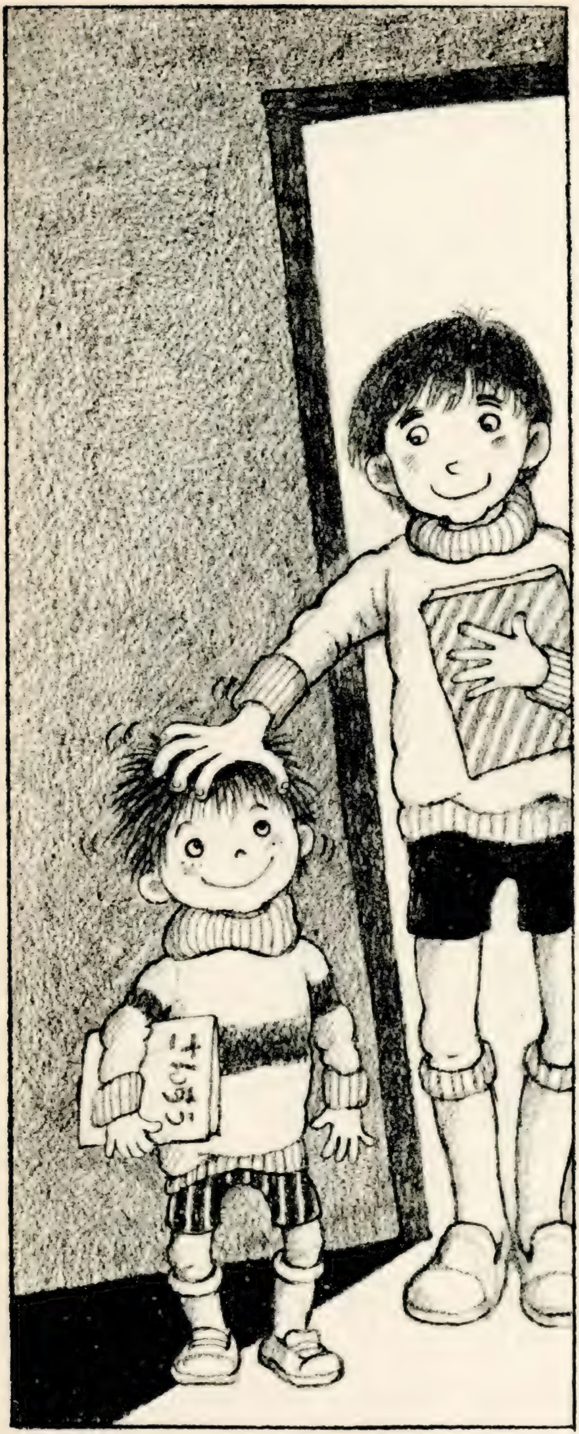
淳は一年二組へそうじにいくとき、かおり先生がテストをつけていると、のぞきこんでみるようになった。
（なあんだ、あいつ、こんな計算ちがえて。）
先生の赤インクがぺけをうつたびに、いらいらする。
「あーあ、だめだわ。また、四十二番だわ。」
かおり先生が、十二点とかきながらいった。
「だめなら、とくべつにおしえればいいじゃん。」
「えっ？……でも、先生いそがしいのよ。」



「ふうん。」
淳は、じろっとかおり先生を見た。
「あらっ、この子、淳君のしんせき?」
「べつに。」
淳は、つと先生からはなれて、がたがたとつくえをかたづけはじめた。

その日、おなじ組の洋に、
「下校時刻まであそんでいかないか。」
とさそわれたが、淳は、「うん、きょうはちょっと。」とこたえて、あわてて校門をでた。つめたい風がほおをうった。
（あいつ、まだおるかな。やりかたをよくいってやらんといかん。なんだ、十二点なんて……。）
道みち、淳は、おにいちゃんといった、あいつの細い目を思いうかべていた。
いきおいこんで見なれた戸をあけると、順一が、さようならとおじぎをしていた。
（ちぇっ、もうかえるのか……。）
その淳に報告するように、彼はいった。
「ぼ、ぼく、もうすんだ。おにいちゃんもがんばりんよ。」
へやの四、五人が目でわらった。

「こいつぅ……。」
淳は、とっさにことばがなかった。
(ぼくのはらいた、知っとるのかな?)
淳は指をひろげ、順一の頭をあらっぽくわしづかみにした。
「いたいなあ。」
細い目がわらって見あげている。淳はぐっと力をいれて戸外におしだしながら、したしみをこめていった。



「バーイ、じゅん。また、こんどな。」
「うん。」
順一といれかわりに、さっと二月の風がふきこんだ。風はつめたいが、淳のむねにさわやかななにかがみちてきた。淳はあわてて、彼のうしろすがたに、
「おーい、はらいたになるなよう。」
と、よびかけた。小さなあいつは、なんと思ったのか、右手をちょっとあげ、「うーん。」とまのびしたへんじをのこしてきえていった。
淳ははずんだ声で、「こんにちは。」といった。

山本知都子　一九二六年愛知県に生まれる。一宮高等女学校卒業。「中部児童文学会」会員。作品には『海がめのくる浜』『六さん』などがある。愛知県豊川市在住。

（絵・岡本颯子）

村の大事件

笠原肇



忠男は、くれかかったみずうみのそばの草かげにひそんでいた。石ころが道の両わきにおしやられ、でこぼこになった道路を、最終バスがやってくるはずだ。

ふかいみどり色のみずうみは、しずまりかえって音もたてない。湖岸をぐるっとまわってくる青いバスが、木ぎのあいだから、ちらちらと見えがくれする。

忠男がひそんでいる草かげは、停留所のすぐわきである。忠男の手には、細い糸のはしがにぎられていた。その糸は、道路においた、きれいなつつみ紙でくるんだはこに、つながっている。

バスをおりたお客さんのだれかが、「おや？　なんだろう。」なんて、こしをかがめてひろいにかかったら、しめたものだ。忠男は糸のはしを、ぐいとひく。はこはずるっと移動する。ひろおうとしたおとなは、きまりわるそうに、あたりをきょろきょろ見まわすだろう。そして、もう一度、はこをひろおうとするにちがいない。そしたら、また、ぐいと糸をひっぱってやる。

(ふん、おもしろいぞ。)

忠男は、草かげでひとり想像しながら、にやにやしていた。

だが、こんな子どもじみたあそびにひっかかるおとなは、だれもいなかった。バスからは、四、五人のおとながおりたが、みんないそがしそうに、ばたばたとおりすぎていってしまった。

四、五十けんの家がかたまっている小さな村である。みずうみのむかいがわには、にぎやかな温泉街があって、人間がたくさんいるから、こんなあそびにひっかかるやつも、ひとりくらいいるかもしれないが、こんな小さな村ではだれもいやしないというわけだ。

(ふん。ゆめのないやつらだな。)

忠男は、きょうのあそびが失敗におわったことをみとめて、糸をたぐりよせようとした。バスは、もうとっくにひきかえしてしまっている。

ところが、糸をぐいとひこうとしたとき、思いがけないことがおこった。音もなくつっ走ってきた、まっ黒い大型の乗用車がすなぼこりといっしょに、忠男のしかけたからのきれいなはこを、ぺしゃんこにふみつぶしてしまったのだ。

「あれ!　こんちくしょうめ。」

忠男は、あわてて糸をたぐりよせた。なんの抵抗もなく、糸はすっと手もとまできた。むすんだはこからきれてしまったのだ。

「ああ、あ。」

あわててとびだした忠男の目の前に、ぐんにゃりふんづぶれたはこが、あわれなすがたをさらしている。

「ばかもん！　あほたんきょ、死んじまえ。」

忠男は、大声をはりあげて、走りさった自動車にむかってどなった。どうせ、きこえるはずはない。安心して、あらんかぎりのわる口をどなった。

ところが、どうしたことだ。走りさったはずの自動車が、バックしてきたのだ。

（やばい！）

忠男は、にげるしせいをとった。草やぶをとびこえて、みずうみのふちの林へにげこめば、自動車は追いかけてこれるはずがない。

自動車のまどがあいて、男が顔をだした。やせて、キツネみたいにとんがった顔に、ふちなしのめがねをかけたやつ。

「おい、ぼんず。」

「へん。」

忠男は、わざとおこった声で、ぷいとよこをむいてやった。いつでもにげだせる用意はできている。

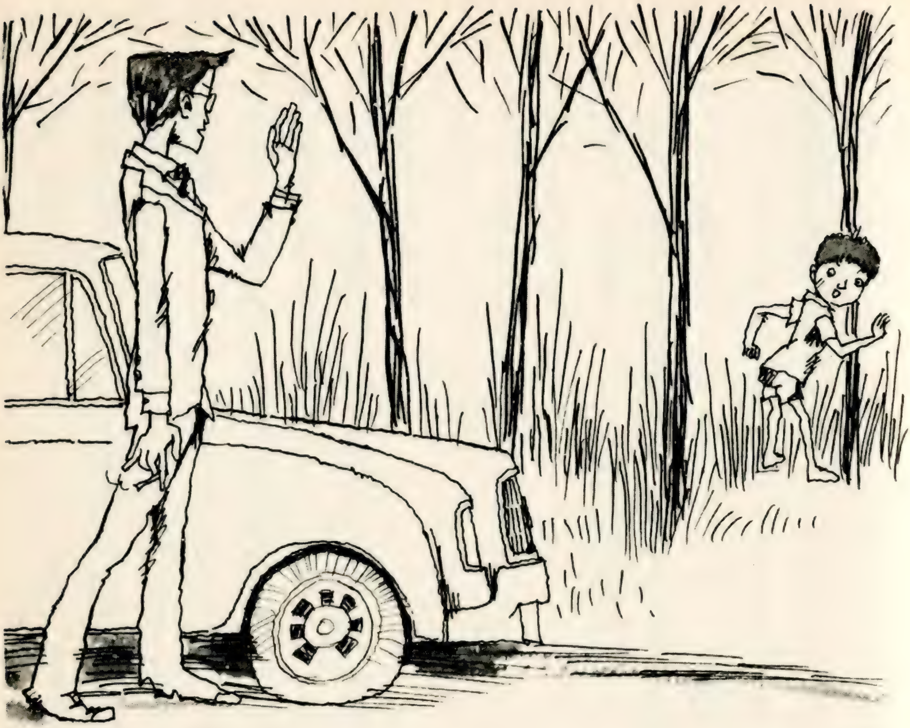
「きこえんかよ、ぼんず。」

「あほ！　耳がきこえるからおまえらの自動車にひかれなかったんだぞ。くそスピードだしやがって。」

男は、ドアをあけて自動車をおりてきた。なかにまだ、二、三人のっているらしい。

「なあ、ぼんず。」

「ぼんずじゃねえや。忠男さまだい。」
忠男は、半分草はらに足をつっこんで、にげる用意をした。
「おお、忠男さまかい。じゃ、忠男さまよ。」
「なんでえ。」
「ちょいと道をおききしたいんだがな。」
「そうかい。おききしたいとくりゃ、話はべつだ。この村のことは、なんなりときいてくれ。」
「いやに、いせいのいいがきだな。」
「がき？　じゃ、あばよ。」
「おっと、まってくれ。なあ、忠男さま。吉村の家をさがしてるんだ。吉村よ。」
「吉村？　吉村ねえ。」
「知らねえのかい？」
「知らねえわけがないでしょ。でもさ、吉村という家は三げんあるでよう。」
忠男は、テレビのものまねでこたえてやった。
すると、男はいっしゅんしんけんな顔になって、ちょっといいよどんだ。しかし、すぐに、
「ほら、札幌にでる道があるだろう？」
「ああ、オロフレ峠だ。そこの吉村？」
「そう、そう。」



「じゃ、ひろみの家だ。おしえてやってもいいぜ。」

「そうかい。ぜひたのむよ。すまないね、忠男さま。」

「へん。おせじはぬきにしようぜ。」

　村のあかりがつきだしていた。吉村ひろみの家は、村から四キロほどあがった高台の上にあった。登別温泉や札幌につうずる道のわきにあって、アスパラガスや野菜をつくっている農家だったが、ひろみは、いつもつめのさきに黒い土をつめこんで学校へきた。日ののぼらぬうちに、土のなかに手をつっこんで、アスパラガスをとるしごとをさせられているからだ。

　みずうみが黒い怪物にばけて、ぴしゃぴしゃと音をたてはじめていた。

「ありがとよ。」

　黒いデラックスな乗用車は、ライトをかーっと

道路いっぱいにたたきつけるようにてらすと、ほこりをもうもうとまいあがらせて走りさった。忠男は、ぺしゃんこになったはこをみずうみに思いっきりなげすてると、したをならしながら歩きだした。

(あほめ！　ひろみの家になんの用事があるってんだ。人のはこをふみつぶしやがって。)

温泉街のネオンがかがやきだして、みずうみの上でゆれている。にぎやかな音楽も、湖面をわたってながれてくる。それにくらべて、こちらの村は、ひっそりとしていた。うすぼんやりした螢光燈のあかりが、家いえからもれているだけだ。

赤いまるい街燈が、ぽつんとげんかんさきをてらしている駐在所へ、忠男ははいっていく。

「忠男かい?」

「そうだよ。とうさんはまだ?」

「ああ、見まわりだよ。」

「へん。ごくろうさんなこった。」

忠男は、電話番をしている母親を駐在事務所にのこして、住宅のほうへはいっていく。

いなかの駐在所は、事務所のうしろに家がくっついていた。忠男の父親は、長いことこのみずうみのわきの村で、巡査をしていた。えらくもならないし、転勤もしなかった。それでも、時間になると、きちんと見まわりにでかけるし、まいごのネコまでさがしてやる。忠男から見ると、しょうじきの上にばかがつくような勤務ぶりの警官だった。

電話のベルがなっている。母親が、きんきんする声で、へんじをしていた。

忠男は、茶の間にごろんとよこになると、テレビをかけて、見るともなく、ぼんやりながめていた。頭のなかは、からっぽなはずなのに、ふと、ひろみのことがうかんできて、気になった。

（なんだって、ひろみの家に、デラックスな自動車がきたんだ?）

つぎの日から、おかしなことが、つぎつぎにおこりだした。だいいちに、父が駐在所にいないことがおおくなった。

「またでかけたの?」

「ああ。だからさ、学校がおわったらすぐかえってくるんだよ。みずうみでいかだあそびなんかは、ごめんだよ。」

「わかってるって。」

忠男は、顔をしかめて家をでた。みずうみのふちにながれついた丸太をあつめて、いかだをつくり、勝美や絵麻子をのせてこぎだしたときのことを思いだしたからだ。あのときは、先生にしこたまおこられた。

「わしのメンツも考えてくれや、忠男。」

父は学校からよびつけられ、うなだれてかえってくるなり、あわれっぽく忠男にたのんだものだ。

「村の安全をまもる警官のわしのむすこが、きけんなあそびばっかりやって、学校からよびだされるようじゃ、ほんとにわしのメンツがたたんのだ。な、な、忠男。な、たのむじゃ。」

「メンツか。」



忠男も、このときばかりは、父親がすこしばかり、かわいそうに思ったものだ。

しかし、おかしなことは、まだつづいた。学校からかえると、背広をぱりっと着こんだ刑事が、駐在でお茶をのんでいた。まだわかい美男子の刑事である。目つきがするどいから、はあ刑事だな、と忠男は直感でわかったが、

「うちのむすこで。」

と、すぐ母親が説明して、ぺこぺこしながらお茶をとりかえた。

「ほう。何年生?」

「六年。事件ですか?」

「うん? まあ、事件といや、事件だけどねえ。」

「殺人ですか?」

「殺人? はっはっはっ。そんな大事件は、



この村にはおきそうもないね。」
「だって刑事さんがくるなんてこと、めったにないもの。」
「刑事は刑事でも、わたしは知能犯担当でね。殺人とは関係ないよ。」
「道警本部からきたの？」
「いや、室蘭署さ。」
「なんだ。」
「これ！　忠男。」
母親があわてて、忠男をにらみつけた。忠男は首をすくめると、すぐ住宅のほうへにげこんだ。
（そりゃまあ、殺人事件のおきるわけはないやな。うん？　まてよ。）
駐在事務所のほうが、さわがしくなった。父がかえってきたらしい。忠男の頭にさっとひらめいたのは、あの黒いデラックス車と吉

村ひろみのことであった。こんどの事件は、この二つと関係があるのではないか。ひろみは、きょうも学校をやすんでいた。なにかが、ひろみの家でおこっている。忠男は、駐在事務所へでていった。

「ひっこんでなさいってば。」

と母親が、きんきんする声でいった。しかし、忠男はそんな母親を無視した。父と小さな声ではなしあっている美男子の刑事にむかって、忠男はといかけた。

「ね、刑事さん。」

「あ？　用事？」

「こんどの事件って、吉村進さんとこと関係あるんじゃない？」

「なに？　どうしてそれを……。」

「やっぱり。」

「忠男、おまえはよけいなことに口だしするんじゃない。子どものくせに。」

「とうさん。吉村ひろみは、ぼくの同級生なんだよ。同級生のことを心配したっていいじゃないか。」

「ああ、吉村さんのむすめさんと……。」

わかい刑事のほうが話がわかりやすい。忠男のほうをまっすぐ見つめていった。

「じゃ、おしえてあげましょうよ、木村さん。」

「いいんですか。子どもですよ、あいては……。」

「だって同級生なんだものな。」

わかい刑事は、忠男を見てにっとわらった。せいけつな白い歯ならびが印象的だった。忠男の父のタバコで黒くなった歯とは大ちがいだ。

(刑事も、みりょく的だな。)

と、忠男は思った。

「じつはね。土地ブローカーがはいりこんでね。」

「あ、知ってる。」

「なに?」

「黒い大型のデラックス車にのってるんでしょ。」

「ふむ。福建土木のれんじゅうだな。見たのかい?」

「見た、見た。」

「いやね、土地を買うのはいいんだが、農地は農業委員会のきょかがなければ売れないんだ。それを大がかりな買収工作をしてね、買いしめにかかったんだな。」

「なんで?」

「北海道新幹線さ。南まわりになれば、ここらあたりが用地になるんでね。」

「ふうん。買収って?」

「うん。土地ブローカーが農業委員にわいろを送って、あちこちの農家から農地を買いしめにかかったわけだ。それでちょいと手入れをね。」

「ふうん。それで吉村ひろみの家でも売ったの?」
「そう、第一号。」
「かわいそうに……。」
母親がよこから口をだした。忠男にはその意味がよくわからなかった。
「なんで、かわいそうなのさ。」
「だって、そうだろうさ。進さんとこじゃ、農家しかしたことがないんだよ。農家が土地手ばなして、どうする気さ。くらせないじゃないの。」
「ふうん。そんなもんかな。」
忠男は、いつもさびしげな顔をして教室のすみにいる、ひろみのすがたを思いだしていた。
「室蘭の工場へはたらきにでるって話だったよ。」
父がひとりごとのようにいった。
「転校だな、ひろみ。」
わかい刑事は、書類をかばんにつめていたが、ふと顔をあげ、
「じゃ、わたしはこれで。たすかりましたよ。これで福建土木をしょっぴけますね。」
「いやあ、どうもお役にたちませんで。」
父親は、ふかぶかと頭をさげた。わかい刑事は、忠男のほうにひょいと手をあげ、駐在所からでていった。
(かっこいいな。)

忠男は、ぽかんとして刑事のうしろすがたを見送った。
「さあて、ふろにでもはいるか。」
父はかたの荷をおろしたように、明るい声でいった。しかし、忠男は、明るい気持ちにはなれなかった。
「新幹線で一もうけか。おとなってのは、ずるくてぬけ目なくて、しようもねえ動物だな、とうさん。」
「ああ。村の大事件もおさまった。よかった、よかった。」
「よかねえよ。ひろみんちはひっこしだ。」
「うん。それはきのどくだがな。」
つぎの日の朝、父のすっとんきょうな声で、忠男は目をさました。
「た、たいへんだぞ、こりゃ。新幹線は北まわり



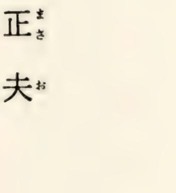
に決定したと、新聞にでとるぞ。」
「じゃ、ここはとおらないの?」
忠男は、はねおきた。ひろみの家へいってみなくてはならない、と思った。いずれにしても、売ったひろみの家と土地ブローカーのあいだでもう一もんちゃくおきそうであった。
「室蘭市長さんをはじめ、南まわりの沿線じゃ、もうれつな運動をてんかいする、とかいてある。とうぶん、ごたごたはつづきそうだな。」
「どうでもいいや、そんなこたあ。」
忠男は、かばんをひっさげると、いきおいよく家をとびだしていた。
みずうみの岸からカモが二、三ばあわてたようにとびたった。
忠男は、学校へはむかわずに、高台にあるひろみの家を目ざして走っているのだった。

笠原肇　一九三五年北海道に生まれる。東洋大学文学部卒業。高等学校教諭。「日本児童文学者協会」「日本童話会」等会員。「北の繭」主宰。作品に『港のトランペット』『人間の変革・教師の変革』がある。北海道室蘭市在住。

(絵・うすいしゅん)

予想休業します

倉持正夫



ぼくが予想にきょうみをもちだしたのは、一か月ばかり前からである。

夕食のあと、テレビで日本ダービーのニュースを見ていたおとうさんが、思いだしたというふうに、こんなことをはなしはじめた。

「おとうさんが克己ぐらいのころ、小学校五、六年生だったと思うが、すんでいた町のはずれをながれている川のそばに、競馬場ができたんだ。畑をつぶしてつくった、名ばかりの競馬場だったんだが。その競馬場におまえのおじいちゃんと……。」

そういってからおとうさんは、仏だんの上の写真を指さしながら、

「あのおじいちゃんにつれられて、よく見にいったもんだ。」

「競馬って、そんなにおもしろいの。」

「そりゃあ、おもしろいもんさ。だがね、スタンドでただ見てるだけでは、はりあいがないんだ。克己も

知ってるだろうが、競馬には馬券というものがあって、こんどのレースでは単なら四番、複なら六—二番というように、かちそうな番号の馬をきめて馬券を買うんだ。そのころは一まい一円だったが。」

「一円、今じゃあガムも買えないや。」

　ぼくはあきれたような顔をしてから、おとうさんをじっと見つめた。

勝負ごとときたら、しょうぎ、ご、マージャン、なに一つ知らないおとうさんが、むかし競馬をやったなんて、ちょっと想像がつかない。

「しかしな、一着まちがいなしと予想して買った番号の馬がびりになったり、六着ぐらいだなと馬券を買わなかった馬が、大あなの一着になったり、なかなかむずかしいもんだ。そこで、おじいちゃんとおとうさんは、予想屋から予想を買ったんだ。予想屋というのは、こんどのレースでは単なら二番、複なら三—五番というふうに、わずかの金をはらえば、おしえてくれる人のことだ。」

「へんな商売もあるもんだね。」

　おとうさんは、ぶきようでゆうづうがきかないほうだから、いつもそんばかりしていたのかと思ったが、あんがいそうでもなかったようだ。

「予想屋におしえてもらった番号の馬券を買うと、大したもうけにはならなかったが、かえりに食堂で、おとうさんは氷水、おじいちゃんは酒がすきだったから、一ぱいやるぐらいはもうかった。」

　おとうさんは今年四十七さいだから、もう三十五年もむかしのことなんだが、話をしているときのようすは、ほんとうにたのしそうだ。

それをききながらぼくは、人間もこれからのことをいろいろと予想できたらおもしろい、と思うようになった。

ぼくはどちらかといえば、外でみんなとわいわいさわぐよりは、じぶんひとりで物語のなかの人物や風景をあれこれ空想して、心のなかにえがくほうが、たのしいのである。

そんな性質だから、その日のおとうさんの話に、つよく心がひかれたのだろう。

そのつぎの日からのぼくは、今までよりももっと、空想的な少年になっていった。

きのうのおやつはバナナだったが、まだ冷蔵庫にあったから、きょうもバナナだろう。きょうあたりは、近くにすむおかあさんの妹がくるころだからケーキだろうとか、けさの新聞にはさんであった広告のちらしに、プリン大安売りとあったから、きっとプリンだ。こんなことを考えながら、学校からかえるようになった。

十回のうち一、二回ははずれるが、大部分はあたるのである。的中率八割強というところだろう。

夕食のこんだて、家にかかってくる電話の回数、大ずもうやプロ野球のかちまけ、先生のごきげんのいい日、わるい日、おとうさんがお酒をのんでおそくかえってくる日……など、つぎからつぎへと予想をたてる。

それがあたるかはずれるかを、どきどきしながらまつ気持ちは、ほかの人にはわからないかもしれない。だれにもいわない、ぼくひとりだけのひみつなのだから……。

つゆがあがった、夏休みもまもない七月なかばのことである。

ぼくはその日、おなじ六年二組の藤間孝典と学校の門をでた。

藤間はひとりっ子のせいか、頭はいいのだが気がよわく、からだもやせているので、あんまりみんなのなかまにもはいらず、ひとりぽつんといるような子だった。

藤間はからだがよわいせいか、ちょいちょい学校をやすむ。そんなとき、家の近いぼくは、先生からたのまれてプリントなどをもってゆく。

藤間は、よくベッドのなかで本をよんでいた。SFとか推理小説とか伝記とか理科読み物などが、ベッドのわきに高くつまれていたりする。そういう藤間を見ると、ぼくなんかよりずっとおとなだなあと、思ってしまう。

学校でならったノートを見せると、藤間はぱらぱらっとページをひらいて、

「そこはきょう、ベッドのなかでやったからいいよ。」

というと、すまなそうな顔をするのだった。学校へいってきたぼくより、やすんでいた藤間のほうがよくできるんだから、おどろいてしまう。

藤間と歩いているうちに、あせっかきのぼくは、顔はもちろんのこと、からだじゅうからあせがふきだしてきた。

が、一方の藤間は、このあついのにあせ一つかかない。そして、青白いきちんとした顔にくっついている、大きな目の上までたれさがっているかみの毛を、ときどきゆさぶりあげながら歩いていく。



そのようすを見ているうちに、ぼくはなんだかしゃくにさわってきた。

藤間は半ズボンからでているほっそりとした長い二本の足で、すっすっとかるそうにすすんでゆく。そのすこしうしろから、ぼくはふうふういいながらついてゆく。

そのみじめな気持ちが、予想とからみついて、ぼくはとんでもないことをしゃべってしまった。

「藤間君、きみ、いくつまで生きられるか、あててみようか。」

そういわれて、一、二歩さきを歩いていた藤間の足がぴたりととまり、うしろをむいた。

ぼくと藤間は、ゆっくりとかたをならべて歩きだした。

藤間のりこうそうな大きな目は、いわないでくれといっているような、あわれな感じだった。ぼくはその目を見ているうちに、いじわるな気持ちを、おさえることができなくなっていた。

「ぼくかい。ぼく、からだがよわいから、五十ぐらいまでかなあと思ってるんだ。しかし、今は交通事故時代だし、そんなに生きられないかもしれない、きっと。それに戦争でもおこったら、核戦争だからね、全人類がほろびる可能性もあるし……。」

ぼくがいう前に、藤間はそういった。ぼくがいいだすことばがこわいので、先手をうってしゃべったのだろう。

藤間は五十まで生きられるというが、ぼくは藤間が、中学生で死ぬのではないかと思った。なにかそういうふうに思えてしかたがなかったのである。

「藤間君、きみ、中学生になったら気をつけたほうがいいよ。」

「気をつけるというのは。」
「交通事故か、病気のことさ。」
「それで死ぬということなのかい、ぼくが。」
「まあ、そういうところだ、ぼくの予想では。」
それをきくと藤間は、きゅうに大またに歩きだし、さきにいってしまった。まがり角で、ちらっとふりむいてぼくのほうを見た顔は、小さく青く、なんともいえないほどゆがんでいた。

家にかえっても、その日のぼくは、おやつの予想も、ナイターの予想もやる気がしなかった。昼ま藤間にいったことが、おもくぼくの心にのしかかっていた。いってはいけないことを、いってしまったことへのこうかいが、頭のなかにこびりついていて、はなれないのである。
夜、藤間の家に電話をかけようかと、何回も電話のところへはいくのだが、受話器をとる勇気がでない。その夜、ぼくはほとんどねむれなかった。
つぎの日、藤間は学校をやすんだ。からだのじょうぶでない藤間は、よく学校をやすむので、先生もクラスの友だちも、藤間の欠席のことなんか、てんで気にもしなかった。しかしぼくは、授業ちゅうも、つくえだけの藤間の席のほうばかり気をとられて、先生の話も上の空だった。きっと藤間の家では、欠席の理由を電話で学校にれんらくしただろうか

ら、先生は知ってるのだと思うが、先生にききにゆくのがこわくて、それもできなかった。
ぼくは、クラスの友だちが知っているかもしれないと思って、それとなくきいた。
「藤間のやつ、なぜやすんだのかなあ。きのうは、ぼくといっしょにかえったのに。」
「藤間か、あいつ、からだがよわいから、また夏かぜでもひいたんだろう。それともがり勉だから、てつ夜で勉強して、今ごろねてっかもしんねえな。」
友だちはそういうと、ぼくのそばをはなれていった。
(病気でやすんでいるのならいいんだが、きのうのショックでやすんでしまったのかな。)
と思うと、ぼくは、すぐにでも藤間の家へとんでゆきたかったが、おそろしいことがまっているようで、どうしてもゆけなかった。
つぎの日は、土曜日だった。藤間はきょうもやすんでいる。ぼくは、ますます心配になってきた。
学校生活から解放され、外へとびだしたぼくは、きょうはどうしても藤間の家にいかなければならないと思った。
それは病気みまいなどというものではなく、ぼく自身の心をしずめるためだった。
ゆっくりゆっくり歩いて藤間の家までたどりついたが、げんかんのチャイムをならすとき、からだがかたかたとふるえた。
いつもでてくる藤間のおかあさんが、にこっとしてドアをあけた。
「まあ、克己ちゃん。孝典は、また熱をだしましてね。今ベッドのなかで、顕微鏡をいじってたようですか



ら、あがってくださいな。」

ぼくはからだにつかえていたものが、すうーっとでていったような気になった。

ぼくは、そおっと藤間のへやのドアをノックした。藤間は青いしまのパジャマを着て、ベッドにあぐらをかいて、しきりに顕微鏡をのぞいていた。

「ありがとう、今、プランクトンをしらべていたところなんだ。きみ、のぞいてごらん。これ、カニミジンコだぜ。」

藤間の声は、はずんで明るかった。それだけにぼくは、よけいおとといのことを思いだしてしまっていた。おとなしい、内気な藤間のことだから、おとといのショックはだれにもいわず、ひとりでしまつしたのだろう。

ぼくはそっと藤間のわきにこしをおろし、顕微鏡をのぞくため、かた目をとじた。

「いるだろう、カニミジンコ。うちの池の水をす

くってきたのさ。」
ぼくと藤間は、かわるがわる顕微鏡をのぞきこんだ。
「おとといのこと、ごめん。ぼく、これから予想はやめるよ。」
藤間は、「うん。」とうなずいてから、大きな目を細くし、しずかにわらった。
その日から、ぼくは予想をやめることにした。ただし、あれこれと空想することだけは、どうしてもやめられない。

倉持正夫　一九二二年茨城県に生まれる。東京第一師範学校卒業。小学校教諭。「日本児童文学者協会」会員。児童文学同人誌「青い星」、子ども雑誌「あおいほし」主宰。作品には『にゅうどうぐもの国』『メンコとおやつ』などがある。茨城県日立市在住。

（絵・岡本颯子）

メロンどろぼう

山田もと



「メロンなんかぬすんだって、まんだ青くてくえんだにな。」
「それがよ、種とりばっか三つもだ。ええにおいが温室じゅうにぷんぷんしとったで、おれ、きのうちぎるってゆったに、とうちゃんが、『まあ二、三日……種はようく実がいったほうがええ。』なんて、のんきなことをゆっとるもんで。」
秀男は、くやしそうにくちびるをかんだ。
「ばかみたよなあ。おれんとこも、種とりのをぬすまれた。」
五郎ものんびりいった。
「サーフィンのやつらのしわざだな。」
あだ名がひらめの和行が、近眼の細い目をひからせていった。
「おし（おまえ）、見たのか。」

「ううん、だけど、ゆんべは夜じゅうジャズがきこえとったぞ。」
マスクメロンは、すこし青いうちにとって出荷するが、種とりのは、うれすぎるほどおいてとる。だから、あまくてばつぐんにうまい。
「よし、今夜、現場をおさえよう。」
学校がえり、三人は頭をつきあわせて相談した。

秀男たちの村は、遠州灘に面した小さな農村だった。海側は一色の浜とよばれるはばひろい砂丘がひろがり、すぐうしろには三百メートルほどの山が立ちはだかっている。この山と海とにはさまれたわずかな平地に、夏はメロンやスイカを栽培して、生活しているのだった。
ところが、一色の浜が、太平洋ロングビーチと名をかえてから、しだいに、観光客をよぶようになった。浜には、遠州灘の大波がうちよせる。海水浴は安心してできないが、サーフィンにはおあつらえむきだ。乗用車の屋根に、色とりどりのサーフボードをつんだわかい男たちが、夏になるとキャンプをしたり、夜じゅうおどりまくったりする。
浜に店ができ、県道ぞいにはレストランだ民宿だと、しゃれたたてものがならびはじめた。
それとともに、スイカがぬすまれた、まだ青いのがわってすててあった、プリンスメロンもとられたなどと、村はそうぞうしくなった。こんどはマスクメロンである。
一本のつるに実を一つしかみのらせないマスクメロンは、てまはかかるが高く売れる。この地方の大きな

収入源だった。

星はあるがまっくらだ。いつもは気にならない波の音が、はらにひびく。

いちばん浜に近いのにぶじだったひらめの家の温室のなかへ、三人はうずくまった。目がなれてくると、温室のガラスにときおり星がうつる。

「きたら、ぶんなぐってやるぞ。」

「どろぼうつかまえたら、サーフボードを買ってくれるってさ。おれ、こうしょうしたんだ。」

「すごいぞ、ひらめ、おれものせてくれよ。」

「こねえなあ。」

ねむくなった。もう午前一時ごろだろうか。外に足音がした。

(きたぞ！　ぬかるな。)

三人は手をつなぎあって、じっとまつ。近づいてくる。このなかへはいってきたら……。

だが足音は、温室のよこをとおりすぎていく。

「あとをつけよう。」

三人は道にでた。前をいくのは、ふたりの男らしい。街燈のある手前ですがたがきえた。

「あれ、どこへきえちゃったのかな。」

街燈の下で立ちどまった三人の足もとへ、ぱさりとなにかおちてきた。黒く、細長い――。

「うえっ、ヘビだあ！」

三人はむちゅうでにげだした。ビニールのヘビとも知らず……。ふたりの男がわらいながらでてきた。

きょうから夏休みだ。三人は浜へでてみた。

「やっとる、やっとる。きょうこそはとっつかまえるぞ。」

「こうおおぜいじゃ、どろさがしはえらいこった。」

海べでは、色とりどりのサーフボードや、パンツの色があざやかだ。沖からどどどーっとよせてくる波は、すな浜近くでぐうんと立ちあがっては、まきこんでくずれる。その大波のてっぺんまで、サーフボードは垂直にのりあげる。波がくずれるとき、いっきに波のなかへおちていく。

「やったあー。」

手をひろげてうまくバランスをとっている者より、はらばいの者のほうがおおい。ひっくりかえる者もいる。

「おらがもおよごうっと。なあ、ひらめ。」

「よっしゃ、いこ五郎。」

秀男は、すな浜への坂道をかけだした。ひらめもあとを追う。

「やーい、どろぼうはどうせるだ。」

五郎がのそのそ歩きだしたときは、秀男とひらめは、まがりくねった道のむこうでもう見えない。

大きい岩は家より大きい。小さいのはこしかけほどだ。そんなのが、すな浜から沖の弥八岩までいりみだれている。岩場はここだけで、西も東もずうっとすな浜だ。ここもつりの人や、波にたわむれている家族づれでいっぱいだ。

「ここなら、見つからんでええ。」

「まったく、水泳禁止はせっしょうだよ。」

そこは、大きな岩のかげで、波もしずかだ。外側は、白いしぶきがかみつくようにぶつかっている。

「五郎はどうした。」

「どうせ、のろのろくるずら。」

岩場の東に、あたらしくできたほそう道路が走っている。両側のフェニックスの大きな葉が、ゆっくりゆれている。その下にも、レストランの庭にも、防砂堤の上にも、自動車がずらりだ。

五郎は、それらの自動車のなかをのぞいたり、木の下や岩のかげを歩きまわった。ぬすんできて食べたなら、このあたりに皮がすててあるはずだ。

だが、スイカの皮、あきかんはちらばっていても、さがすメロンの皮はない。

「メロンどろぼうつかまえにゃ、しょうちができん。」

岩場の西は、海岸線がわずかに湾曲しているので、沖からおしよせる波は、いちだんとうねりを大きくする。だから、サーフィンにはとくべついい。しかし、そこにもメロンの皮はなかった。

あつい。五郎はトベラのしげみにもたれて、いねむりをはじめていた。

「わあ、こいつはうめえ。」

「買ったら千円いじょうだ。そいつがただとはね。」

「ふふふ……。ヘビのおかげよ、ゆうべは……。」

その声に五郎は目がさめた。鼻をくすぐる、あのメロンのにおい。

赤い自動車のよこで、メロンにかぶりついているのは、ひげをはやした黄色いぼうしの男と、目玉のぎょろりとした赤いパンツの男だ。

五郎は、とびだして、ぶんなぐって、種だけでもとりもどさにゃと思うが、ひとりでは心細い。波うちぎわへ走った。

「メロンが、メロンがおったぞ！」

五郎のさけびを波の音がけす。また力いっぱいさけぶ。岩かげから秀男とひらめがでてきた。

「おったぞ、くっとるぞ。」

三人は、赤い自動車のそばへ走った。

「おらがのメロン、メロンを……。」

いきおいよく男たちの前にとびだした秀男だったが、とっさに口がまわらない。ふりむいたひげと目玉が、なれなれしくいった。目がわらっている。



「おおメロン？　ざんねんでした。ただいま品ぎれとあいなりまして。」
「どうだい。サーフィンをやらせてやるぜ。水泳禁止でおよぐのは、よくねえですぜ。」
本気か、からかっているのかわからない。だが、こちらも、しずくのおちているからだが、ちょっとうしろめたい。
「メロン、おらがの温室から、ぬす……。」
五郎がもたもたいいかけると、
「ああ、どこの温室だったかな。ちゃあんと買ってね。」
「ただ、ただだって、さっきゆっと……。」
「こいよ。サーフィンすごいぞ。ただ、もちろん、ただでのせてやるさ。」
ふたりの男は、すな浜へさっさと歩きだした。
三人は顔を見あわせた。メロンどろぼうにしては、どうどうとしている。ほんとうに買ったのかな。どろぼうがしんせつなのもおかしい。
「どうせる？」
「ついてって、まっときさだにゃ。」
「またいくのか。どろぼうについて。」
五郎がふくれる。
「あれだけじゃあ、ねじこむわけにいかん。」

ひらめと秀男は、男たちのあとを追いかけていった。

五郎は、すてられたメロンの皮をひっくりかえしてみた。よくネット（あみめ）がはっている。種も大つぶだ。だがこの皮だけで、ぬすまれたメロンとはきめられない。

買ったのなら、シールがはってあるはずだ。しかし、どの皮にも、出荷のときはるシールがない。だったらぬすんだメロン……。まてよ、温室から直接買ったなら、はってないだろう。だれが売ったのか。一けん一けんきいてまわるなんて……。

「あっ、そうだ。つるのきり口。」

メロンをつくっている人は、むちゃなきりかたはしない。買ったのなら、メロンのつるが、テレビのアンテナのようによこにもはりだしてついているはずだ。

ところが、いくらさがしても、つるのついているへたがない。木のかげ、ササのなか、岩のかげ、どこにもない。すな浜へうめたのか。あやしいぞ……。

秀男は黄色いぼうしに、ひらめは赤いパンツにつれられて、波をこえて沖へでた。

プールではおよげても、太平洋の大波のなかへくると、すこしどぎまぎする。ふたりともサーフボードにしがみついている。

「それいいけっ。」

黄色いぼうしが、おしあげて手をはなした。サーフボードは、どんどん波のてっぺんへのぼっていく。ひゃあ、高い――。

いっしゅん秀男は目をつぶった。だだだ……おちていく。波のなかをくぐってすな浜へ。足が地面につくと、現実の世界だ。ひらめもきた。

「すごいな、サーフィン。」

「おお、けどわすれるなよ。メロン。」

また沖へいく。もう一度……。やっぱり波のてっぺんからおちるときは目をつぶる。メロンも勉強もない。そこはべつの世界だ。

「メロン、きいたか。」

「ううん、チャンスをつかんで。」

「買収されたら、あかんぞ。」

「買収？　まさか。」

ふたりは、すな浜で顔を見あわせ、決心してはもどっていくが、海原では、男たちが命のつなである。

「おまえ、メロンどろぼうか。」

とは、いかにもいいだしにくい。

やけたすな浜にねころがって、秀男とひらめは、はじめてのサーフィンによっていた。



「ばかんども、メロンのことききだしたか。」
五郎が走ってきた。
「サーフィンすごいぞ。おしもやってこい。」
ひらめが、海のほうを見ながらいった。あのふたりが、サーフボードの上に立ったままでやっている。秀男は五郎にききかえした。
「だめだ。おしこそわかったか。」
「今一歩だ。ネットのはりぐあい。シールのないこと。どんなふうにちぎってあるか。」
五郎の声は、ねそべったままの秀男の耳のなかで、波の音にまじってきえていく。からだが波におしあげられたときのふわーっとした感じが、まだのこっている。
「やい、きいとるか。はやくさがさにゃ。」
「うん。だけど、くどいぞ、ちっと。」
「さては買収されたな。」
五郎は、やけたすなの上に立っていられなくな

って、足ぶみをくりかえす。
「サーフィンみたいなくだらんものに、買収されやがって。」
とうとう、おこりながら木の下へかけだした。
「あいつ、しつっこいな。」
「ほんとだよ、おれのメロンじゃないや。」
ひらめのねずみ色の顔に、すながいっぱいくっついて、まさにひらめそっくりだ。

赤い自動車は東京のナンバーだ。エンジンをうならせながら、ぽけーんと立っている三人のほうへ、
「ええもんやるぜ。」
といって、赤いつつみ紙の小ばこをなげてくれた。
秀男がぽんとうけて、サンキューと手をふった。ひらめはなぜくれるのかと思ったが、まあ、くれるものはもらっとけと、にやりとした。五郎は、ずどんとつっ立ったまま、にこりともしない。あいつら、メロン代のつもりかな。
日がだいぶかたむいた。波の音がけだるい。
小ばこは十五、六センチ角でかるい。三人は、ふったり、たたいたり、においをかいだりした。
「おかしかな。」
「なぜ、くれたんだろ。」

三人はいそいではこをあけた。

「きゃっ。」

「やられた。」

「ヘビ！　ゆんべのヘビだ。」

はこに顔をくっつけていたひらめは、うしろへのけぞって、ひっくりかえった。五郎は目をつぶって、顔を両手でおさえている。秀男だけが、ビニールのヘビをにぎっている。

「くそっ。紙きれが……、メロンごちそうさま……だと。」

「やっぱり、あいつらだったんだ。」

赤い自動車は、もう見えなかった。



山田もと　一九二〇年愛知県に生まれる。田原高等技芸女学校卒業。「中部児童文学会」会員。作品に「水くみ」（『わたしが子どもだったころ』シリーズ）がある。愛知県渥美郡在住。

（絵・うすいしゅん）

おのれ君の六回めの立候補

角川千枝子



わたしがひらいている学習塾に、おのれ君がはじめてきたのは、門のわきのヤエザクラが桃色の雲のようにさいている、春の日ぐれどきでした。

以前からわたしの塾にかよっているたかやす君が、さきに門をはいってくると、そのヤエザクラにむかって、なにかしきりにいっています。

わたしはちょうど竹ぼうきで、そのあたりをはいているところでした。

「おい。でてこいってば!」

「………。」

「おい。でてこいよう。」

たかやす君にうながされて、サクラの木のうしろからてれくさそうな赤い顔をしてでてきたのが、おのれ君です。

目の大きなかわいい、ちょっと女の子のような少年でした。白いやわらかそうな、とっくりえりのセーター。半ズボンからネギの茎のように細くて長い足がでています。

「ねえ、先生。ぼくの友だちなんだ、塾にいれてやってよ。たのむよ、ね、ね。ひとりぐらいわりこましてやってよ、いいでしょ。」

「たかやす君のクラスは十人いて、ちょうどいっぱいだから……。定員はまもりたいのよ。」

「そんなせっしょうな！　この子のおかあさんは、はたらいているんだ。だから、たのみにこられないんだ。な？」

「あ。」

おのれ君も大きくうなずきます。

「だから、ぼく、つきそい人になってきたんだ。な？」

「あ。」

彼はたかやす君のことばに、一つ一つうなずきます。

はたらいているおかあさんにとって、塾は、もちろん勉強をみてもらうところですが、それだけではありません。学校がすんでからの時間を、安全なところにおいて、子どもをかんとくしてもらうところでもあるのです。

この近所でも、お店がいそがしかったり、パートではたらきにでているおかあさんが、たくさんいます。

わたし自身もはたらいているおかあさんのひとりですから、しごとちゅうに救急車のサイレンなどきく

と、ぎょっとして立ちすくむことがあります。

ですからわたしも、なるべくそうしたはたらいているおかあさんの力になりたいという気持ちを、いつももっていました。

「じゃ、あすからいらっしゃい。たかやす君のクラスの勉強日は、月と木ですからね。この紙に、きみの名まえをかいてください。住所もですよ。」

彼は、まるっこい指でちょこちょこっとかいてよこしました。

「ええと。加藤己――カトウ・オノレ君ですね。おのれとは、めずらしい名ですね。きみのおとうさんは、禅のおぼうさんかなんかですか?」

「ちがうよ。加勝己――クワエ・カツミ! 先生って、そそっかしいんだね、そうとう!」

「なにいってるんです。きみの字がくしゃくしゃだからですよ。」

彼の小鼻のわきに、いたずらっ子らしい表情がうかびました。一見するところか細い少年ですが、敵はなかなかゆかいな子らしい。しんらつなことを、平気でこの先生にいいます。この先生も、生き生きしてほんとうのことをいう子どもが大すき。そこでこの師弟は、すっかり気があいました。意気投合というあれです。

この日いらい、彼をくわえ君などと、友だちはよばなくなりました。ちょっと発音がしづらいからでしょう。そのうちに、よその組の子までが、「おのれ君」というようになりました。

おのれ君は、いそいそと塾にくるようになりました。

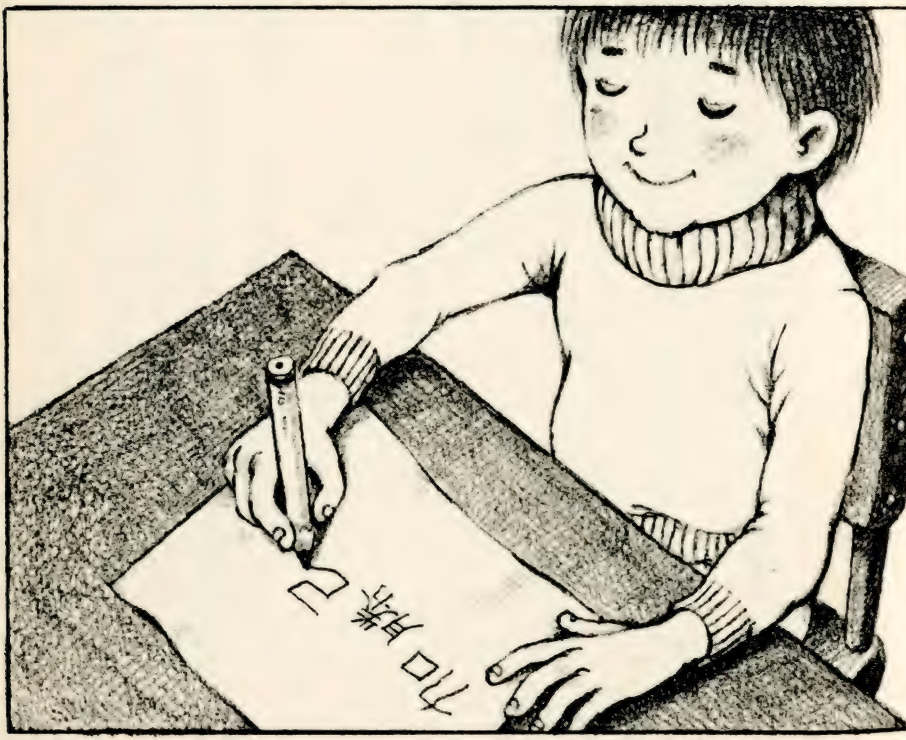
おのれ君の勉強をみているうちに、わたしは彼が、
（人気者になりたい。みんなにめだちたい。）
という気持ちをすごくもっていることを、発見しました。

わたしはずいぶん長いこと塾をしていますが、五、六年前までクラスの人気者になるのには、まずなにをおいても、〈勉強がよくできる子〉が、だいいちの条件でした。

でも、今はちがいます。

第一番は、〈スポーツがとくいな子〉。野球でもマラソンでも水泳でも、それらの選手は、クラスの女の子のあこがれのまとです。そのつぎは、〈おもしろい子〉。よく勉強のできる優等生は、第三位のあたりです。

とにかく、どのクラスにも人気者がいて、そのまわりをおとなしい子やよわい子がとりかこんで



いるのです。
おのれ君はひよわなのに、その〈人気者〉になりたいらしいのです。へなへなした彼はスポーツはからきしだめで、勉強もなみというところ。おもしろさという点でも、そのからだつきや顔や動作に、うまれつきそなわったあいきょうがあるわけでなく、テレビのコメディアンのしぐさを、なんべんもしつこくまねしてみせるばかりです。女の子はうまれつききびしいですから、
「そんなの、もう古いわよう。」
などと、ふりむいてもくれません。
ただ、おのれ君は人にはしんせつでした。女の子ばかりでなく男の子にもです。塾がおわるころ、にわか雨などふってくると、かさをもってきている彼は、
「いいよ。これ、もっていきなよ。ぼくの上着は防水してあるからよ。」
などといって雨がさを友だちにかしてやり、じぶんは、雨のなかをぐっしょりぬれてかえっていくありさまです。
ところでおのれ君は、入塾して半年のあいだに、一度も月謝をもってきたことがありません。それとなくきくと、
「あ、おかあちゃんがるすだったから……。」
とか、
「大きなお札で、こまかいのがないから、あとで。」

とかいうばかりで、けろっとしているのです。わたしはある日、たかやす君にきいてみました。
「おのれ君のうちは、こまっているのかしら？」
「なんでよ、先生。あいつのうちはすごーくでっかい家だし、三だんギヤの自転車だってすごい新車だし。いつもおこづかい、いっぱいもっているよ。おのれ君からものをもらわない子は、ないくらいだよ。」
そういえば、彼のふでいれには、いつもなめらかにとがらせたえんぴつがぎっしりはいっています。おかあさんが、毎ばんけずっていれておいてくれるのだそうですが、そのえんぴつはどれも一本百円いじょうするものばかりでした。
「おのれ君は、いいえんぴつつかってるのね。」
「あげようか。」
「あら、いらないわ。」
「いいよ。ぼくこんなにもってるもの。もらってよ。」
などと、あげるほうがぎゃくにたのんでいるのです。
わたしは、ふと心配になってきました。人気者になりたくて、人にものをあげるわけだけれど、おこづかいではたりなくて、月謝に手をつけているのではないかしら。こんなことが、不良になる道につながっていたらたいへんです。わたしは、彼のおかあさんにあってみようと思いました。
おのれ君のうちは、ドウダンツツジの生けがきのある坂の上にありました。
家はあけはなしてあって、夕ぐれのほのぐらい居間には、テレビまんがのあざやかな赤やみどりの色がゆ

れています。
おかあさんは、そのへやで夕はんを食べていました。
おのれ君は縁側にいて、そこにおいてある金魚ばちを、じぶんのひざこぞうをかかえながら、じっとながめていました。
教室でにぎやかにおどけてみせるおのれ君でなく、ひどくひっそりとさびしそうでした。彼はわたしを見つけると、すこし笑顔になって、
「おかあさん、先生だよ。塾の!」
と、どなりました。そして、縁側の下からでてきた黒い小犬にピピピピと口笛であいずをすると、サンダルをつっかけて、小犬と坂をかけおりていってしまいました。
「あら、先生。おいでなさい。いつも勝己がおせわになっています。」
おかあさんは、おくのへやからでてきました。やさしい大きい目は、おのれ君によくにています。じつは、おかあさんがこんなにうつくしくて、やさしそうな人とは思ってもいませんでした。しかし、ひどくつかれた顔をした人です。
わたしは、おのれ君をたずねてきたわけを説明しました。
友だちにしんせつでサービスするのはいいけれど、そのためにおこづかいをつかいすぎるのではないか、ということと、月謝を半年ぶんためているのだが、それをそっちにつかいこんでいるのでなければいいが――ということ。そして、そんなことから、



「ひどく気のよわいところのある加君が、不良になるきっかけになったらこまると思って、それで一度おたずねしてみたのですよ。」

といいました。きいていたおかあさんの大きな目が、いっそう大きく見ひらかれました。

　ややしばらくしてから、

「先生、すみませんでした。わたしがうっかりして、勝己に月謝をわたさなかったのです。六か月ぶんでしたか？・」

といって、たんすのひきだしからお金をもってきました。わたしはちょっといやな気分でした。月謝のさいそくが目的でなく、彼のことが心配だったのでたずねたのです。いっしょにおのれ君のことを心配しあい、相談したかったのです。わたしはがっかりして塾にもどりました。

　秋の塾の遠足は、東京大手町の逓信博物館と、おなじ大手町にある読売新聞社を見学することにしました。

　つきそった父母のなかには、あのおのれ君のおかあさんもいました。

おかあさんは、すいた電車のなかで、わたしのわきにきてすわりました。そして、思いがけないことをいいだしました。

「……あの子は、わたしのほんとうの子どもではないのです。」

「えっ？・」

「わたしのむすめの子ですから、孫になるのです。勝己のおとうさんは、気がよわいくせにみえっぱりで、なまけ者で……。どこかにいってしまったのです。ええ、ずいぶんさがしましたが、見つからないのです。」
「まあ。」
「それでわたしは、あの子を赤ちゃんのときからひきとって、そだてているのです。でも、どうかしたおりに、あれの父親のよくない性質が、そっくり勝己にあらわれますの。生きうつしというのですかしら。心配しているんです。でもわたしは、あの子がかわいくってたまらないのです。」
おかあさんはそういって、目じりにたまったなみだをふきました。そうだったのか――。まどにむかって、友だちとなにかさけんでいるおのれ君に、そんなことが。おかあさんとよんでいる人は、ほんとうはおばあさんで、おとうさんは行方不明でその生死さえもわからない。いくらおばあさんがかわいがっても、彼の心は、さびしくてみたされないのでしょう。

ある日の塾の勉強がすんだあと、たかやす君とおのれ君が、いつまでも教室にのこっていました。
「先生、あの……。たのみがあるんだけど。」
「なあに?」
おのれ君がもじもじしているわきから、たかやす君がつけくわえました。
「おのれ君ね、学級委員に立候補したいんだって。おれ、よしたほうがいいと思っているんだ。」
「どうして?」

「だってさ、四年、五年、それに六年の前期まで、もう五回も立候補していてよ。いつも落選しているんだ。」
「なんでかしら？」
「こいつ、女の子に人気ないんだ。」
「あら、あんなにしんせつなのに！」
「女の子ってきびしいね。おのれ君は、へなへなして、ちょうしばっかしよくて、だめだってさ。」
わたしは思わずわらいだしましたが、たかやす君はしんけんな目でいいました。
「で、こんどで六回めでしょ。おれ、おうえん弁士をかってでたんだ。先生！　なんとか当選させてやろうよ。」
「そう。さいごのチャンスだもんね。先生も力をかすわ。でも、どうしたらいい？」
「先生、このあいだ、大川さんのねえさんが中学の生徒会長の選挙にでたとき、いろいろやってやったじゃない。あんなふうに、おのれ君の演説と、ぼくのおうえんのことば、考えてよ。」
そこでわたしは、がんこな女の子の心をうごかすのに、五回もたてつづけに落選しても、なおかつ出馬する彼のファイトや、だれかれとわけへだてなくしんせつな、おのれ君のサービス精神を強調するおうえんの文章を、かくことにしました。
ああでもない、こうでもないと、三人がかりでわら半紙に苦心の原稿をかきあげました。
わたしとたかやす君の前で、おのれ君に予行演習をしてもらうことにしました。
たったふたりの聴衆の前で、おのれ君はきんちょうして、白目をだしてこわい顔になり、がたがたふる



えているしまつです。声など、頭のてっぺんからしぼりだしたかすれ声です。こんな思いをするならよせばいいのに、やっぱり、「立候補する！」というのですから、いったいどうなっているのでしょう。

きょうは学校の講堂で、学級委員の選挙があったはずです。

けっかはどうだったかしら。

あがらずに、思っていたことをいえたかしら？

おうえん弁士のたかやす君は、おちついている子だから、ほおをまっかにして、いいたいことをいうだろうな。

けれど、あの子のほうは、きんちょうのあまり、とっぴょうしもない声でさけぶのではないかしら。

六回めの選挙には、ぜひ当選させてやりたい

と、わたしは心からねがいました。ますます父親似になるというおのれ君です。ここで自信をもたせたい、そして父親とはべつのちゃんとした人生を歩く人になってほしい。

もし、また六回めも落選したら、彼の心はふかくきずついて、くらい方向にカーブしていってしまいそうです。

「やったってだめさ、どうせ。」それが確信みたいなものになって、彼の前途にずうっと立ちはだかったら。ああ。そんなことなら、立候補をやめさせればよかったかなあ。

夕ぐれの縁側で、じいっと金魚ばちを見つめていた、ひどくさびしげなすがたが思いだされるのです。ああ、こまったなあ。

――そのとき、らんぼうにドアがあきました。

おのれ君とたかやす君です。ふたりとも、にこにこして息をはずませています。その明るい顔を見たとたん、けっかはわかりました。

「おめでとう、当選ね！　よかったわねえ。」

「うん。どうもありがとう、先生。」

うまくいえたのかときいてみると、たかやす君はくすっとわらいました。

「こいつさ、れいのすっとんきょうな声で、『ぼく、六回めです。六回めです。』ってばかりさけんでいるの。みんな、なんとなくしいんとしちゃって。あとですごい拍手さ。六年生四クラスのなかで最高だったよ、票が！」

わたしも、講堂のようすが、目に見えるような気がしました。
おのれ君のよろこびが、じわじわとわたしのむねにもうつってきました。

おのれ君は委員になってから、なんとなく態度におちつきができてきました。
塾に十五分ばかり遅刻してきたときなど、
「きょうは委員会があったので、そのため遅刻しました。」
などと、はれやかにあいさつしています。わたしは、そのちょうし、そのちょうしと思いながら、
「さ。七十八ページあけてください。さきにすすみますよ。」
と、おのれ君をうながすのでした。



角川千枝子　一九一九年栃木県に生まれる。栃木女子師範学校卒業。作品には『女親』（読売短編小説賞）、『冬の鷹』（「主婦の友」）などがある。千葉県松戸市在住。

（絵・岡本颯子）

あたりまえのことを

有末省三



「ほんとうにすごいよね。」
雑木林と青い麦畑のあいだのせまい道を歩きながら、西山君がいった。
「うん、すごいよ。」
はずんだ声で、正男もいった。道のかなたに、郊外電車の、小さな無人ふみきりが見えてきた。
「ぼくの家ではね、新聞は二つとってるんだけど、どちらにも、岡村君のこと、写真いりで大きくでていたよ。」
「あたりまえのことをしただけですだなんて、かっこいいことをいってたじゃない。」
「なんでも、テレビにもでるってことだよ。」
「へええ、テレビにも。」
正男は思わず、目をまるくした。

「土曜日のニュースショーだって。」
「いよいよすごいな。」
「なにしろ、ふみきり事故をふせいで、何百人もの命をすくったんだからな、テレビにでるのもあたりまえだよ。」
西山君のいうとおりだと、正男は思った。三日前のあのとき、岡村君が、ふみきりにトラックがえんこしていることを電車に知らせるのが、何十秒かおそければ、たいへんなことになっていたのだ。
「でもさ。」
カンカン、カンカンとするどい音をたてはじめた警報器を見つめて、西山君はいった。ゴーというひびきとともに、電車がふたりの前にやってきた。四両連結の急行だった。
「新聞やテレビにでられるなんて、ちょっとうらやましいな。」
電車がとおりすぎるのをまって、西山君がことばをつづけた。
「トラックを見つけたのがぼくだったとしても、おんなじことをやったと思うんだがな。」
「そりゃ、そうかもしれないけど。」
「もしきみだって、そんなことにでくわしたら、そうしたと思うだろう。」
「うん、まあね。」
ふみきりをわたりながら、正男はうなずいた。けれど、ほんとうをいえば、岡村君のしたようなことができるかどうか、自信はなかった。

なんでもあのとき岡村君は、えんこしたトラックに近づいてくる電車を見つけたとたん、とまれとまれとさけびながら、電車にむかってかけだしていったのだそうだ。だが正男は、とっさにそんなことを思いつけるかどうかわからなかったし、だいいち、走ってくる電車にむかっていくのは、かなり勇気のいることだと思われた。

「いってみりゃあ、岡村君は、運がよかったんだよな。」

ところが西山君は、ふみきりのまんなかで立ちどまると、思いがけないことをいった。

「運がよかった?」

「そうさ、だって、いくら電車に知らせようと思っても、えんこした車がいなけりゃだめだろう。」

「そりゃ、そうだけど。」

西山君のことばに、正男はわらった。西山君もわらった。あたたかい春の風が、ふたりのほっぺたを、そっとなぜていった。

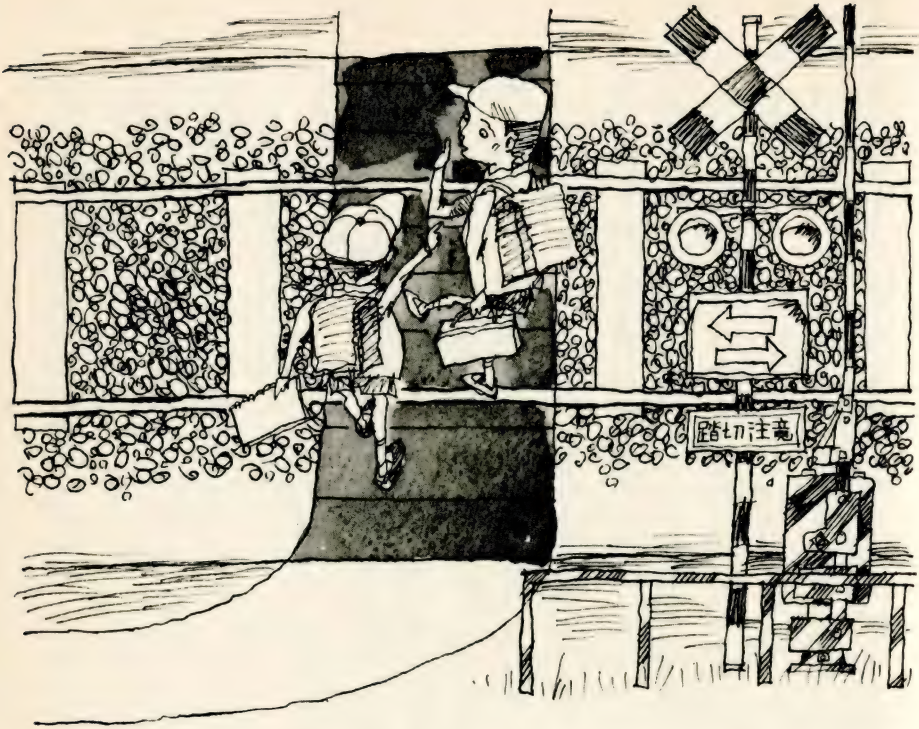
「もしもだよ。」

あいかわらずわらいをうかべたまま、また西山君はいった。

「今車がえんこしていたら、ぼくもきみも新聞やテレビにでられるんだがな。」

そういえば、岡村君が見つけた車は、ちょうど、ふたりの立っているあたりに、とまっていたということだ。

「だけど、あんなことは、そうたびたびおこらないだろう。」



「そうでもないさ。こういったふみきりでは、ちょくちょくおこるってことだぜ。」

そうかもしれないと、正男は思った。たしかに新聞などにも、ふみきり事故のニュースは、よくでているようだ。

「ふみきりっていうのはね、両側の道よりすこし高くなってるだろう。だから、エンストをおこしやすいんだって。」

「へええ、そうか。」

かたからさげた絵の道具のはいったはこをなおしながら、正男は、あらためてあたりを見まわした。西山君のいうとおり、たしかにふみきりはすこし高くなっていた。

「しかし、いくらちょくちょくおこるといったって、いつまでも、こんなところでまっているわけにもいかないよな。」

じぶんのまわりを見まわしながら、ちょっとお

どけたちょうしで西山君がいった。
「まあ、そういうことだな。」
「きょうは、テレビも新聞もあきらめることにするか。」
「それより、しかたがないね。」
ふたりは顔を見あわせ、また大声でわらった。

町のうら山につうじる、ひらかれたばかりの丘の道は、日曜日の午前ちゅうということもあって、とてもしずかだった。ふだんならよくとおる、造成地へむかうダンプカーなどはもちろん、歩いている人さえ、今はなかった。もっとも正男には、そのほうがつごうよかった。小鳥の声もよくきこえるし、写生だって、おちついてできるというものだ。
正男は歩きながら、ふととおくのほうに目をむけた。立ちならんだ団地のかなたに、長く線路がのびていた。春の日に、レールがきらりとひかっている。
正男のほおに、にこりとわらいがうかんだ。あきらめたといいながら、それでも、エンストをおこす車がやってこないかと、しんけんな顔で、ふみきりをなんどもふりかえっていた西山君のことが思いだされたのだ。
もちろん、ほんとうにそんなことがおこれば、それこそたいへんだが、しかし正男には、西山君の気持ちはよくわかった。じぶんだって、できればテレビや新聞にでたいという気持ちを、心のどこかにもっている。

けれど、いくらおこりやすいといっても、やはり事故は、むやみやたらにおきるものではないと、正男は思った。

風とたわむれるように、白いチョウが、ひらひらと目の前をよこぎった。かたからさげたはこをゆさぶり、正男は足をはやめた。もうすこしいくと、細いむかしからの道があり、そのさきに、とおく海の見える場所があるのを、正男は知っていた。彼はそこにカンバスを立て、写生するつもりだった。ぼんやりかすんだ春の海を遠景に、ちりのこっているサクラを近景にすれば、おもしろい絵ができるはずだった。

カタカタとなるはこの音にあわせ、正男は口笛をふいた。ピー、スー、ピーと、へんな音が、とぎれとぎれにながれた。だがふいている正男は、けっこうメロディーになっているつもりだった。

やがて前方に大きな松の木が見えてきた。まがりくねった、いかにも古い木だ。あの木の根もとに、えだにおおいかくされるようにして、むかしからのせまい道はのこっているのだ。

松の木にむかって、正男はいちだんと足をはやめようとした。だが、その足は思わずとまった。さけぶような、人の声を耳にしたのだ。くるしげな、たすけをもとめるような声だった。

「なんだろう。」

正男は、ぐるりとあたりを見まわした。

「おーい、おーい。」

みじかいまをおいて、ふたたび声がきこえてきた。どうやら、前方に大きくせりだした赤土の山はだのむこうがわのようだ。正男は、もう一度あたりを見まわしたが、つぎのしゅんかん、声のするほうにむかっ



て、いきおいよくかけだした。

だが、大きくカーブした道をまがったとたん、彼はおどろきの声をあげた。道の左半分に、スリップのあとが、あざやかにのこっていたのだ。

正男は、いそいでがけっぷちにかけよった。思わず息をのんだ。足ががくがくした。十メートルほどもあるがけ下に、赤い乗用車が転落していたのだ。

「おーい、おーい。」

正男のすがたを見つけて、声がいっそう大きくなった。あおむけにひっくりかえった車にもたれて、わかい男の人がさけんでいたのだ。

「おーい、どうした。」

ふるえ声で、正男もさけんだ。どうしたなんて、見ればわかることなのに、そんなことばが口にでた。

「たすけてくれ。」

あえぐように、男の人はいった。けがのため、立ちあがることもできないようだ。
「たすけてくれといわれたって。」
正男は、男の人と車とがけに、いそがしく目をむけた。彼はうろたえていた。なにかしなければならないのはわかるのだが、むねがどきどきするばかりで、どうにもならないのだ。
「はやく、はやくなんとかしてくれ。」
せかせるように、また男の人がいった。もうかなり前から、だれかがとおりかかるのをまっていたようだ。
「だけど、がけは、こんなに高いんだぜ。」
「なにをいってるんだ、一一九番に知らせてくれ。」
「そうか、一一九番に知らせりゃいいんだ。」
正男ははっと気がついた。だが一一九番に知らせようと思えば、どうしても、丘の下までいかな



ければならない。

「電話のあるところまでいって、知らせてくる。」

うわずった声で正男はさけんだ。顔をゆがめて、男の人がうなずいた。いきおいよくかけだしていく足音が、あたりにひびいた。

丘の道はあいかわらずしずかだった。小鳥がなき、白いチョウがひらひらとんでいた。なにもかも、さっきとおなじだった。だが、正男の心には、今はなにもはいってはこなかった。彼はただ、けんめいにかけつづけた。いそがなくてはという気持ちだけで、むねがいっぱいだった。

息がはずんだ。あせが、いくすじも顔をながれた。そして、絵の道具をとうとう、とちゅうでほうりだしてしまった。

ちょっとざんねんそうに、正男は新聞をとじた。せっかく期待していたのに、じぶんのことがなにもかかれていなかったのだ。

こんなことなら、はやくからおきてくるんじゃなかった。新聞受けのふたをしめながら、正男は思った。きのう、取材にきた記者の顔が思いだされた。

(あんなにいろいろ、ぼくにきいていったくせに。)

正男はもう一度、そっと新聞をひらいた。〈無免許運転でがけ下に転落、一か月の重傷〉。見だしのよこに、かみの長い、あの男の人の写真がのっていた。

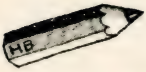
無免許であんなカーブのおおい道をとばすなんてと、警官たちもあきれはてていた。正男は、もうなんどもよんだ記事を、またよみかえした。だがいくらよんでも、無免許運転を非難することばでおわってしまっているのだ。期待をうらぎられたくやしさが、正男の心で小さなうずをまいていた。

しかし、ふしぎなほど、うずはいっこう大きくなってはこなかった。けが人をたすけたまんぞく感というのか、よろこびというのか、そんな気持ちが、心を大きくつつんでいたようだ。

正男は、丘の道をけんめいにかけたときのことをふりかえりながら、ふと岡村君のことを思った。いままでになく、彼をしたしいものに感じた。れいのことばの意味が、はじめて、はっきりわかったようにも思われた。

「あたりまえのことをしただけなんです。」

正男は顔をあげ、空を見ながら、そのことばをそっと口にした。空はきょうも、青くはれていた。



有末省三　一九三六年兵庫県に生まれる。「日本児童文学者協会」会員。「未来っ子」「児童文学評論」等同人。作品に「千寿の空」（『山とまぼろしとじろはったん』）がある。兵庫県神戸市在住。

（絵・うすいしゅん）

爆音とキツネ

久木田義雄



霧島の山なみがま近に見える原野のなかに、住民の反対をおしきって、鹿児島空港ができると、学校の子どもたちにも、いやなことがおこってきた。

信夫の家に修があそびにきたときも、その話になった。六年生の信夫と中学一年の修は、家が近いので小さいときからのあそび友だちだ。

「授業のとき、こまっとよ。いちばんこまっとは、英語のときなんだ。先生の発音が、ようききとれん。英語は発音がだいじだ。先生は、ジェット機の爆音がとおのくのをまっちょって、やりなおし。大きな声をださならんので、先生もくたくたにつかれるというちょった。」

「村長さんは空港ができたら、学校のまどガラスを防音のため、二重にするっていうちょったに、中学もまだなにもしてなかじゃろ。」

「いつになったら、防音工事をしてくるっとかね。はようせんと、授業がどんどん、わからんごっなるよ。

村長さんや、村会議員の人らにいっぺん、学校のつくえについてもらわなくては、爆音がどげんひどかものか、ようわからんのじゃ。うまいことといって、空港ができてしまえば、あとは知らん顔しとる。」

修は、ふんまんをぶちまけた。爆音は授業をさまたげるだけでなく、耳のとおくなる難聴という病気のもとにもなりかねなかった。離着陸のたびに、まどガラスがびりびりふるえ、耳がキーンといたくなるほどだった。

「空港がめずらしがられたのもはじめだけで、今じゃみんな、空港などなかほうがよかというとる。」

「もとのしずかな村がよかったなあ……。」

霧島の南面は、なだらかな線をえがいて、桜島のうかぶ鹿児島湾へつながっている。この南面の原野に、あたらしい鹿児島空港がつくられるとき、騒音問題は予想されていた。けれど、だれも、これほどひどいとは思っていなかった。

すこしぐらいの騒音はがまんしても、空港用地の補償金をもらってらくをしよう。どうせ、サツマイモくらいしかつくれない土地なのだ。補償金をもとにして、鹿児島の市内で商売をはじめた人もいれば、信夫の父のように、養鶏を大がかりにはじめる人たちもいた。

ところが、ジェット機の騒音のほかに、空港へゆききする自動車が、排気ガスをまきちらすという、よけいなおまけまでついてしまった。

あくる日、学校からかえってきた妹の和代の話も、やはりこの空港のことだった。

「かあちゃん、きょうはね、先生のきげんがすごくわるかったとよ。」

「どうしてね。」

「音楽の時間に、727のすごい爆音がして、コーラスがだいなしになったんよ。先生のピアノも、あたいたちの歌も、ろくにきこえんごとなってしもうてね。」

「そげん、ひどかと……。」

「先生はやけをおこして、ピアノをガーンとたたくと、まどぎわにいって、うでぐみしながら、おそろしか目で、空をにらんどったのよ。」

「あいてがジェット機では、けんかにならんものなあ。そげなふうでは、これからさきが思いやられる。」

「先生はあたいたちに、『音楽なんかやめだ、校庭であそびなさい。』っていって、職員室にかえられてしまった。あたいたちも、おもしろうなかったと。みんな、空港ができたせいじゃっど……。」

和代は、やりきれないという顔をした。

「信夫の組も、にたようなもんじゃろか？」

「そうよ。先生がしゃべってもきこえんから、黒板にかかれたことを、ノートにうつすようなことばっかいじゃ。かきとりの練習をしにいってるようなもんじゃ。」

信夫はなげやりにいった。クラスのみんなも、勉強に集中できなくて、やる気をなくしていた。

鹿児島国際空港は、完成してから一か月ばかりたっていた。早朝から夜おそくまで、爆音のとどろきがたえない。空港にとまっているジェット機でも、エンジン調整のために、騒音をかきたてるのだ。

鹿児島市のすぐ近くにあった空港が手ぜまになったので、大型旅客機が発着できる新空港を、この村につくったのである。
「近くから見っと、飛行機はふとかなあ。」
「べんりになったもんじゃ。東京から二時間半で、ひとっとびでくっちゅうど。」
空港見物の人たちもおおくなったが、信夫たち地元の者にとっては、べんりでもなんでもなかった。それどころか、生活をおびやかす敵になっていた。
「ほんにやかましか。」
「ほんのこっ、赤んぼも目がさめどおしじゃっど。」
「騒音公害で、国にうったえでんと、ますますどうもならん。」
ふまんはつのるばかりだった。
村の人たちが、騒音公害だとさわぐようになったころ、空港のまわりにもう一つのあたらしい事件がもちあがった。
「うーん、これはひどか！　野犬のしわざじゃな。くそっ——。」
信夫の父が、夜あけの溝辺高原の鶏舎を、いつものように見まわっていたとき、とんでもない被害を見つけた。
ニワトリがやられていたのだ。
まっ白いはね毛が、鶏舎のあちこちにちらばって、血がながれたあともたくさんあった。

「二十ぱはやられとる。野犬のやつ、一頭や二頭ではないぞ。むれをなしたやつじゃ。今に見ちょれ。」
鶏舎のまわりには、小さい足あとが点てんとしていた。さいきん、高原の鶏舎が野犬におそわれはじめていたが、信夫の家の鶏舎がやられたのは、はじめてだった。
「信夫、和代、うちのニワトリがやられちょったぞ。」
鶏舎からかけもどった父が、登校前の信夫にいった。顔色が青ざめるほど、父はこうふんしていた。ニワトリは信夫の家の収入をささえる、たいせつな財産なのだ。
「えっ！　とうとう、家のも……。」
「注意しておったのだがな。」
「おとうちゃん、ヒヨコはどうもなかったとけ？」
「ヒヨコ小屋は、とくべつじょうぶな金あみでつくっちょったから、ぶじじゃった。にくい野犬どもめ。役場の大山さんに相談して、なんとしても野犬たいじをせんと、被害が大きくなるばかしだ。」
信夫と和代はそれをきくと、学校道具をもったまま、鶏舎へ走っていった。学校のはじまり時間など、気にしているひまはない。
「ひどかこっ――。」
信夫も和代も、ぼうぜんと立ちすくんだ。想像していたいじょうのむごたらしさだった。はねが、あらしのあとのようにとびちっていた。かまれていなくても、ショックで死んだニワトリもいた。
「おにいちゃん……。」



和代はおそろしさに、からだをふるわせていた。

「かわいそうによう。こんなにたくさん！」

信夫も、こみあげてくるいかりに、くちびるをぎゅっとかみしめた。

これだけのニワトリがやられたのだから、かなりさわがしかったはずなのに、鶏舎からはなれている信夫の家には、まったくきこえなかった。

「さんざんころしたが、またくるぞ。味をしめてやってくっど。そのときは、かたきばとってくれる。」

「学校、はじまっちゃうよ。」

信夫はしぶしぶ、おもい足どりで学校にむかった。

その日、信夫がかえると、役場の大山さんが庭さきで父とはなしていた。大山さんは役場で養鶏

の指導員をしていて、家にはなんどもきてくれたことがあった。信夫とも顔なじみだった。
「こんにちは。」
「やあ。ニワトリがさいなんだったね。修君の家のも、三日前にやられた。それで、足あとをよくしらべたんだが、野犬のしわざじゃないんだよ。」
大山さんが信夫にいった。
「野犬じゃないって?」
「信夫、びっくいすんなよ。ニワトリをおそったのは、キツネだというこっだぞ。」
「キツネ? 人をだます、しっぽの長いキツネが、このへんにいたって、ほんとうですか、大山さん。」
信夫にはいっしゅん、しんじられなかった。
「キツネが人をだますかどうかは知らないが、ニワトリをおそった犯人だということは事実だよ。」
「信夫、大山さんはたしかなしょうこをつかんでくれたんじゃ。」
「大山さん、どげなしょうこですか?」
「足あとだよ。キツネの足あとは、犬の足あとよりか、すこし細長いんだ。親ギツネが一頭に、子ギツネが二頭というところかな。」
大山さんには、そんなことまでわかるのだろうか。
「野犬とばかし思うちょった。」
信夫は、しみじみと大山さんを見た。四十近い、からだのがっしりした人で、その顔は日やけしていた。

「大山さん、もういっぺん鶏舎にいって、信夫にキツネの足あとのとくちょうをおしえてやってくいやはんか。」

と、父が信夫の気持ちをさっしていった。

「じゃ、いきましょう。まったく、今どきキツネにやられるとは、ひどい話だ。」

信夫たちが鶏舎にむかおうとすると、和代がかえってきた。和代も、信夫について、鶏舎へいった。

「あたい、こわい。キツネは、人にもかみつくんでしょ。」

和代は大山さんにいった。

「いや、キツネがえさをさがしにでるのは、夜がおおい。夜行性だからね。昼ま、のこのこで歩くことはあっても、人にかみついたりはしないよ。」

大山さんはわらいながら、タバコに火をつけた。そして信夫たちに、キツネの足あとのとくちょうを、よくわかるようにおしえてくれた。細長くて、つめのあともはっきりした足あとだった。

「国際空港のほんの近くに、キツネがでてくるなんて、まっこと、おかしなとりあわせじゃ。むかし話にあるようなキツネと、ジェット機。」

父はのんきなことをいった。けさのあのいかりも、あいてがキツネだってことで、やわらいでしまったのだろうか。キツネはまた、鶏舎をおそうかもしれない。信夫はそれが心配だった。

「大山さん、そのキツネはどけすんじょっと？　空港がでくっとき、高原の動物がすみかをなくして、どこかへにげたらしかと、おとうさんはいっちょった。」

「そうよ、あたいもおぼえてる。キツネは高屋山陵のおくへにげたにちがいなかと、いってたじゃない。」
高屋山陵というのは、大むかしの天皇のお墓だといわれるところで、空港の北にあるうっそうとした森だった。

「そうだね、人の立ち入りを禁止している区域だけに、あそこにいるとも考えられるが、まだここいらにも、いる可能性はあるよ。」
大山さんの説明に、和代はびっくりした。

「えっ、家の近くに。」

「家の近くでは、かくれる場所がないよ。だいたいキツネは、あなに巣をかまえて行動する動物でね、人の目につかないところや、ぬけ道のあるところにいるものだよ。」

「そげなところ、どこじゃっとな……。」
信夫は大山さんのことばを、きんちょうした顔できいた。高屋山陵より近いとすると、むかし、軍隊がつかっていた飛行場の近くにある防空壕のあとあたりではないだろうか。

「軍隊の防空壕のあとが、あやしいね。」
大山さんが、信夫の予想とおなじことをいった。信夫はうれしくなった。

「あなの入り口の上の土がおちて、草がぼうぼうにしげっていて、かくれ場所にはもってこいじゃっど。」

「そこにちがいなか。」
キツネは空港用地にあったすみかを追われて、信夫の家のあたりにまで出没するようになったのだろう。

原野を追われたキツネに、信夫は同情の気持ちがうごいたが、やっぱり、キツネをゆるすことはできない。
「大山さん、キツネをたいじするには、どうすればいいんですか？　ほうっておけば、被害がふえていくばかしじゃ。」
「信夫君、こまったことに、今は禁猟期でね、キツネを捕獲することができないのだよ。十二月から三月までは、キツネがいくらわるいことをしても、つかまえられないんだ。キツネの数がやたらにふえて、被害も目にあまるようなら、とくべつに許可ねがいをすることも考えられるが、今のところはねえ……。」
大山さんは顔をくもらせた。解禁になるまで、二月近くもあるのだ。それまで、捕獲できないとなると、小屋をがんじょうになおして、見はりをしなければならない。
「じゃ、これでしつれい。」
大山さんは、ほかの家にもまわる用事があったので、いつまでもひきとめるわけにいかなかった。空港に土地を売って、それを資金に養鶏に力をいれているのは、信夫の父だけではない。キツネによる被害は、村全体の問題だった。
空港ができなければ、騒音公害も、キツネによるニワトリの被害もなかったのだ。村のニワトリは三千ばから八千ばにふえたが、べつにくらしがよくなったわけではない。飼料もよけいにかかる。しごとも量がふえたというだけだ。
「おとうさん、土地を売って、町へでたほうがよかったかね？」
「ばかいえ。くるしくてもな、土に生きてきたおれに、町で商売などできるわけがないことくらい、知っち

ょるだろう。どこでくらしても、苦労があるんじゃ。おなじ苦労するなら、なれたしごとで苦労するほうがよか。さあ、がんばるんじゃ、信夫。キツネにも爆音にも、まけてどうする。なあ、和代。元気をだすんじゃ。」

父の大きな手が、信夫のかたをどしんとたたいた。信夫も、和代もうなずいた。父はスコップで、死んだニワトリをうめるあなをほりはじめた。

信夫も、スコップを手にとった。見はりでも、小屋の補強でもてつだおうと、信夫は決心した。

溝辺高原を、夕日が赤くそめていた。

久木田義雄　一九一〇年鹿児島県に生まれる。鹿児島県師範学校卒業。「日本児童文学者協会」会員。作品に『文友舎物語』『修学旅行』『燃える枯草』『おんぶされたさむらい』がある。鹿児島市在住。

（絵・岡本颯子）

山のマラソン

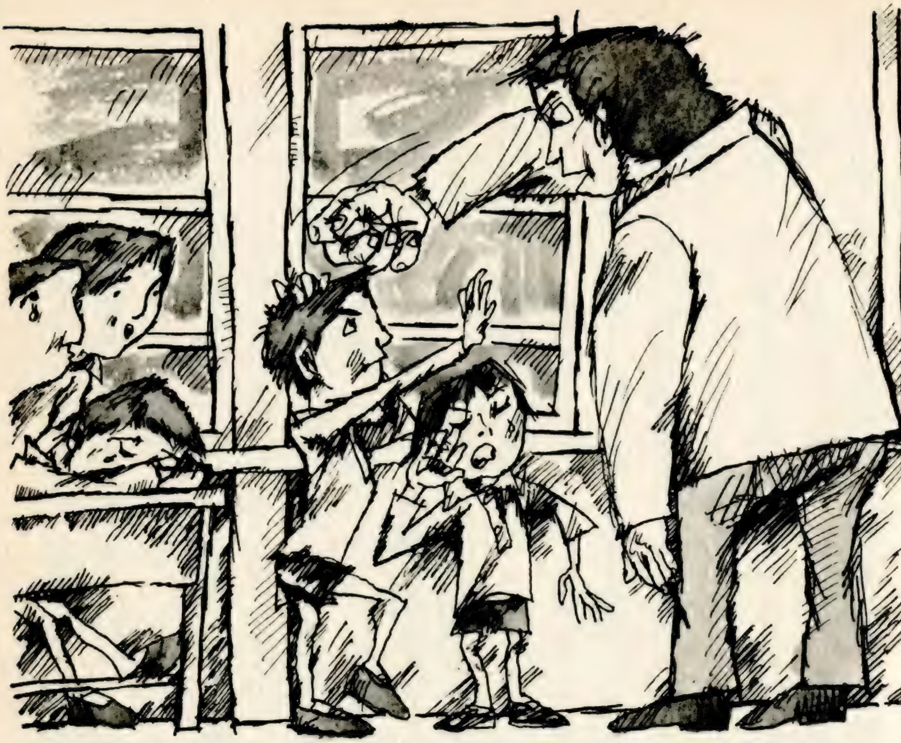
小杉義雄



「またおまえだな、金一をなかしたのは。」
教室にとびこんできた西山先生は、金一の前に立ちはだかっている五郎の頭に、いきなりげんこつをふりおろした。いつもはにこにこしている先生が、顔をまっかにして、からだをふるわせておこっている。
ところがなぐられた五郎も、だまっていなかった。
「なにするんだよ。金一はきみ子とけんかしてないてんだぞ。」
と、歯をむきだして、西山先生につめよった。
五郎は、学校一のきかんぼうだ。組の者が、ふたりのけんまくにかたずをのんでいるなかで、きみ子はつくえに顔をうつぶせて、しゃくりあげている。
「ほんとうか、金一?」
金一はなみだをふきながら、こくんとうなずいた。

「おれはけんかをとめていたんだぞ。それなのに、どうして、おれの頭をはたくんだよ。」
五郎のことばに、しばらくことばをつまらせていた西山先生は、五郎を見なおすと、とつぜんいった。
「五郎、思いちがいをした先生がわるかった。先生をなぐれ。」
思いがけないことばに、こんどは五郎のほうがきょとんとして、先生の顔を見つめた。みんなも、あっけにとられて、ふたりを見くらべている。
五郎は六年生になるまで、毎日のように、先生におこられてきた。そのなかには、じぶんがわるくもないのにおこられたことがずいぶんあったが、先生がさきにあやまったことなど、一度だってなかった。しかも、こうかんたんにあやまられては、拍子ぬけしてしまう。それに、なぐれといわれると、かえってなぐれなくなるものだ。五郎は平家ガニのような顔をほころばせて、
「しようがねえ、かんべんするよ。こんどからは気をつけろよ、先生。さあ、勉強だ。みんな席につけ。」
と、むねをはった。どっちが先生かわからない。先生はにがわらいしながら教科書をひらいた。

家では、おとなしくてはたらき者といわれている五郎だが、学校ではあばれほうだいだった。中学生よりもからだの大きい五郎だ。けんかでは、かなう者がいなかった。おこると、手あたりしだいものをなげつけるし、まけそうになると、本気でかみつくのだからしまつにおえなかった。
今年の春、大学をでたばかりの西山先生は、五郎のいる六年生をうけもって三日めに、ささいなことから五郎にかみつかれて、どぎもをぬかれた。組の者は先生のいうことよりも、五郎のいうことをよくきく。先



生がいくらふんばりをきかせても、組の者は五郎の顔色をうかがってばかりいた。

先生は五郎さえ手なずければと、おだててもみた。なぐってもみた。お説教もしてみた。しかし、どんなことをしても、態度や行動のかわらない五郎に、先生はすっかりてこずっていた。

それに、学校があまりにも山おくにあることも、先生のなやみのたねだった。赴任してきたときは、まったく心細かった。……鬼怒川温泉で電車をおりて、バスにのりかえ、川治温泉までは景色もよくたのしかったが、川治からさきは、いけどもいけども山ばかりでうんざりしてしまった。福島県との県ざかいにある学校まで、バスは二時間もかかった。まったくのへき地だ。

学校は古くて、校舎にはふとい丸太でつっかいぼうがしてあった。雨もりはするし、あなのあいたろうかは、つぎはぎだらけ。改築する話もある

が、山にすむ人はのんびりかまえていて、いつになるかわからないという。
　子どもは学校全部で八十五人。先生は七人しかいない。どの学年も一クラスで、六年生は男七人、女五人の十二人だけである。
　自炊生活はふべんこのうえないし、五郎には手をやかされるで、西山先生はほとほとまいってしまった。

　その日の五、六時間めは図工だった。梅雨あけの太陽が、校庭いっぱいにてりつけている。
「先生、立花山へ写生にいくべよ。すずしいし、ながめもいいぜ。」
　五郎がめずらしくはりきっている。立花山は学校のうらにある岩のおおい山である。十分ものぼると、とちゅうに子どもたちがあそび場にしている観音さんがある。
「よし、五郎、道案内をたのむぞ。」
「まかせておけって。立花山なら、学校の庭よりくわしく知ってんだぞ。みんな、校庭へ集合。いそげよ。」
　こんなときの五郎は、役にたつ。先生が校庭にでていくと、五郎をせんとうにきちんとならんでいて、しゃべっている者もいない。
「出発！　さっさと歩くんだぞ。」
　五郎は、とくい顔で歩きだした。
「五郎、おまえ、先生のようだぞ。いい気持ちだろう。」
「えへへ……おれも、先生になっかなあ。でもさ、おれ、頭がよわいからむりだな。」

「そんなことはない。おまえはやればできる力をもっているんだ。がんばってみろよ。」
「ほんとうかなあ。おれができないのは親ゆずりなんだぜ。とうちゃん、酒をのむといつも、『勉強はびりっけつだった。』と、じまんしているんだ。でもさ、とうちゃんは山しごとでは村一番かせいでいるんだ。」
五郎の父は、しごともよくするが、酒もよくのむ。かせいだ金のほとんどはのんでしまうという。だから、子どもが六人もいる五郎の家は、いつもびんぼうだった。
「先生、学校なんて、なんであるんだんべね。とうちゃんは、『学校さえなくなれば、五郎もおれの半分はかせげるんだがなあ。』って、酒をのむたびにいってるんだ。」
五郎が先生にこんなことをいうのは、はじめてである。はなしているうちに、山のとちゅうにある観音さんについた。
「先生、いいながめだんべ。あれが金一の家……。」
五郎はうきうきと指さした。山すそに点てんと見える家のほかは、山また山のみどり一色。山あいをぬってながれる川が、白くひかっている。
先生は、はればれとした気持ちになっていった。
「こうしてながめていると、こせこせした気持ちも、ふっとんでしまうな。どうだ五郎、日曜にでもここにきて、今の話のつづきでもするか。」
「うん、おれ、山は大すきなんだ。」
五郎も、いつもとちがって、まるで兄貴にでもはなすようなしたしさだ。そのとき、先生は、五郎が手ぶ

らなのに気がついた。
「……ところで五郎、写生の用意は？」
「きょうはわすれないさ。金一がもっているよ。」
「だめだな、五郎、人にもたせるなんて。それが、おまえのわるいとこなんだぞ。金一、もってやるな。くせになる。」
「先生、いいんです。きょうは、ぼくがもつ番なんだから。」
からだもいちばん小さくて、五郎にいじめられてばかりいる金一は、おどおどしていた。
「ぼくのもつ番だって？ 金一は五郎のけらいか。金一、かえせ。……五郎、じぶんでもて！」
先生のどなり声に、
「ぽん金、よこせ。」
五郎は金一から、ひったくるように写生の用具をとりあげた。なにしろ、学校で、じぶんの思いどおりにならないことははじめてである。
「みんな、頂上までかけ足だ。」
五郎はふくれた顔でかけだした。だれも、文句をいわずにあとを追う。さすがに山の子だ。おくれる者はいない。景色をながめるまもなく追いついた先生を見て、五郎は、
「ダムまでいくぞ。」
といいながら、いっきにかけおりていく。こんどは、男の子ばかりである。

「おまえらは、ここで写生をしているんだ。」
先生は女の子をのこして、五郎たちを追った。すべったりつまずいたり、二回も三回もころびながらかけおりていくうちに、ダムについた。せきとめられた水面は、校庭よりずっとひろい。
「こら！　どこだあ。」
先生のよびかける声は、山びことなってもどってくる。きょろきょろさがしていると、
「わあい、ここだよう。」
むこう岸から歓声がわいた。草むらからすがたをあらわした五郎たちが、手まねきをしている。
「五郎、もどってこい。」
「あかんべえー。」
先生は、水ぎわをかけだした。
「まるブタ先生、がんばれえ。」
手拍子をうちながらはやしたてる。
「あっ……。」
水をはねあげながらかけていた先生が、ころがった。
「まるブタがころんだ。わーい、どろブタだ。」
「どろブタ先生、かっこいい。」
先生はどろもはらわず、かけつづけた。だが、草むらについたときはだれもいない。そのかわり、さっき

先生がいたところから、
「どろブタ先生、こっちだよう。」
と、手をふっている。
「つかまえたら、つるしあげにしてやる。」
先生は、やすむまもなくもどっていった。だが、先生がついたときには、みんなはもうむこう岸にもどっている。
「先生、こうさんしろよ。これからはぜったいにおこらないってやくそくすれば、もどってやるぞ。」
五郎が、かちほこったようにどなった。
「おまえらに、こうさんなんかするもんか。」
先生はまた、かけだした。しかし、前とおなじことのくりかえしである。
先生は、戦法をかえて、まちぶせすることにした。
「ようし、気のすむまでもどってくるな。」
というと、かえるとみせて、やぶのなかにかくれた。じりじりしながらまっているうちに、子どもたちの声が近づいてきた。
「五郎ちゃん、おもしろかったね。また、先生をだまくらかして、山へつれだすべよ。」
富夫がはしゃぎながらいっている。
「でもよ、先生、かんかんにおこっていたんべ。こんどは、すごくおこられるよ。」



おどおどした声は金一である。

「ぼん金、心配すんな。おれがかわってげんこつもらってやっから。……あっ、だれだ！」

先生は、すばやくやぶのなかからとびだすと、五郎の手首をつかまえた。

「で、で、でたあ。」

子どもたちが立ちすくんだ。

「いくらにげたって、つかまることになってるんだ。かくごはいいな。ひとりひとりつるしあげて……あっ、いたたた。」

はなしていた先生が、きゅうにひめいをあげた。

五郎が手首にかみついたのだ。思わず手をはなしたすきに、五郎は一足とびにやぶのなかににげこんだ。にげる五郎ははやかった。ころがるようににげていく。たちまち見えなくなってしまった。

先生は、ふみたおされた草をたよりに追った。まもなく四、五十メートル前方に五郎を見つけた先生は、スピードをあげた。みるみるきょりがちぢまっていく。あと数メートル、もう一息というところで、五郎のすがたがとつぜん見えなくなった。岩かげ、木のかげ、やぶのなかにもいない。

そのとき、上のほうから、ぱらぱらと土がくずれおちてきた。その音に顔をあげた先生は、思わず、

「五郎、あぶない！」

とさけんでいた。五郎がきり立ったがけを、はいつくようにしてのぼっているではないか。

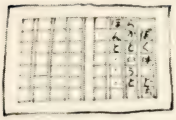
先生の声にも、五郎はふりむきもせず、木の根をつかみ、岩をたよりにのぼっていく。一歩ふみはずす

と、下は急流が音をたててながれる谷川である。五郎が足をすべらせるたびに、
「五郎、右手をのばせ。木の根がある。もうすこし上だ。……こんどは左手だ……。」
と、先生は、はらはらしながら声をかけつづけた。
ついに五郎は、がけをのぼりきった。先生は、それを見とどけると、やぶをかきわけ、まわり道をのぼっていった。五郎は、岩かげにこしをおろしていた。
「五郎、よくのぼれたなあ。」
こんどは、ふりむいた五郎のほうがおどろいた。まさかここまでは、と思っていた先生が、うしろに立っているのだ。五郎は、はじかれたようにかけだした。
「五郎、もうにげなくてもいい。」
先生の声もきこえないのか、五郎はひっしににげていく。
「ようし、かけくらべだ。学校までにげきれたら、ゆるしてやる。」
先生はどなりながら、どこまでも追ってくる。いつふりむいても、先生は五郎とおなじはやさでかけてくる。五郎は、何回もへこたれそうになった。だがそのたびに、
（つかまってたまるもんか。）
と、意地になってかけつづけた。
どこでまちがえたのか、五郎は川岸の岩にきてしまった。いきどまりだ。川はばはひろくはないが、はやい流れが岩をかんでいる。かたで息をしながら立ちどまった五郎は、追っかけてくる先生と流れをかわるが

わる見くらべていたが、やにわに、
「先生のばか!」
とさけぶと、身をひるがえして、流れにとびこんだ。
先生もとびこんだ。もがくようにおよぐ五郎は、どんどんながされていく。およぎには自信のある先生も、ながされそうだ。
「五郎、がんばれ。」
およぎついた先生は、五郎のうでをひきよせた。

たすけあげられた五郎は、歯をくいしばったままうずくまっている。
「五郎、さっきのファイトはどうしたんだ。」
先生の声に顔をあげた五郎は、
「先生……。」
というと、せきをきったようになきだした。
「なくなんて、五郎らしくもないぞ。さあ、かえろう。」
「………。」
五郎の声は、ことばにならなかった。
「またマラソンだ。いくぞ、五郎。」

先生の声がわらっている。
「うん。先生になんかまけるもんか。」
五郎は、なみだをふきながらかけだした。
「せーんせーい。」
「五郎ちゃーん。」
ふたりをさがす子どもたちの声を追うように、山のかなたから、夏をつげる雷鳴がひびいてきた。



小杉義雄　一九三三年栃木県に生まれる。宇都宮大学卒業。小学校教諭。「河鹿の会」所属。作品には『カメトン先生』『なきずもう』などがある。栃木県鹿沼市在住。

（絵・うすいしゅん）

ネコ魔女たいじ

竹入希代志



ぼくは、ほんとうは上品なんだ。だから、ばばあなんて下品なことばは、つかったことはないのだが、となりのあいつだけは、どうしても、おばさんとか、おくさんとはいえないんだ。

年は五十くらいだろうか？　やせて、目のおちくぼんだ細長い顔に、じぶんではけしょうをしたつもりでおしろいをなすりつけているが、ひたいや、目じりや、鼻のわきのしわがふかいものだから、うまくつぶれておらない。それがいつも、ぞろっとした着ものを着て、つっかけをはいて歩いてるかっこうは、まあ、魔女のばばあといった感じだ。

それにあの声だ。きいてくれよ。

「ミーや。ミーや。ミーちゃんや。どこにおるんね？」

よその人より一オクターブぐらい高い、ネコなで声だ。あれをきくと、ぼくはぞっとする。

「ミャーオ。」

すると、これもせいいっぱいあまったれた声がして、ミーがかえってきた。

かわいい子ネコだと思うだろう。それがどうして、顔なんか、もうこれいじょうはふとれません、というほどよこにふくらんだ三毛のめすネコだ。それがばばあの足もとで、もう一度、

「ミャーオ。」

と、子ネコのような声でなく。

「おお、おお、さみしかったんか。よし、よし。うまをやるぞ。」

ばばあはネコをだきあげると、じぶんちのげんかん口の石だんにこしをおろした。そして、ネコをひざにのせ、買いものかごからかまぼこをだして、板からひきちぎる。そのままじぶんの口へもっていき、一口くいきると、のこりをミーにさしだした。まちかまえたミーがそれにかぶりつき、くいちぎり、食べはじめた。

そこへ主人がかえってきた。町工場へいってるということだが、無口で、めったに声をきいたこともない。影のように、もそっとかえって、ばばあをよけてげんかんへはいろうとしたら、じろり見あげたばばあが、とたんに、二オクターブぐらいさげたじゃけんな声でいった。

「今からちくわをいれてナッパをたくけん、それまでに、作業服をせんたくしときんさい。」

主人は、ふりむかず、へんじもせずに、げんかんのなかへすいこまれた。

いったい、主人とネコと、どちらがだいじなんだろう? ネコにはかまぼこ、主人にはちくわかい。よその家のことでも、ぼくはむしょうにはらがたつ。あのおじさんもだらしがないや。男だろう! ばしっ!

と一つ、ばばあの入れ歯がとびでるほど、ほっぺたにくらわしてやればいいのに……。

おそろしいたくらみをもったぼくが、こうして、勉強べやのまどから見ていることも知らずに、ひとりと一ぴきは、まだ、むしゃむしゃとかまぼこをくっている。

十日くらい前のことだった。

ぼくが学校からかえってくると、ミーが、ぼくんちの池のふちにうずくまって、コイをねらっている。前からちょいちょいねらいにきていたが、ぼくのすがたを見ると、さっとにげてしまうので、いつか思い知らせてやるつもりでいた。さいわいにもきょうは、コイに気をとられて、ぼくには気づかない。チャンスだ!

ぼくはおとうさんの、練習用のゴルフクラブをもつと、そっとうしろから近づいた。

コイがよってきたのか、ミーは右前足をもちあげた。あいつにちょっかいされる前にと、ぼくはクラブをふりあげた。ミーはコイにむちゅうだ。ぼくはミーがちょっかいしようとしたしゅんかん、頭をねらってうちおろした。

「ギャオ!」

つぶれたような声をだしてとびはねたミーは、ザボーン! と池におちた。頭にあたれば、はいそれまでよ、だったかもしれないが、ねらいがはずれてしりにあたったのだ。

ミーはひっしでもがいた。そしてやっと池のふちにしがみつくと大あわてではいあがった。ぶるるるっと身ぶるいして水をはねおとし、「ミョオ、ミョオ!」と、ちんばをひきひき、しずくをたらしながらにげか



えっていった。

やれやれだ。ぼくもころす気はなかったのだ。池のなかでもがいてるときには、もし死んだらどうしよう？　と心配だったが、あれでミーもこりただろう。ぼくはクラブをおさめ、知らん顔でつくえにむかった。

すると、おどろいてミーをふいてやってるらしいばばあのひとりごとがきこえていたが、しばらくすると、湯あがりタオルにくるんだミーをだいてでてきた。

ぼくがカーテンのかげからそっと見ていると、水のしずくを見ながら、ぼくの家のげんかんにきて、

「おくさん！　……おくさん！」

とよびだした。いんねんをつけにきたらしい。

ぼくはだまっていようかと思ったが、ミーのようすも見たくなって、げんかんへでた。

「おかあさんはるすです。」

といってひっこもうとすると、ばばあはぼくをにらみつけてなじる。

「伸ちゃん。ミーを池へおとしたんじゃないんね?」

ぼくもまけてはいられない。

「ぼくは知らんよ。ミーはいつもうちのコイをねらってるから、とりそこねて池へおちたんじゃない? あ、そうか。どうもコイがへる思うたら、ミーが犯人か。」

と、とぼけて逆襲してやった。

「なんしに。ミーはいつもごっつおうをくわしとるけん、よそのコイなんかとるもんかいね。」

と、ばばあはべんかいをしたが、形勢が不利とみたか、そのまま、ぺったりぺったり、かえっていった。

そして、きのうのことだ。

ぼくが学校をやすんだ和恵さんに、宿題のことを知らせにいったら、ついでにおしえてくれといわれたので、和恵さんのへやでいっしょに勉強していると、

「和恵さん! ……和恵さん!」

と、ばばあがどなりこんできた。

なにをいいにきたのだろうと、ぼくも和恵さんのあとからげんかんへでていった。

「どうして犬をつないどかんのね。あんたとこのエスが、うちのミーの足にかぶりついてちんばにしたの

を、どうしてくれるんね！」
ばばあは、となり三げんくらいきこえるような大声でわめきたてた。和恵さんはおろおろするばかりで、とっさにへんじもできないらしい。
そこへ、和恵さんのおかあさんがでてきた。
「すみませんね。かんべんしてください。」
おばさんは、あやまりながら、お金らしいものをばばあの手ににぎらせた。すると、
「うちじゃ、ミーは子どものようにだいじにしとるんじゃけん、気をつけてもらわにゃ……。」
と、なおも、ぶつぶついいながらかえっていった。
「おかあさん、どうしてあんなことをするん？」
和恵さんが、ふふくらしく口をとがらせた。
「でもね、ああしとかないと、いつまでもうるさいんだよ。近所にいて、ごちゃごちゃいわれるのはかなわんから……。」
と、おばさんはまゆをしかめていった。
「いつもあの手よ。それじゃ、ごねどくじゃないの。しゃくねえ！」
和恵さんはくちびるをかんで、ばばあの家のほうをにらんだ。
ぼくまではらがたってむしゃくしゃした。そのとき、ふと、あるアイデアがうかんだ。わざわいの根をたてばみんながよくなる、と思ったので、にやりとしていった。

「和ちゃん。今にミーはおらなくなるよ。」

いよいよそのアイデア実行の日曜がきた。

ばばあはいつものとおり、近くの山にあるつばきさんといわれる小さなほこらへ、おまいりにいった。だれをまつってあるのか、どんなごりやくがあるのか、ぼくは知らん。

ぼくはきのう準備しておいた、ミカンのあきばこのだんボールをもちだした。それは、ぼくのくふうで、上ぶたがミーのおもみで、なかへはひらくが、外へはひらかないように、二か所をあらなわでくくったやつだ。そのなかにマタタビを三こいれ、一こはこの上にのせて、となりのげんかん口に近いぼくんちのへいのかげにおいた。門のところには自転車をおき、そばにロープと板とバットをそろえ、これで準備は万事オーケー。ぼくはげんかんにひきかえした。

ちょうど風のむきがよかったんだろう。ぼくがげんかんのかげから目をひからせだして、十分くらいたったころ、ミーがでてきた。

ミーはためらわずに門からはいってきたが、ちょっと立ちどまって、ぼくのへやのほうを見た。けれど、すぐにだんボールに近づき、ひょいととびのった。すると、ずずずーっと、ミーのからだがはこのなかへしずみだした。ミーはあわてて、はこのふちへ手をかけた。

（しまった、にげられる。）と思ったが、その心配は無用だった。マタタビのゆうわくにはかてないらしく、ふちの手をはなして、頭からはこのなかへはいっていった。ふたはしまった。

しめた！

ぼくはげんかんから、足音をしのばせてはこに近づいた。バットをにぎった。もしとびでてくるようなら、一発くらわしてやろうとかまえたが、やけにひざががくがくする。

ミーはあんがいおとなしく、なかで、ゴソッ、ゴソッと、ときどきうごく音がするだけで、でてくるようすはない。

ぼくはバットをおき、板をはこの上にのせ、すばやくはこを自転車の荷台の上にかかえあげると、板の上からロープでくくった。さすがにミーもおどろいたか、ちょっとのあいだがりがりはこをひっかいていたが、マタタビをあきらめてでてくる気はないらしい。

それでもぼくは、万一の用心にバットをもって、自転車にのった。しょうじきにいうが、ぼくはだんだんおそろしくなってきたんだ。からだ全



体がぶるぶるふるえる。これは、ぼくの計算にははいっていなかったことだ。でも、ここまできてやめる勇気もない。ミーがはこのどこかをやぶって、にゅっと顔をだすありさまを考えると、ぞっとさむけがする。

ぼくはそのこわさをうちけすために、むちゃくちゃにペダルをふんだ。五だんきりかえだから、しょうしょうの坂は平気だ。

農道をのぼって右の松林へはいっていくと、農業用のため池がある。ぼくはそこでとまった。あたりを見たが、いいぐあいに人はだれもいない。ロープをといてはこをだきあげると、ミーが、がりがりあばれだした。ぼくはこわくてたまらなくなり、はこを池へなげこんだ。

はこはミーのおもみで、五分の一くらいしずんで水にういている。マタタビでいい気分によっぱらっていたミーも、非常事態におどろいたか、ギャアギャアなきたててあばれている。

ぼくは、バットではこを、池の中心部へむかっておした。はこはだんだん水がはいるので、前後左右にかたむきしずみながら、陸からとおざかる。

ぼくの頭に、かちかち山のどろ船の場面がうかんだ。とてもさいごを見とどけるどきょうがなくなって、あわててにげかえった。

その夜おそくまで、ばばあは主人をどなりつけながら、懐中電燈をもって、ミーをさがしまわっていた。

つぎの日、ぼくが学校からかえり、うら口からそっと勉強べやにはいってみると、げっそりしたばばあが、けしょうもせず、しょんぼりげんかん口の石だんにすわっていた。

すこしやりすぎたかな、とぼくはこうかいした。

でも、ミーがいなくなれば、すこしは主人もだいじにされるだろうと、ぼくは善意に考えていたのに、三日めの夕方には、主人がシャムネコの子をだいてかえってきた。とたんに、二オクターブひくい声がじゃけんに命令した。

「あんたァ。高いネコを買うたんじゃけん、とうぶん酒をやめんさいよ！」

やれやれ。ぼくが一世一代のざんこく劇をやったのが、なんの役にもたたなかったばかりか、おじさんには、かえってめいわくをかけちゃったようだ。

ぼくはとうぶん、ミーのすがたや声になやまされるだろうが、これが、罪のむくいというやつかもしれない。

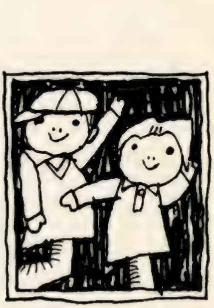


竹入希代志　一九〇八年広島県に生まれる。呉英語学校卒業。「呉児童文学研究会」会員。「ともだち」同人。広島県呉市在住。

（絵・岡本颯子）

山里にきた人形劇バス

松村　茂



峠の道にあせがぽたぽたとおちる。かたにかけた大きなバッグが、全身にくいこむ。あつい午後の日でりがまぶしい。

こしのタオルをとってひたいのあせをぬぐおうと背のびした秋元さんは、思わず、

「おうー。」

と、声をあげた。峠の頂上に、白いハンカチをふっている子どもたちが、てんてんと黒いけしつぶのように見えたからだ。

「見てみい。子どもたちがまっているで。もう一息や、がんばらにゃ。」

秋元さんは、あとにつづく三人のなかまを、笑顔でふりかえった。

秋元さんたちは、学校をまわって歩く人形劇団〈京芸〉のメンバーで、京都府の南、奈良県との県ざかいに近い山のなかの分校へやってきたのだった。

峠の上では、六年生の有一や末吉ら五人が、坂道をのぼってくる劇団の一行を、いちはやく見つけていた。
「おれ、みんなに知らせてくるよ。」
ハンカチをふりつづける有一にそういうと、末吉は、分校へかけだした。
「おーい、人形劇のおにいちゃんたちがきたでー。」
末吉は、下り坂を走りながら大きな声でさけんだ。
「わーい。」
小さな運動場にあつまっていた分校生徒のなかから、歓声があがる。
あせびっしょりになった劇団の一行が、運動場へついた。いっせいにおこった生徒たちの大きな拍手に秋元さんは、つかれがいっぺんにふきとぶ思いだった。
「とおいところから、ごくろうさんです。おまちしていました。おつかれだったでしょう。」
わかくて大きなからだの大前先生があいさつをすると、有一たち五人の六年生は、いっせいに一行の背中のバッグにとびつき、とりあうようにして教室へはこんだ。
「へええ、すごいおもいやんか。これはたいへんや。こんなにおもい荷物をもって山や海のある町をまわるの、しんどいやろなあ。」
感心したようにいう有一に、秋元さんはわらってうなずく。
分校の生徒は、一年生から六年生まで、全部で二十人。教室は一つだけだ。
秋元さんたちは教室にはいると、やすむまもなく舞台づくりにかかった。みんなの目の前で、幕がつくら

れ、舞台ができあがっていく。
劇がはじまった。さいしょは『大工と鬼六』。ざわついていた教室がしずかになる。みんなはじめて見る人形劇だ。大きく見ひらかれた四十のひとみが、つぎつぎにあらわれる人形たちのうごきを見つめる。

第一幕がおわると、大きな拍手がおこった。有一も手がいたくなるほど手をたたいていた。

つぎは『サーカスの象』。有一は時間がたつのもわすれていた。いつまでもおわらなければいいと思った。

しかし劇団の人たちは、あまりゆっくりしてはいられなかった。夕方には峠の下の神社前にくる最終バスにのって、かえらなければならないからだ。

やがて人形劇はおわりになった。拍手はなかなかおわらない。そのなかで、秋元さんたちは大いそぎで舞台をかたづけ、道具をバッグにつめこむ。

「じゃ、つぎにまたくるまで、みなさん元気でね。勉強にもうんとがんばるんだよ。」

秋元さんがわかれのあいさつをしたときだ。有一は思いきって手をあげた。

「人形劇のおにいさん。つぎはいつきてくれますか。つぎの日をやくそくしてください。」

「さあ、そのやくそくは……。じつは、この山の分校のようなところで、まだ一度もまわっていないところが、たくさんあるんだよ。だからざんねんなことに、つぎのやくそくができないんだ。できるだけはやい機会にまたまわってくるから、それまでがまんしてほしいな。」

秋元さんが、すこしこまった表情でこたえると、こんどは末吉が手をあげた。

「人形劇のバスをつくってもらえないんですか。そうすれば、どこへでもまわれるし……。」



「えっ、人形劇のバス？」
秋元さんは思いがけない末吉の発言に、目をまるくした。生徒たちのうしろに立っていた大前先生がいった。

「そうだ、それはよい考えだ。京都じゅうのみんなが力をあわせたら、人形劇のバスがつくれるかもしれない。もっといろんなところの分校の子どもたちも、人形劇を見ることができる。しかし……。」

先生は、そこまでいって、ちょっとことばをにごした。

「ぎょうさんお金がかかるやろね。」

有一が、たまりかねたようにいった。

「先生。村長さんか知事さんにたのんでみたらええわ。そうや、みんなで手紙をかこうやないか、人形劇のバスをつくってくださいって。劇団のおにいさんたちも、バスができたら、もっとらくになって、ぼくらもゆっくり人形劇が見られる。どうや、かいてみいへんか。」

有一の目は、しんけんだった。

「そうや。」

末吉が、まっさきにさんせいした。

「さんせい。」

「さんせい。」

みんなも大きな声でこたえた。

「ありがとう。よいことをきかせてくれて、ほんとうにありがとう。京都にかえったら、みんなの声をかならず知事さんにつたえるよ。」

秋元さんもうれしそうにやくそくすると、大きなバッグを背おった。

「それじゃあな。」

「さようならあ。」

みんなは、峠の頂上から、劇団の人たちのすがたが見えなくなるまで手をふっていた。

「なるほど、人形劇のバスとはおもしろい。レントゲンバスや図書館バスがあるんだから、人形劇のできる舞台つきのバスがあってもいい。うん、これはおもしろい。」

秋元さんたちを前に、分校から送られてきた子どもたちの手紙をよんでいた知事は、にこにこしていった。有一たちとのやくそくをまもって、秋元さんたちは京都府知事にあいにきたのだった。

「それが実現できれば、すばらしいことです。日本ではまだ人形劇バスはどこにもありません。ぜひつくってください。」

秋元さんは、からだをのりだすようにかたった。かたはばのひろい、どっしりした知事の顔からも、いつかわらいがきえてしんけんな表情になっていた。

「その人形劇バスに、みなさん、のってもらえますか。そして、山おくや漁村の子どもたちのところへまわってくれますか?」

「はい。もちろん、どんどんまわって上演します。きっと子どもたちは大よろこびするでしょう。その顔が見えるようです。」

力をこめてうったえる秋元さんたち劇団の人たちに、知事はやがて大きくうなずいた。

それから一年たったある日のこと——。

秋元さんは、分校の有一たちへ手紙をかいた。

「みなさん、お元気ですか。人形劇バスがうまれました。これは、みなさんたちの声が大きな力になったからです。今、日本海の見える村にきています。一週間したら、そちらの分校へいきます。それまでまっていてください。」

その日がやってきた。この前とおなじように峠の上でまっていた有一たちの目に、すなけむりをあげてのぼってくる人形劇バスが、くっきりと見えた。さわやかな白い車体に、グリーンと赤であざやかに波もようがえがかれている。

「きた、きた、きた！　きたぞおっ。」

有一たちは、おどりあがってよろこんだ。運転台のなかには、秋元さんたち五人の劇団員がのっている。

バスが峠につくと、有一たちは、わあっとばかりに、バスのなかへなだれこんだ。

バスは、大とくいの有一たち五人の六年生をのせたまま、みんなのまつ運動場へおりていく。めずらしい人形劇バスを見ようと、きょうは村じゅうの人たちが分校にあつまっていた。



停車したバスのよこはらが自動的にひらいて、たちまち舞台になると、おとうさんやおかあさんたちのなかから、「ほおっ。」というおどろきの声があがった。舞台に立った秋元さんのあいさつがはじまる。

「みなさん、おまちどおさまでした。これが人形劇バスです。みなさんがつくった日本で一台だけのバスです。どんなにふかい山のなかでもまわれるバスです。これで京都の子どもはみんな人形劇を見ることができるのです。」

大きな拍手がおこった。

きょうの劇は、『機関車やえもん』だ。人形の機関車が舞台の上を走る。やえもんの動作の一つ一つに、おとなも子どもも、いっしょになってわらい声をあげた。

人形劇がおわったあと、秋元さんたちを中心にして、バスのなかでお話会がひらかれた。もう終

バスの心配はないので、劇団の人たちもゆったり時間がある。今見た『やえもん』の感想やおにいさんたちの話がひとしきりつづいたあと、とつぜん五年生の周作がいいだした。

「ぼくたちに人形のつくりかたをおしえてください。」

有一は、びっくりした。でも、じぶんたちで人形劇をやれたら、と考えると、思わず大きな声でさけんだ。

「さんせい。」

しかし、有一の声は、同時に生徒たちのなかからおこったおなじ声にかきけされていた。

秋元さんが、わらいながらいった。

「おしえてあげたいけど、きょうはむりだよ。材料をもってきていないし。じゃ、このつぎくるときに、スポンジと大きな画用紙、それからボール紙、古いきれ、毛糸、たくさんののりと細いぼうを用意しておいてくれないか。そしたらおしえられる。」

日曜日は、朝からはげしい雨だった。有一は、教室のまどから秋の雨雲をぼんやりとながめていた。日曜日だというのに、教室には生徒たちが全員あつまって、人形づくりの材料をつくえにつんで、みんなだまりこくっている。

きのう秋元さんから電話で、あす人形づくりにいくとれんらくがあったのに、一時をすぎてもまだ劇団のバスはやってこなかった。

「こんなにふっては、山道も運転しにくいだろうから、きょうはだめかもしれんぞ。」

大前先生がすがたを見せて、みんなにいった。
(やっぱり、だめかな。)
有一はがっかりして、いすから立ちあがった。そのときだ。水しぶきをあげながら運動場のなかを走ってくるバスがまどガラスにうつった。
「わーっ。」
歓声が教室の天じょうにひびいた。
キツネ、トラ、タヌキなど動物の人形を手にした秋元さんたちが、雨にぬれたかみをかきあげながら教室にはいってきた。みんなはどっととりかこむと、思い思いに人形に手をだした。秋元さんは、人形を子どもたちに一つ一つわたしながらいった。
「さあ、いっしょに人形をつくろう。そして、じぶんたちの人形劇団をつくるんだ。ほかの学校でも、みんなで子どもの人形劇団をつくりはじめている。〈わらんべ人形劇団〉というんだ。」
有一は心がはずんだ。
(京都のあちこちに、ぼくらとおなじような〈わらんべ人形劇団〉がうまれる。ぼくらもまけないぞ。)
周作が有一のそばにきて小声でささやいた。
「有ちゃん、よかったね。ぼくらの声や手紙が、こんなになるなんて。すごいや。」
周作の目は、うれしそうにわらっていた。
いよいよ人形づくりだ。スポンジをはさみでいろいろなかたちにきって、絵の具をたっぷりぬれば、頭や

手足のできあがり。それに古いきれや毛糸の衣装を着せる。

みんないっしょうけんめいだ。しかし、はじめはみんな、なかなか思うようにいかない。手にのりをべったりとつけて、何回もくりかえす。それでも六年生がつくりはじめた人形は、しだいに人形らしくなってきた。

やがて日がくれた。おかあさんたちが、村からべんとうをはこんでくれた。劇団の人たち、大前先生、生徒たち、みんなで食べるべんとうはおいしい。だれかの、なんでもない話に、どっとわらい声がおこる。

食事のあと、台本づくりにかかった。有一の提案で、題は、『分校へかえったお馬さん』ときまった。

村にのこっていた一頭の馬が売られていく。その馬を分校の馬としてとりもどすため、分校の生徒たちが村役場へいき、村議会の人たちにもうったえ、お金をだしあって馬を買いもどすというストーリーだ。

こまかいところを秋元さんたちにおしえてもらい、ようやく台本らしくなったときには、外はもうすっかりくらくなっていた。

峠道をヘッドライトで明るくてらしながら京都へかえる人形劇バスを、六年生は分校の校門に立って見送った。

つぎの日曜日は、できあがった人形でけいこをすることになった。人形の馬がとびはねて、まるで生きているようだ。台本にあわせて人形がうごき、物語が展開していく。

「どうだい、人形劇を村の人たちにも見てもらっては……。」

けいこを見ていた大前先生が声をかけた。

「そうや、それはいい。おとうさんやおかあさんにもきてもらおう。」

有一がいうと、みんなのなかからも、

「さんせーい。」

と、いっせいに声がとんだ。劇団の秋元さんへも、このことを手紙にかいて送った。

分校の前に大きなポスターがはられた。

つぎの日曜、昼一時から〈人形劇団の六年生〉が人形劇『分校へかえったお馬さん』初上演!

〈人形劇団の六年生〉一同

その日曜日も、朝からあいにくと雨空だった。山は秋になると雨がおおい。しかし、昼前にはかさをさしながらも、村の人たちがつぎつぎとすがたを見せはじめた。

そのとき、校門近くに自動車の音がした。人形



劇バスだ。運動場についたバスのなかから、六年生ぐらいの子どもたちがおおぜいおりたって、教室へかけてくる。

八キロはなれた町のなかにある小学校のなかまたちだった。秋元さんが町の小学校へきょうのことを知らせると、みんなもぜひ村の人形劇を見たいといって、バスにのってきたのだった。

分校の子、村の人たち、町の子どもたちで、教室はたちまちいっぱいになった。有一があいさつした。

「みなさん、こんなにたくさん見にきていただいてありがとう。つぎは町の小学校でも人形劇が見られるように、たのしみにしています。劇団のおにいさんたち、ありがとう。このうれしい日は一生わすれません。ではこれから、ぼくたち六年生の人形劇をはじめます。」

拍手が教室をつつんだ。大前先生と秋元さんが、「うまいぞ、うまいぞ。」といいたそうにうなずいている。

有一は末吉たちに、「さあ、はじめよう。」とあいずして、舞台うらへまわった。

松村茂　一九二七年京都府に生まれる。京都民報社記者。「京都児童文学会」編集委員。京都市在住。

（絵・うすいしゅん）

風にのる六年生

新井恵美子



まどの外では五月の風がひかっていた。あんまり外が明るいので、教室が空をとんでいるような、そんな感じさえしていた。

わたしたちはさっきから、社会科の勉強をしていた。「日本国憲法はだな。」なんて、川口先生はときどき、大声をだす。わたしたちのねむけを追いはらうつもりらしいのだ。でも、わたしたちは勉強する気など、とっくのむかしになくしていた。それというのも、外があんなにひかるせいなのだ。

「しかし、いい天気だなあ。先生は、どこかへあそびにいきたくなったなあ。」

と、やっぱり大きな声でいいながら、先生がまどのほうに歩いていった。

「おまけに、あすは日曜か。」

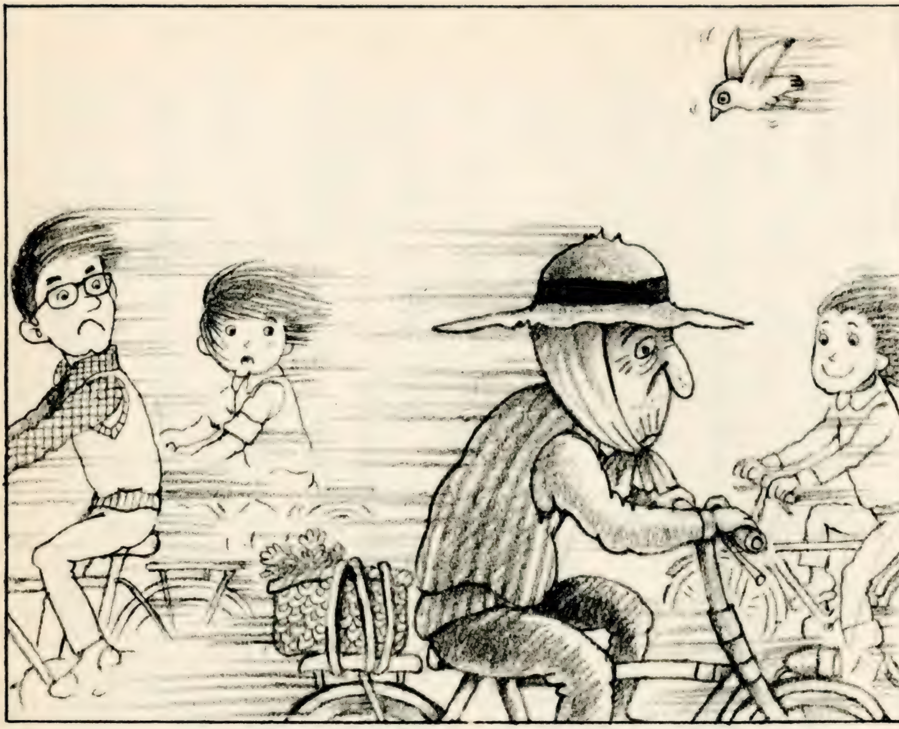
と、こんどはすこし小さい声でいった。

「ぼくたちもどこかへいきたいでーす。」

とさっそくさけんだのは、一郎だ。こんなとき、一郎はいちばんのりやすい。
「そうか。きみらはどこかへいくのだな。そこへ先生もおつれいただこうかな。」
と、先生はまるでひとりごとのようにいった。
「サイクリングにしましょう。」
「いぎなし。さんせい。さんせい。」
「あす八時、校門前集合。べんとう持参のこと。」
「雨具も持参のこと。」
と、まあこんなぐあいに、話はいっぺんにきまってしまった。もう社会科のことなんか、すっかりけしとんでしまった。
　ひかる五月のなかを、教室はますますはやくとんでいくようだった。
川口先生がさいしょから、「あす、サイクリングにいこう。」と、わたしたちをさそわなかったのにはわけがある。
　わたしたちの学校では、事故をおこすことを心配して、休日に先生が生徒をつれ歩くことを禁止しているのだ。川口先生はわたしたちとどこかへいきたくなると、生徒が計画してでかけるのに、びんじょうしたかたちでくっついてくるのが、いつものやりかただった。
　よく日は、きれいに晴れあがっていた。
「いってきます。」

ペダルをふみだすと、風がすこしだけひやっとした。
校門の前に、誠や一郎がきていた。わたしの親友のまり子は見えない。
「まり公、ねぼうしたのかな。」
なんてつぶやくと、一郎が、
「ばかだな。まり公がくるわけないだろう。彼女はサンタマリーヤだぞ。今ごろ猛勉さ。」
という。
まり子がサンタマリーヤ女学院を受験するのは知っていたが、きのうの夕方、「あしたはきっといく。」
と、あんなにはっきりいったのだもの。
わたしはジーパンのポケットから十円玉をさがしだすと、赤電話めがけて走った。
受話器のむこうのまり公のママは、とうとうまり公をよんでくれなかった。
「まり子は私立中学をうけるのよ、サイクリングどころではないの。わかった。」
そこで、ガチャンと電話がきれた。
「うらぎり者！」
まり公の顔が、ちらりっとわたしの頭をかすめていった。
校門にもどると、川口先生と友だち十七人があつまっていた。全部で十九名。
「これだけかな。出発しよう。」
と、誠がせんとうにおどりでた。

「おまえ、へすんなよ。」
なんていってる者もある。
「やっ子のでけえけつ。」
みんないいたいことをいいながら、一列になって走りだした。
わたしたちの自転車の列は、長いひものようになって、小さな路地をなんべんもとおりぬけた。みんなの着ているいろんな色のシャツやぼうしが、リボンのようにながれていった。
すこしたって、わたしたちは大きな道路にでた。ここさえこしてしまえば、鶴見川ぞいのサイクリングコースまでわずかだ。わたしたちは、いつもこの大通りできんちょうするのだ。
やがて、川が見えてきた。川の水は、あふれそうにたっぷりとながれている。コースにでると、もうすっかりサイクリング気分になった。
もう、わたしはまり公のことなんか、思わないことにした。「うらぎられた。」なんて、おおげさにいってみたけど、わたしの本心ではない。ほんとうは、(かわいそうなまり公。)と思っただけ。ちっぽけな気持ちなんか、大きな景色のなかではふっとんでしまいそうだった。
わたしたちの背中で、東横線の電車がとおりすぎる音をきいた。
「前方、自転車一台、すごい美人。」
と、わたしの前の一郎から伝言がきた。うしろの先生につたえる。先生は、ちょっとふるえる声でやっ子につたえている。



まもなく、前方から自転車がやってきた。のっているのは、小さなじいさまだった。

うしろの先生が、わあわあおこっている。「なにが美人だ。」なんていっている。犯人はあきらかにせんとうのまこちゃんこと、誠である。

ちょうどそのころ、まぶしいような日の光がすこしずつかわってきた。風がすこしつよくなった。それがむかい風になったので、ペダルをふむのに力がいる。先生でさえ、「よっこらしょ。」なんていっている。

「だから、やだよなあ、春というのは。かわりやすいんだよ。女心といっしょだよ。」

先生はぶうぶういう。

でも、わたしは、そんなふうにつよい風にむかっていく感じって、きらいじゃない。かえって、やりがいがあるって気もした。

サイクリングコースは、川の流れにさからいな

がら、上流へ、上流へとむかっていく。わたしたちは、コースとはすっかりなかよしで、カーブするところも、でこぼこ道のところもみな知っているのだ。それなのに、くるたびにちがった景色に見えるのはなぜだろう。風や空がちがうせいだろうか。

走りだしてから、ちょうど二時間で目的地についた。

わたしたちは、このサイクリングコースの終点にある遊園地には、いかないことにしている。そして、川ぞいの草原を、「川口園」と名づけて、目的地にしていた。

川口園が見えると、われさきにと自転車をほうりだして、草の上にねころんだ。

あせばんだからだのなかを、すうっと風がふいた。頭の上に、さきすぎたレンゲやおばけみたいに大きくなったツクシがゆれている。

「先生、はやく結婚しないと、こんなになるわよ。」

と、やっ子が先生の顔の上に、どさりとおばけツクシをなげた。

「ばか、ばか。」

先生は、大まじめにおこっている。

「おまえら、そういうがな、先生が結婚してみろ。だれが、おまえらとこうやってあそんでくれると思うのか。日曜なんか、先生はおくさんとべたべたただぞ。」

そのとき、まこちゃんがけったかんが川面にとんだ。わたしややっ子もかんけりにまじった。先生まで、かんをけっている。

「先生、およめさんはむりですね。」
土管の上にじんどったまこちゃんが、どなっている。
先生は、土管の上のまこちゃんをひきずりおろしにかかった。大きな先生の下になって、まこちゃんはひっしで土管にかじりついている。いやにしんけんな顔のまこちゃんが、なんだかおかしかった。
まこちゃんは、学校の近くの大きな農家のひとりむすこだ。いつもあそびまわっているくせに、クラスではだれよりも成績がいい。生徒会の議長にもえらばれたくらいで、とてもしっかりしている。
さいしょ、わたしはとてもまこちゃんがすきだった。でも、クラスの女の子が全部まこちゃんのファンとわかったら、ばかばかしくなったのでやめた。
「いいや、みんなのまこちゃんなんだから。」
と、まり公もいつかいってた。
一郎たち男の子も、まこちゃんがすきみたいだ。「やい短足。」なんて、一郎はまこちゃんにいうけど、いつも一目おいている。
こんどはみんなで、まこちゃんにかかっていった。土管の上のまこちゃんの城は、かんたんにあけわたされた。
十九人がずらりっとならんで、土管の上でお昼を食べた。歌もうたった。つぎからつぎへと、いろんな歌をうたった。
十九人の上で、空がすこしずつくらくなってきた。風はますますつよくなった。

「二時だ。出発しよう。」
まこちゃんがいった。みんな、歌をうたいつづけたまま、自転車にとびのった。
「かえりは追い風だ。らくらくつくぞ。」
と、先生がいった。なるほど、背中をおされるようにらくらくに走った。
グラマーのやっ子の声が、じょうずに風にのった。やっ子のリズム感はばつぐんなのだ。
風の方向が、そのときかわった。またむかい風になった。おまけに雨もぽつぽつふりはじめた。
先生からストップがかかって、みんなレーンコートをつけるよういわれた。
コートのないさだおに、先生はじぶんのジャンパーを着せた。さだおはすぐかぜをひくのだ。雨はだんだんはげしくなった。風がつよいので、レーンコートがめくれて、雨がからだにはいってくる。みんな、だまって、ペダルをこいだ。
わたしは一度だけ、「こんなにたいへんだなんて知らなかった。」と、ふまんみたいなものを心でつぶやいた。
でも、とにかく、サイクリングコースは走りおわった。
大通りにでたときには、あたりは夜のようにくらくて、車が明かりをつけて走っていた。
ドブネズミみたいになった十九人は、さいごの力をふりしぼって、大通りをわたった。
いちばんしんがりのまこちゃんが、暴走してきた車にはねられたのは、そのときだった。
まだ信号は青だった。しんがりをかってでたまこちゃんは、みながわたりおわったので、ほっとしながら

横断していたのだ。

うしろで、キーッとタイヤのすべる音がして、まこちゃんが道路になげつけられた。

気がくるったように、先生がなにかさけんでいた。つぎのしゅんかん、先生がまこちゃんをだきあげて、車にのりこんでいった。

それからさきのことは、今でも思いだせない。なにがなんだかわからなかった。

十七本のぼうのようになったわたしたちの上に、ただ雨がはげしくふっていた。

まこちゃんはそれから一週間して、病院で死んだ。死ぬまで一度も意識がもどらなかった。

まこちゃんのご両親は、川口先生をきびしくせめたてた。PTAも川口先生をゆるさなかった。

「先生がわるいんじゃない。」

と、わたしたちはさけんだけれど、わたしたちには、どうすることもできなかった。

先生は、小さなショルダーバッグをさげて、秋田にかえっていった。わたしたちはだまって、駅までついていった。だれにも、先生をひきとめることはできなかった。

わたしたちの教室から、まこちゃんと先生がいなくなって、何か月もたった。わたしたちは、あと三か月で六年生をおわろうとしている。

私立中学受験組のみんなは、ますますこわい顔をしてがんばっている。公立中学に進学する組は、大将のまこちゃんをうしなって、ちっともさえない。やっ子のビートルズさえ、炭酸のとんだコーラみたいだ。

わたしはときどき考える。あの五月の光がまぶしかった日のことは、ゆめだったのかなと。

まこちゃんの家の門はかたくとじたまま、しんとしずまりかえっている。「おす。」なんて、カキの木の上から手をふっていたまこちゃんは、ゆめの子どもだったのだろうか。

いなかにかえった先生からは、なんのたよりもこない。

(「人生なんて、いろいろあるんだよ。むかい風も追い風も、みんな人生さ。」なんて、かっこいいこといってた先生も、ほんとうはすごくわかくて、あんまりいろんなこと知らなかったんだな。)

なんて、今では思うのだ。

(わたしたちが一人前のおとなになったら、みんなで、先生のいなかにでかけていこう。そのときなら、あのゆめの日のことも、平気ではなせるかもしれない。)

と、そんなことを考えながら、わたしは、まこちゃんとあそんだうら山の道をいっきにかけのぼった。

また、あたらしい季節のくるけはいがしていた。

新井恵美子　一九三九年東京都に生まれる。学習院大学国文科中退。在学中に文芸部、児童文学研究会に籍をおき、随筆、童話を勉強。現在は三児の母。神奈川県横浜市在住。

(絵・岡本颯子)

わかれのことば

比江島重孝



「おい、かずお、見えるか?」
「うん、てつ。今、ろうそくがひとりじゃ。」
「よし、いくぞ。」
しずまりかえった放課後のろうか。そのろうかのすみっこから、六年三組の教室をのぞいていた子どもがふたり。てつやとかずおは、顔を見あわせながら、のっそりと教室にはいっていった。
教室には、ろうそくというあだ名をもらった松川先生がいた。ろうそくのようにやせのっぽで、ときどき頭に血がのぼって、かっかとどなりつけるので、このあだ名をもらったげな。が、子どもたちは、目の前の先生にろうそくとはいえない。
「先生、こんどのクラス対抗の全校リレーの選手には、やっぱりたかし君をだすんですか?」
てつやが、はや口でいった。

すると、ろうそくの目がきらりとひかった。
「なに、リレーの選手？　もうとっくにきまってるじゃないか？　たかしとまもるでは、たかしのほうが、むね一つはやかったぞ。」
「でも、先生、ほんまの実力は、まもる君が上じゃむん。」
　こんどはかずおの声。かずおはしんけんな顔をして、口もとをふるわせていた。が、ろうそくは、ゆっくりむねをそらして、わらいながらふたりを見つめた。
「きみたち、いったいなにをいいたいんじゃ。たかしとまもるは、どっちもはやいが、今年の予選じゃ、たかしが一着、まもるが二着だったじゃないか。ちゃんと予選をしているのに、文句があるのかい？」
　顔はわらっているが、しだいに、ろうそくの声ははげしくなった。だが、てつやもかずおもだまってはいなかった。こんなろうそくのことばは、はじめからちゃっかり計算ずくであった。
「先生。――ぼくたちふたりは、この前の日曜日に、まもる君がたかし君から、アイスクリームをおごってもらうのを見ていたんじゃ。」
「そのとき、たかし君がまもる君に、『なあ、たのむばい。あすはうんとがんばるから。』という声をきいたんじゃ。」
　てつやとかずおが、こうたいでいった。
「なあんだ。きみたち、そんなことをいいにきたのか。ご苦労なことじゃ。まるで友だちのつげ口じゃないか。そんないいかげんなことで、リレーの選手はかえられんぞ。」

ろうそくの声は、いちだんときげんがわるくなった。いまにも、かみなりがおちそうである。てつやとかずおは、とんだあてはずれになった。ふたりの考えでは、スポーツをアイスクリームなどで買収するなんて、ひきょうなことだと思っていたのである。ふたりの心のなかには、正義感が、どうどうとむねをはっていた。

が、先生はきげんがわるくなるばかり。かえって、こちらのほうがどなりつけられそうになった。

「先生、たかし君がリレーの選手になりたいために、まもる君を買収したんとちがうかい?」

かずおが顔を赤くして、ろうそくにくいさがっていった。

すると、こんどはろうそくの顔が、こきざみにうなずいた。

「よし、わかった。とにかく、きみたちはこのことをだまっておいてくれ。きみたちのいうことが真実であるのか、または想像であるのか、ぼくがよくしらべてみることにする。――さあ、ふたりとももどっていいわい。」

ようやく、てつやとかずおは、教室をでていった。ろうそくは、ひっそりとなった教室で、ひとりつぶやいた。

「こまったことをきいたもんじゃ。たかしとまもるは、無二の親友といってもよいほどのなかよしなのに、そんなばかなことをするものか。」

ろうそくはふたりのつげ口を、あまり信用しなかった。が、心の底では、なにかのまちがいであっても、そのまちがいをたしかめておきたいと思った。

ろうそくはかえりのしたくをしながら、まどの外を見つめた。ガラスまどのむこうには、運動会をまっているかのように、青い秋の空がひろがっていた。運動場の白いラインが、あざやかにトラックを走っていた。

バスをおりたろうそくは、児童公園のそばで、ふと足をとめた。

（おやっ。あれはたかしじゃないか。）

ろうそくの目が、一直線に公園の広場へのびていった。

広場では、たかしとまもるが、しきりにランニングをしていた。ランニングといっても、バトンタッチの練習であった。

「さあ、いくぞ、たかし君。もっと助走をつけてまっておらにゃ。」

まもるがたかしに声をかけた。まもるは白



いボール紙をまるくまいたバトンをにぎって、スピードをだしながら、たかしのそばへ走りこんでいく。すると、たかしが助走をしながら、すばやくバトンをうけとって走りだした。

「ようし。そのちょうし、そのちょうし。」

バトンをわたしたまもるが、うしろからたかしに声をかける。

つぎはたかしがバトンをにぎって、まもるにタッチした。ふたりは公園の広場で、むちゅうになってバトンタッチの練習をしていた。

ろうそくは、このようすを見ながら、首をかしげた。

「ふしぎなことじゃ。あんなにねっしんにバトンタッチの練習をしているのに、リレーの選手になることを、アイスクリームで買収したなんて。」



ろうそくはそうつぶやいた。そしてふたりには声もかけずに、歩きだした。

いよいよ運動会の日になった。

にぎやかなおうえんの声と音楽。万国旗が秋風にひらめいていた。プログラムはどんどん進行していく。

そして、子どもたちの人気をあつめていた〈クラス対抗の全校リレー〉になった。

たかしたちの学校は、一年から六年まで全部四クラスずつである。だから、この四クラス対抗のリレーが、運動会の名物になっていた。

各クラスとも、男女ひとりずつ、クラスでいちばんはやい選手がえらばれている。しかも六年生のたかしは、アンカーになってラストを走らなければならない。

「がんばれ、三組、三くみー。」

「がんばれ六年三組。」

「たかし君、たのむぞ。アンカーがんばれ。」

全校の子どもたちが、それぞれにじぶんのクラスの選手におうえんの声をあげた。

ピストルの音とともに、第一走者の一年生が、いっせいにスタートした。一年から二年、そして三、四年へとバトンがわたされていく。が、三組の男子リレーは、スタートから二着になったまま、四年になってもトップをきれなかった。ただ五年の選手だけは、あと一歩のところまでせんとうの走者を追いつめた。とうとうバトンは、たかしにタッチされた。

たかしはバトンをもぎとるようにしてうけとると、そのままいっきにスピードをだして、第一コーナーのカーブで、せんとうの選手にかたをならべた。第二コーナーのところでは、せんとうの選手をふりきって、一歩二歩と差をひろげる。

「がんばれ、たかし。」

「たかし君、ぬかれるな。」

「それいけ、それいけ。」

六年三組の子どもたちが、やんやと声をはりあげて、たかしをおうえんした。

ますますスピードをあげたたかしは、第三コーナーから、一直線にゴールめがけてとびこんだ。

「パン、パン。」

ゴールインのピストルがなった。

「かったぞ。三組がかったぞ。」

三組の子どもたちは、みんな、「ばんざい。」をさけんでよろこんだ。ろうそくも、たかしが一着でゴールインをするのを、しっかりと見つめていた。

「やっぱり、たかしを選手にしてよかったわい。」

ろうそくは、にっこりそうつぶやいた。

運動会がおわった二日めのこと。——朝からたかしのすがたが見えなかった。

「おい、たかしはどうしたんじゃ。欠席かい？」

「うん。あまり運動会でがま（はりきること）だしたんもんで、だれて（つかれて）しもうたんじゃ。」

「そんげなことがあるもんか。たかし君はリレーがおわってん（おわっても）、ぴんぴんしていたばい。」

クラスの子どもたちは、たかしが学校にこないので、わいわいかってなことをいっていた。

が、まもるだけは、じぶんのつくえについたままだまりこんでいた。まもるは、たかしの欠席を知っていた。しかし、まもるがそれをみんなに知らせなくたって、もうすぐたかしが学校にくるはずである。

まもるの顔は、なんとなくさびしそうにみえた。まもるはむねのなかにあふれているかなしみを、人に知られないように、じっとおさえつけていた。

やがて一時間めの始業のベルがなりひびいた。そして、ろうそくが教室にはいってきた。

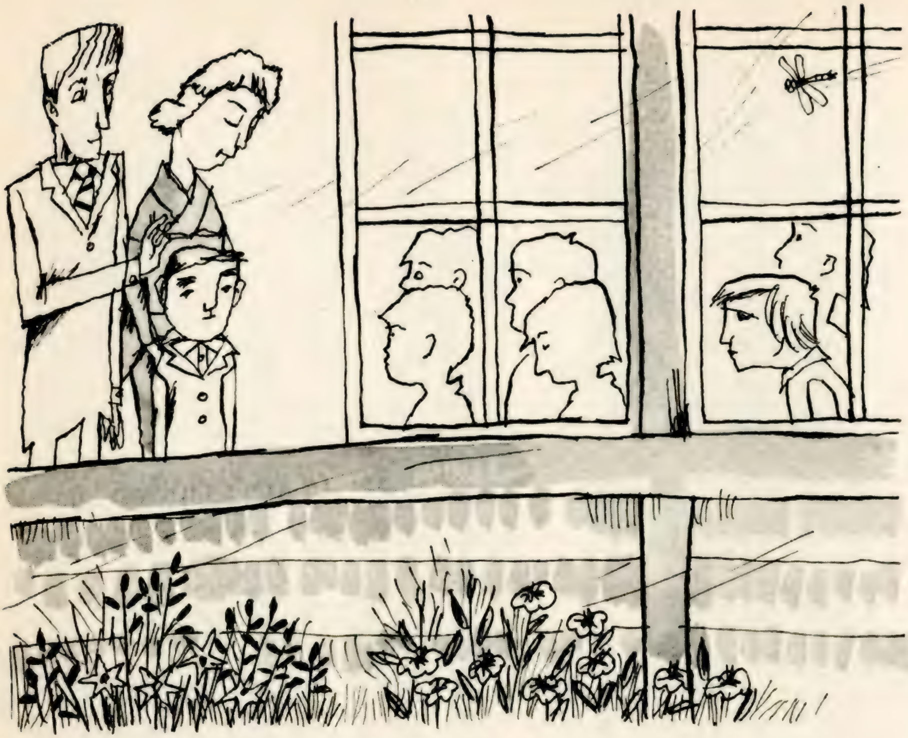
ところが、先生といっしょにたかしがはいってきたのである。たかしだけではない。たかしのうしろには、おかあさんが立っていた。

クラスの友だちは思わず、あっと声をあげた。学校に両親がついてくるのは、転校か転入学かの二つしかなかった。

（たかし君は、転校するんじゃ。）

みんなの視線が、たかしにあつまった。たかしは目をぱちぱちまばたいて、はずかしそうに顔を赤くしていた。

「みんなよくきいてくれ。――たかし君は、あすから福岡のほうへ転校していくことになったんじゃ。運動



会のリレーでは、たかし君ががんばったので、三組が優勝することができた。たかし君とわかれることはざんねんでならん。でも、たかし君のおとうさんの転勤じゃから、みんなで福岡へかわらなければならないそうじゃ。――六年三組のみんなは、いつまでもたかし君のことをわすれないでくれ。」

ろうそくの声で、教室はしいんとしずまりかえった。たかしのことでつげ口をしたてつやとかずおは、口をかたくむすんだまま、しんみょうな顔をしていた。

「そうじゃ。たかし君といちばんなかのよかったまもる君。きみが、わかれのことばをいってくれないか。」

まもるはふいに指名されて、むねがどきりとした。今までも転校のときは、なかのよい友だちが代表で、わかれのことばをいうことになってい

た。が、まもるはそれがじぶんであることを、ついうっかりしていたのである。

「さあ、まもる君。えんりょはいらんぞ。はやくわかれのことばをいってくれ。」

先生の声にうながされて、まもるがようやく立ちあがった。

「たかし君、いよいよおわかれになったね。ぼくときみは、三年生のときからリレーのライバルで、去年はぼくが選手になり、今年はたかし君が予選をかちぬいて選手になった。

ぼくときみは家が近かったので、よく公園の広場で、ランニングを練習したね。ぼくがかったり、きみがかったり、ぼくがバナナをおごったり、きみがアイスクリームをくれたり、でも走るときはいつも、せいせいどうどうとがんばって、一歩もゆずらんかったぞ。予選のある前の日も、『たのむばい。あすはうんとがんばるから。』といって、けっしてひきょうなことはせんかった。

たかし君、きみとぼくは、ほんとうのライバルじゃった。でも、あすからはもう、たかし君にもあえんのじゃ。たかし君。——福岡へいっても、ときどき手紙をくれよ。ぼくたち六年三組の者は、みんなたかし君とわかれることはのさん（つらい）と思うよ。たかし君、さようなら、元気でやれよ。」

まもるのことばは、びっくりするほどはっきりしていた。一つ一つのことばに、まもるとたかしの友情がこめられていた。

教室がまた、しいんとしずまりかえった。教室のなかには、ふしぎな感動がながれていた。

するとたかしが、今にもなきそうな声をあげて、

「まもる君……ありがとう。……みんな、ありがとう。」

といった。

それから、たかしとおかあさんは、クラスの友だちに何回も頭をさげながら教室をでていった。

六年三組の子どもたちは、じっとだまりこんで、しばらくはぼんやりとしていた。てつやとかずおは、ろうそくの顔がまともに見られないほど、かちかちになっていた。

（ぼくたちは、なんであんなことを、先生にいうたんじゃろか。）

ふたりのむねに、まもるのことばが、ひしひしとせめつけてきた。

が、ろうそくは、そ知らぬ顔で、

「さあ、みんな勉強をはじめるぞ。」

といって、国語の本をひらいた。



比江島重孝　一九二四年宮崎県に生まれる。大邱師範学校卒業。小学校長。「日本児童文学者協会」会員。「小さい旗」等所属。「宮崎作文の会」「宮崎県民話研究会」主宰。著書に『タンカタンカタン』『日向の民話』がある。宮崎県佐土原町在住。

（絵・うすいしゅん）



ご両親や先生がたへ（解説）

木暮正夫

　このシリーズの出発点には、児童文学作品による『現代子ども白書』をつくろうという発想がありました。白書に数字であらわされた子ども像ではなく、あるときは悩み、あるときは思いきりとびはねる子どもたちを描いてほしい、という私たち編集委員会の呼びかけに応じて、全国各地から、地域性ゆたかな力作が数多くよせられました。

　ここに収められた十七編は、その中の代表です。どの一編をとっても、現実の六年生が登場します。たしかな個性にかがやいているだけでなく、はじけるような躍動感にあふれていて、まばゆいばかりです。読者は自分の分身を随所に見いだして、共鳴しあうことでしょう。

『トマトとパチンコ』（後藤竜二）は、現代の子どもたちを描くことで定評ある作者が、きびしい農業生活者の現実を見つめて、鋭くふみこんで描いた作品です。トマト五箱ぶんで、チョコレート一枚のパチンコの景品。主人公のぼくは、そこから社会への目をひらいていくのです。父とのあいだにかよう情感が、たくみな会話に託されています。

『村の大事件』（笠原肇）も、北海道が舞台で、北海道新幹線の用地買収にからまる土地ブローカーの出現を、軽快なタッチで描いています。ここにくりひろげられている路線決定の悲喜劇によって、この主人公忠男も、現実のからくりに目ざめてゆきます。

　こうした子どもをとりまいている生活状況を見すえた作品に、**『メロンどろぼう』**（山田も



と）があります。作者の住む渥美半島が舞台で、ハウス栽培のマスクメロンは、村の収入源です。それを、サーフィンにやってくる都会の若者たちが、いたずら半分にとって食べるので、三人の子どもたちが、犯人をとらえようとするのですが、結局はしてやられる、笑えない喜劇です。

『爆音とキツネ』（久木田義雄）も、鹿児島にできた新空港をめぐって展開される、なまなましい物語です。開発と自然と生活のバランスを、考えないではいられません。

学校生活に目をむけると、**『ラーメン先生の恋人』**（山本静子）がゆかいです。新任の八木大助先生に、恋人があらわれたと思ったら、先生のねえさんだったというおちですが、六年生の女の子の心理をみごとに描いています。**『山のマラソン』**（小杉義雄）は、あばれんぼうの五郎と、西山先生との葛藤をリアルに描いていますが、読後感はきわめてさわやかです。**『さよなら分校』**（金重剛二）は、廃校になってしまう分校が舞台です。生徒が四人。三人が卒業すると、四年生の健二が残るだけになってしまいます。アナグマ先生とも別れて巣立っていく俊之たちに、拍手を送らずにはいられません。

この本のタイトルにもなっている**『風にのる六年生』**（新井恵美子）には、進学問題がテーマの底にすえられています。受験によってゆがめられていく友情と、事故の責任をとって、秋田に帰っていく先生。心の痛む作品ですが、明るい筆致がそれを救っています。**『わかれのことば』**（比江島重孝）は、リレーをめぐる小さな誤解と、友情のうつくしさを描いています。同じ友情でも、**『小さなあいつ』**（山本知都子）は、下級生への思いやりをあたたかく描いた



ものです。

『**ネコ魔女たいじ**』（竹入希代志）は、コミカルなタッチで、ネコずきなおばさんを皮肉って、六年生の行動の一面をとらえました。『**予想休業します**』（倉持正夫）もコミカルな運びの中に、思いつきの予言で友だちを傷つけた自己反省をこめた作品です。

六年生ころになると、行動力がひろがると同時に、自分にめざめていきます。『**六介の頭**』（砂川キミ子）は、髪のかたちのことから、自分とは、を考えさせますし、『**仮面をとった日**』（植田儀武）は、たしかな自分にめざめる過程を、マスクに象徴させています。

ユニークな少年像ということでは、『**おのれ君の六回めの立候補**』（角川千枝子）に登場する加勝己君など、最たるものでしょう。おのれ君がんばれと、声援を送りたくなる作品です。『**あたりまえのことを**』（有末省三）は、ふみきり事故をふせいで、マスコミにとりあげられた友人がいった、「あたりまえのことをしただけ」という言葉の意味を、主人公の正男が、自分も人を救ったことによって理解するまでの心理を、ていねいに書きこんでいます。『**山里にきた人形劇バス**』（松村茂）は、山村に生きる集団のすばらしさ、集団によって人形劇をつくりだしていくよろこびを、みごとに描ききった力作です。与えられた文化ではなく、自分たちの手で文化を創造していくことこそ、子どもの未来をひらくのだと、作者も私たちも信じています。



子どもの広場／6年生

風にのる六年生

N.D.C.913

1976年3月　1刷
1984年11月　23刷

編者　日本児童文学者協会
発行者　今村広
印刷所　壮光舎印刷株式会社
製本所　文勇堂製本工業株式会社

発行所　株式会社 偕成社
東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5
振替　東京5－1352番

 ISBN4-03-919060-2

published by KAISEI-SHA,　printed in Japan.

学年別／全六巻

子どもの広場

全国の学校・文庫・塾・子ども劇場の先生やお母さん・児童文学者など、日ごろ子どもたちに接している方たちが現代の子どもの姿を生き生きと描いた短編集

くじらになった一年生

かんちゃんの大はっけん＝花野チヤ子／おとうさんありがとう＝市川栄一／さくらんぼは二つで一つ＝川北りょうじ／うさぎのがっこう＝中野みちこ／他8編

コックさんは二年生

ちちんぷいぷいちちんぷい＝菅野礼子／かあちゃんわかくなれ＝高橋昭／おけらかい道＝赤木由子／ボールボーイ＝菊地正／ひさこのゆうびんやさん＝山本なおこ／他12編

走れ『三年一組号』

千円札とパトカー＝内田加津子／カー助かえってこい＝井上二美／おばちゃん塾は大さわぎ＝寺沢美智恵／つるつる校長＝鈴木新／へび座＝斎藤俊一／雨がさじけん＝高橋弘子／他13編

四年四組さくら色

その名は銀河号＝那須正幹／きえた大運動会＝中島信子／白い山道＝北村けんじ／さんちょっぱのしん＝米川みちこ／リタとそらまめ＝高橋蝶子／デデとポッポ＝鈴木初江／他9編

五年の夏やすみ

十八インチかて＝柴田克子／ゆずった版画展＝寺沢正美／クワガタムシとブローチ＝黒川常幸／ひみつの鏡台＝高橋忠男／飛べアゲハチョウ＝高井節子／他10編

風にのる六年生

トマトとパチンコ＝後藤竜二／村の大事件＝笠原肇／予想休業します＝倉持正夫／山里にきた人形劇バス＝松村茂／六介の頭＝砂川キミ子／他11編

日本各地のいろんな友だちが元気にゆかいに登場!!

＊日本児童文学者協会編

編集委員　北川幸比古／木暮正夫
長崎源之助／宮川ひろ





菊判・カバー装・平均194ページ・二色さしえ入り

この本の学年別表示について

この「子どもの広場」シリーズは１年生から６年生までの学年別になっています。それは、いちおう読者の側の便利さを思い、それぞれの年令にふさわしい作品に出会えるようにという配慮からです。

ただし、ほんとうにすぐれた児童文学には、出会いの下限年令はあっても上限年令はありません。ですからこの本の学年表示は、表示されている学年以上の年令なら何才まででも、と考えていただきたいと思います。



ISBN4-03-919060-2 C8393 ¥880E



この本は全国の学校・文庫・塾・子ども劇場の先生やおかあさん・児童文学者など、日ごろ子どもたちに接している方たちが、現代の子どもの生活を素材に、その実態をいきいきと描いた短編集です。日本各地のいろんな友だちが元気にゆかいに登場します。

偕成社／定価880円